

令和3年度～令和4年度 文部科学省委託事業

「これからの時代に求められる資質・能力を育むための
カリキュラム・マネジメントの在り方に関する調査研究」

カリキュラム・マネジメントの手引き



秋田県能代市教育委員会

実践校

能代市立第四小学校

能代市立能代第二中学校

能代市立ニツ井中学校

はじめに

今年度より、能代市教育委員会から不定期にフリーペーパー「つなぐ」を発行している。子どもと教師を「つなぐ」、学校と学校を「つなぐ」、教育委員会と学校を「つなぐ」等の願いを込めてのネーミング。

カリキュラム・マネジメントは、平成 29 年 3 月に告示された学習指導要領の改訂理念である「社会に開かれた教育課程」を実現するための方策である。具体的事象を考える中で、能代市小中学校実践校 3 校の 2 年間の実践と教育委員会担当の情熱から「カリキュラム・マネジメントとは『つなぐこと』である」という自分なりの理解に至った。体験と言語をつなぐ。単元をつなぐ。教科をつなぐ。暮らしとつなぐ。一年の期をつなぐ。人をつなぐ。課題と成果を次年度につなぐ。等々。

- ◆能代市立第四小学校は、「教育目標と日常をつなぐ実践」である。日常において意識することが難しい「目指す子ども像」を、全職員のワークショップにより検討し「資質・能力」を決定する。つまりは、当たり前前に存在する教育活動が全て教育目標につながることを価値付ける実践である。全職員で児童の姿から検証し、育てたい資質・能力につないだことが、参画意識を高めることにつながった。
- ◆能代市立能代第二中学校は、「教科の壁を超えてつなぐ実践」である。中学校で課題となる教科の壁を「サブジェクトフリー」という造語を用いて合い言葉とし、授業改善に特化して舵を切った。つまりは、カリキュラム・マネジメントの真髄は授業改善にあることを証明する実践である。授業改善を「自分事」にするために、模擬授業等の 2 回の事前研究会が、教職員の意識改革につながった。
- ◆能代市立二ツ井中学校は、「学校と地域をつなぐ実践」である。地域のよさに目を向ける取組が多い中、地域課題に目を向けることからスタートした。つまりは、地域課題解決のためには、地域を創る一人であるのだという、生徒の本気度を高めることが鍵を握る実践である。学校が地域に向けた本気の発信を、地域が受け止め、共に課題解決のために協働したことで、地域力強化につながった。

カリキュラム・マネジメントができる「教師の力」とは何か。3 校の実践から得た「教師の力」とは、①子どもや学校、地域の実態を適切に把握する力②教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科横断的な視点で組み立てる力③教育課程の実施状況を評価してその改善を図る力等である。

「よい学校」とはどのような学校だろう。子どもであれば「楽しい学校」。保護者・地域であれば「子どもが毎日行きたくなる学校」。教職員であれば「ここで働いてよかったと思える学校」ではないだろうか。本市の学校教育の基本方針は、「豊かな人間性を育む学校教育の推進」である。それぞれの立場によって「よい学校」の捉えは違うが、「子どもが豊かに成長する学校」であり続けるために、3 校のカリキュラム・マネジメント学校改革モデルの実践を、能代市の教師の情熱をもって波及させていきたいと思う。

秋田県能代市教育委員会学校教育課
課長 矢田部 瑞穂

目次

はじめに

第1章 「カリキュラム・マネジメント」概論

第1節	カリキュラム・マネジメントの概要	1
第2節	カリキュラム・マネジメント推進のポイント	3
1	教科等横断的で組織的な配列による資質・能力の育成	4
2	P D C Aサイクルの確立	5
3	地域等との連携（人的・物的な体制の確保）	6
4	実践校における教職員の意識について	7
第3節	本研究に関する本市の実態	11
1	持続可能な体制づくり	11
2	「コミュニティ・スクール」の活用	12
3	あきた型学校評価システムの活用	14
第4節	教職員のカリキュラム・マネジメントマインドを高めるために	15
1	全教職員によるグランドデザインの策定	15
2	可視化によるビジョンの共有	15
3	教職員の意識調査	16

第2章 カリキュラム・マネジメントの実践例

第1節 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点等）の設定及び実現に向けた取組

～能代市立第四小学校～

1	学校の教育目標等の設定のために	17
2	学校の教育目標等の実現のための取組（1年目）	19
3	学校の教育目標等の実現のための取組（2年目）	27
4	教育課程等の評価・検証・改善	34
5	成果と今後の展望	36

第2節 学校の基盤となる資質・能力の育成に向けた取組

～能代市立能代第二中学校～

1	「見方・考え方」を働かせた学びを深める生徒を育成するために	38
2	「教科の壁を超えた協働研究」への取組	43
3	その他の取組	54
4	教育課程の評価・検証・改善	56
5	成果と今後の展望	57

第3節 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた取組

～能代市立二ツ井中学校～

- 1 現代的な諸課題に対応するための資質・能力を育成するために・・・59
- 2 起業体験活動への取組・・・59
- 3 その他の取組・・・71
- 4 教育課程の評価・検証・改善・・・75
- 5 成果と今後の展望・・・78

第3章 研究の成果と課題

- 第1節 市としての成果と課題・・・79
- 第2節 カリキュラム・マネジメントQ&A・・・81
- 第3節 カリキュラム・マネジメント3か年計画について・・・88

おわりに

カリキュラム・マネジメント検討委員名簿

〈知りたい情報はここに〉

カリキュラム・マネジメントをスタートするにあたり、学校・教職員が準備・意識しなければならないこと

学校教育目標が言える。

→P17～19

学校教育目標達成のために、育成すべき資質・能力を全教職員で洗い出し、児童生徒にも分かるように可視化する。

→P18～20、29

育成すべき資質・能力をどの教科のどの単元で行うか「重点化」と「関連化」を図り、学年ごとの単元配列表を作成する。

→P4、25、33、72、73

育成すべき資質・能力を、各指導部、学年経営目標、学級経営目標に反映させ、教職員一人一人が年間を通して意図的・計画的に、児童生徒の資質の能力の育成について意識付けを図ることができるよう、PDCAサイクルを確立する。

→P5、23、24、30～32、43～55

それぞれの学校行事等は、どのような資質・能力を育てるのかについて説明できる。

→P33、61～70

第1章 「カリキュラム・マネジメント」概論



【第四小学校 1年 生活科】

カリキュラム・マネジメントとは、各学校が教育目標を実現するために、教育課程を計画的且つ組織的に編成・実施・評価し、教育の質を向上することを指しており、新学習指導要領において、これからの教育における重要な要素として位置付けられている。

本章では、新学習指導要領に記載されている定義を基に、カリキュラム・マネジメントの概論についてまとめるとともに、本市での推進の在り方について整理する。

第1節 カリキュラム・マネジメントの概要

新学習指導要領（第1章 総則）には、カリキュラム・マネジメントについて、次のように定義されている。

第1 小学校（中学校）教育の基本と教育課程の役割

- 4 各学校においては、児童や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科横断的な視点で組み立てていくこと、教育課程の実施状況の評価してその改善を図っていくこと、教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと（以下「カリキュラム・マネジメント」という。）に努めるものとする。

また、学校運営に関しては、次のように記載されている。

第5 学校運営上の留意事項

1 教育課程の改善と学校評価等

- ア 各学校においては、校長の方針の下に、校務分掌に基づき教職員が適切に役割を分担しつつ、相互に連携しながら、各学校の特色を生かしたカリキュラム・マネジメントを行うよう努めるものとする。また、各学校が行う学校評価については、教育課程の編成、実施、改善が教育活動や学校運営の中核となることを踏まえ、カリキュラム・マネジメントと関連付けながら実施するよう留意するものとする。

以上のことを整理すると、カリキュラム・マネジメント推進のポイントとして、次の3点にまとめられる。

1 教科横断的で組織的な配列

各教科等を関連させながら、学校の教育目標達成に必要な教育課程を組織的に配列し、すべての教科等がそれぞれの役割を果たすことで、知能や技能にとどまらず、思考力や判断力、表現力の育成につなげる。

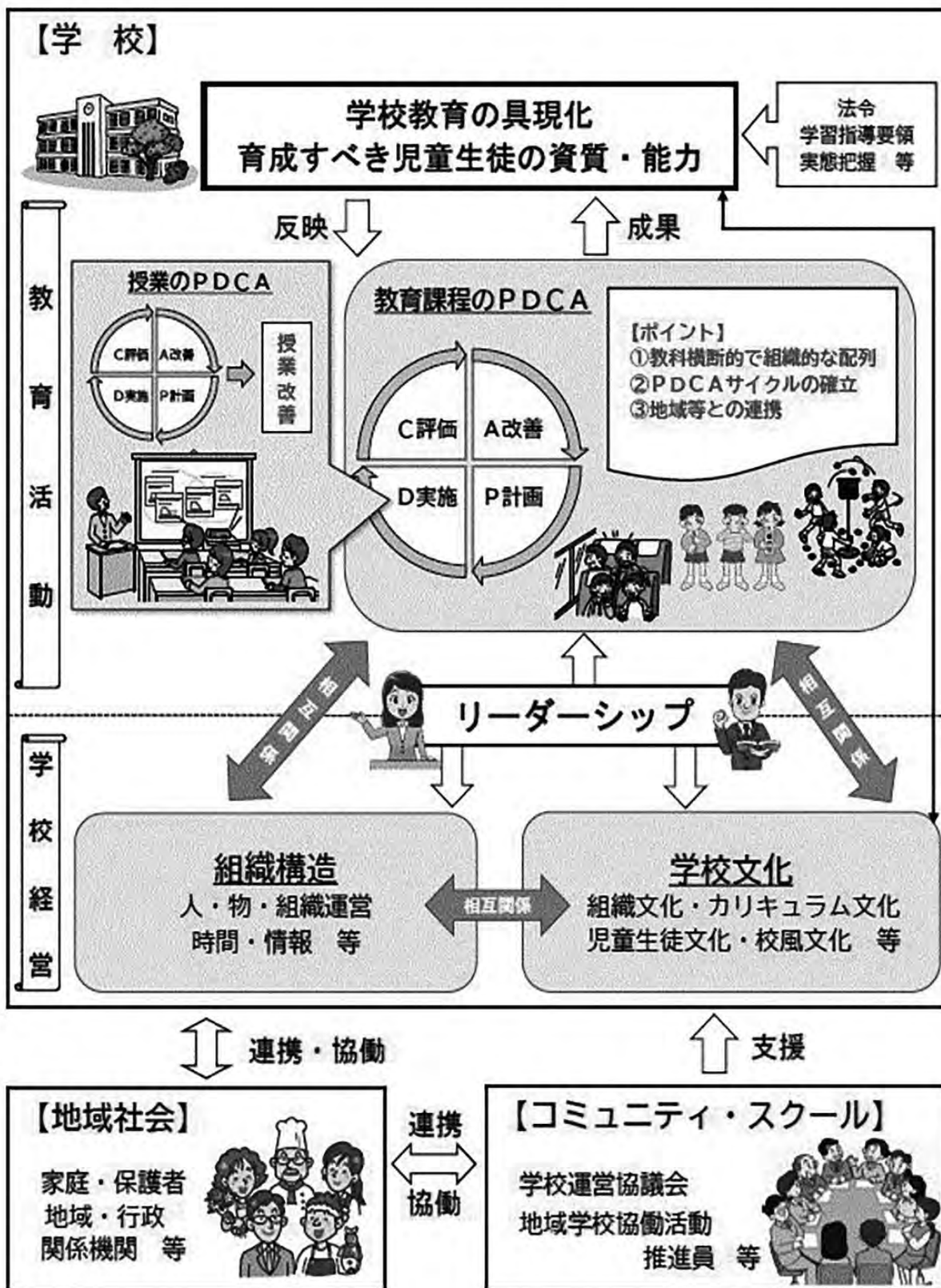
2 PDCAサイクルの確立

児童生徒の実態や地域の現状に関する調査結果とデータに基づいて教育課程を編成し、実施した後に評価と改善を行う。

3 地域等との連携

地域と連携し、教育に必要な人材、資源を外部に求める。子どもたちが育む資質や能力は、社会で活躍するために必要不可欠であり、地域と連携した授業を組むことで、より大きな効果が期待できる。

<カリキュラム・マネジメントのイメージ図>



第2節 カリキュラム・マネジメント推進のポイント

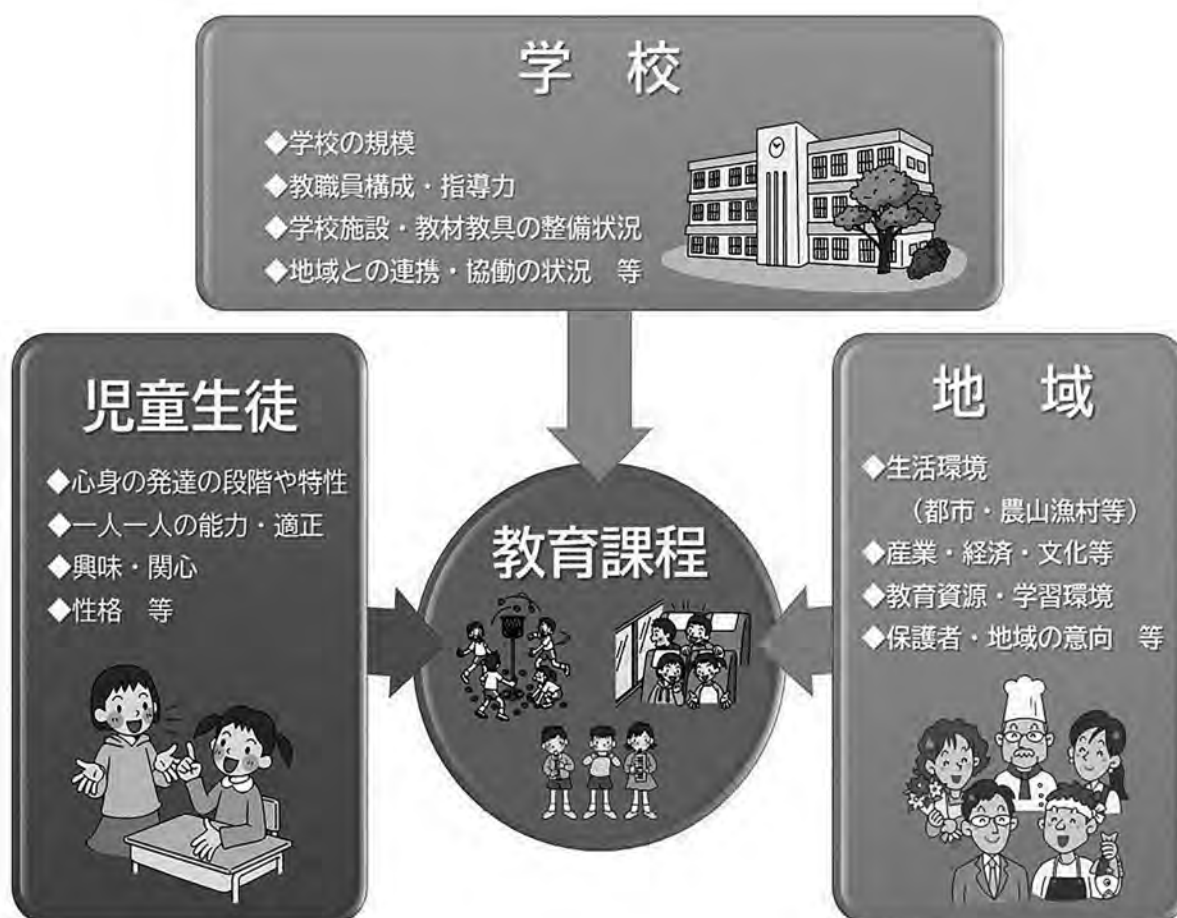
まずは、カリキュラム・マネジメントの推進にあたり、「実態把握」が重要なポイントとなる。新学習指導要領（第1章 総則）には、次のように記載されている。

第1 小学校（中学校）教育の基本と教育課程の役割

- 1 各学校においては、教育基本法及び学校教育法その他の法令並びにこの章以下に示すところに従い、児童（生徒）の人間としての調和のとれた育成を目指し、児童（生徒）の心身の発達の段階や特性及び学校や地域の実態を十分考慮して、適切な教育課程を編成するものとし、これらに掲げる目標を達成するよう教育を行うものとする。

また、下の図のように、児童生徒・学校・地域の実態を十分に把握することで、適切な教育課程の編成につなげていく。さらには、学校間の接続もあることから、同地域の幼稚園・保育園・子ども園の状況、小学校・中学校の状況についての把握も必要である。なお、実態把握の方法としては、各種調査結果、アンケート結果、データ等の活用が考えられる。

各学校においては、各種調査結果やデータ等に基づき、児童生徒の姿や学校及び地域の現状を定期的に把握するとともに、保護者や地域住民の意向等を的確に把握した上で、学校の教育目標など教育課程の編成の基本となる事項を定めていくことが求められる。



では、これらの実態を把握した上で、「カリキュラム・マネジメントの三つの側面」から推進のポイントを考えていく。

1 教科等横断的で組織的な配列による資質・能力の育成

新学習指導要領（第1章 総則）には、教科等横断的な視点に立った資質・能力について、次のように記されている。

第2 教育課程の編成

2 教科等横断的な視点に立った資質・能力

(1) 学習の基盤となる資質・能力

各学校においては、児童（生徒）の発達段階を考慮し、言語能力、情報活用能力（情報モラルを含む。）、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力を育成していくことができるよう、各教科等の特質を生かし、教科等横断的な視点から教育課程の編成を図るものとする。

(2) 現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力

各学校においては、児童（生徒）や学校、地域の実態及び生徒の発達の段階を考慮し、豊かな人生の実現や災害等を乗り越えて次代の社会を形成することに向けた現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力を、教科等横断的な視点で育成していくことができるよう、各学校の特色を生かした教育課程の編成を図るものとする。

(1) 学習の基盤となる資質・能力について



日々の学習や生涯にわたる学びの基盤となる資質・能力を、児童生徒の発達段階を考慮し、教科等横断的な視点で育むことができるよう、教育課程を編成する。学習の基盤となる資質・能力として、左図の三つの能力等が挙げられている。これ以外にも、各学校では児童生徒の実態等を踏まえ、学習の基盤づくりとなる課題を明確にし、カリキュラム・マネジメントの中でその育成が図られるよう努める。

(2) 現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力について

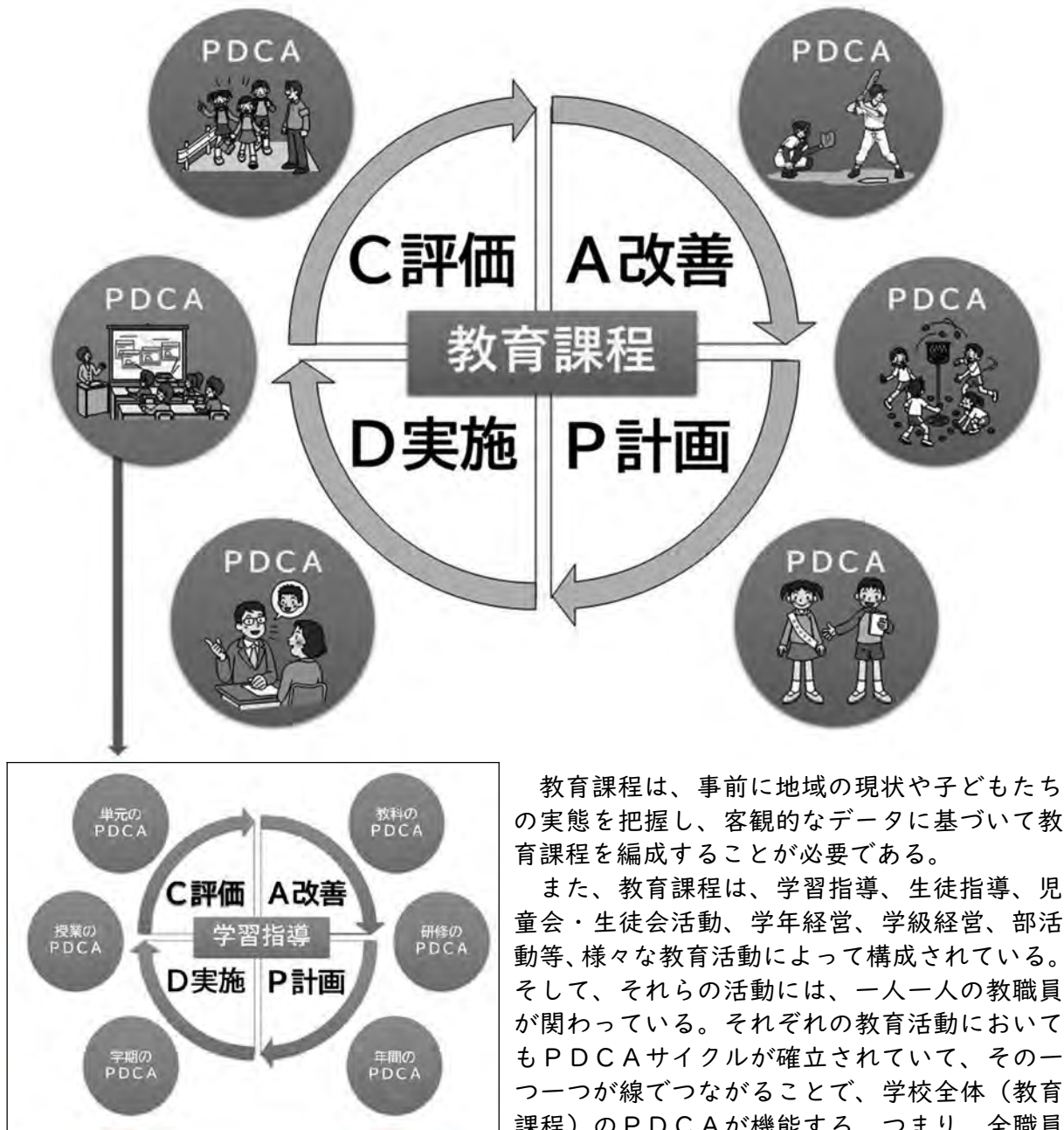
豊かな人生の実現や災害等を乗り越えて次代の社会を形成することに向けた現代的な諸課題に照らして必要となる資質・能力を、それぞれの教科等の役割を明確にしながら、教科等横断的な視点で育むことができるよう、教育課程を編成する。

< 現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力（中央教育審議会答申より） >

- ・健康、安全、食に関する力
- ・新たな価値を生み出す豊かな創造性
- ・持続可能な社会をつくる力
- ・豊かなスポーツを実現する力
- ・主権者として求められる力・地域創生等に生かす力
- ・多様な他者と協働しながら目標に向かって挑戦する力

各学校では、児童生徒や学校、地域の実態等を踏まえ、学校の特色を生かした目標や指導の重点を計画するとともに、教育課程を編成・実施し、カリキュラム・マネジメントの中で資質・能力の育成が図られるよう努める。

2 PDCAサイクルの確立



教育課程は、事前に地域の現状や子どもたちの実態を把握し、客観的なデータに基づいて教育課程を編成することが必要である。

また、教育課程は、学習指導、生徒指導、児童会・生徒会活動、学年経営、学級経営、部活動等、様々な教育活動によって構成されている。そして、それらの活動には、一人一人の教職員が関わっている。それぞれの教育活動においてもPDCAサイクルが確立されていて、その一つ一つが線でつながることで、学校全体（教育課程）のPDCAが機能する。つまり、全職員

がカリキュラム・マネジメントに関わる主体性をもつことになる。改善が必要なことは、教職員同士で共有し合い、柔軟に変化させながら適切な教育課程をつくりあげていく。

なお、教育課程の評価、改善については、新学習指導要領（第1章 総則）に次のように記載されており、学校評価と関連付けながら実施することが必要である。

第5 学校運営上の留意事項

1 教育課程の改善と学校評価等

ア 各学校においては、校長の方針の下に、校務分掌に基づき教職員が適切に役割を分担しつつ、相互に連携しながら、各学校の特色を生かしたカリキュラム・マネジメントを行うよう努めるものとする。また、各学校が行う学校評価については、教育課程の編成、実施、改善が教育活動や学校運営の中核となることを踏まえ、カリキュラム・マネジメントと関連付けながら実施するよう留意するものとする。

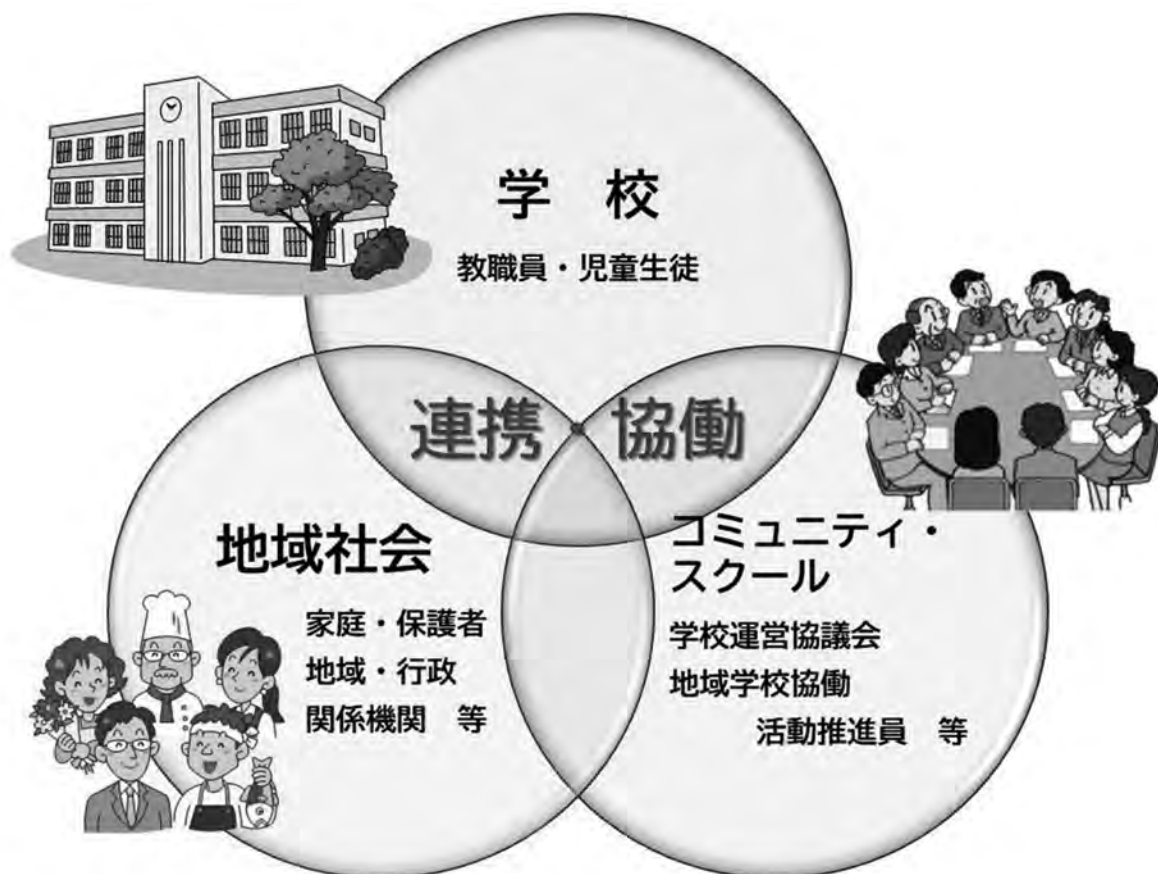
3 地域等との連携（人的・物的な体制の確保）

新学習指導要領（第1章 総則）には、家庭や地域社会との連携及び協働について、次のように記載されている。

第5 学校運営上の留意事項

2 家庭や地域社会との連携及び協働と学校間の連携

ア 学校がその目的を達成するため、学校や地域の実態等に応じ、教育活動の実施に必要な人的又は物的な体制を家庭や地域の人々の協力を得ながら整えるなど、家庭や地域社会との連携及び協働を深めること。また、高齢者や異年齢の子供など、地域における世代を超えた交流の機会を設けること。



これからの時代に求められる資質・能力を育むためには、各教科等の内容と教育課程全体とを往還させるとともに、教育に必要な人材、資源等を再配分することが求められる。

例えば、授業で専門性の高い内容を扱う際に、教員だけでは対応しきれないことがある。そういったとき、専門知識のある地域の人に授業の補助を依頼することで、充実した学習活動を展開させることが可能になる。また、地域の人に協力してもらうことで、子どもたちが、将来社会で活躍するために重要な社会や地域とのつながりを意識させることにも役立つ。

また、コミュニティ・スクールの導入により、学校運営協議会を通して、目標やビジョンを共有し、学校や地域、子どもが抱える課題に対して、関係者が当事者意識をもちながら連携・協働する取組が可能となる。さらに、教職員の人事異動に関わらず、学校運営協議会により地域との組織的な連携・協働体制を継続することが可能となり、「持続可能」な教育活動を展開することができる。

4 実践校における教職員の意識について

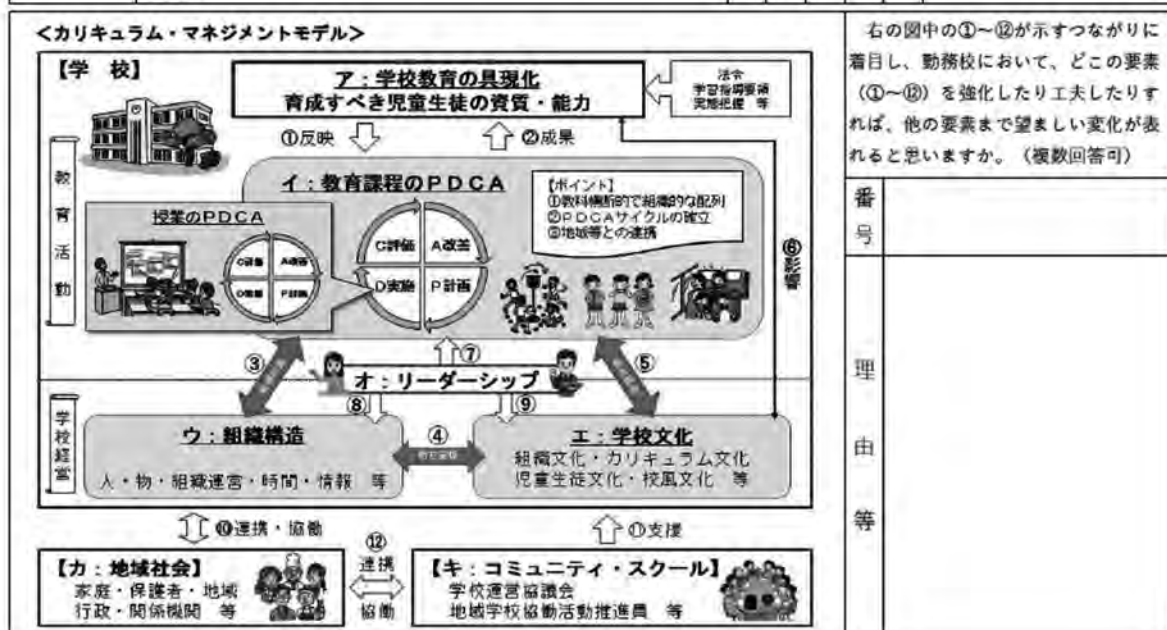
カリキュラム・マネジメントを推進する上で、学校組織の中での教職員の意識の在り方こそ、大きな影響力をもつと考えられる。

そこで、「カリキュラム・マネジメント検討用シート」（出典：田村知子・村川雅弘・吉富芳正・西岡加名恵編著『カリキュラムマネジメント・ハンドブック』ぎょうせい、2016）を改編し、実践校における1年目の教職員の意識調査を行った。

(1) 意識調査項目

要素 (カリキュラム・マネジメントモデル参照)	項目 (カリキュラム・マネジメントの基本的な実践内容)	評価(ひとつに○)					記述 (その他気付いたこと、改善点)	
		よくあてはまる	あてはまる	あてはまるかといえない	あてはまらない	わからない		
ア 教育目標	学校全体の学力傾向、その他の実態や課題について、全教職員で共有している。	4	3	2	1	*		
	学校の教育目標や重点目標は、児童生徒や地域の実態を踏まえて設定されている。	4	3	2	1	*		
	学校の教育目標や重点目標は、「児童生徒につけたい力」「めざす児童生徒像」として具体的に記述されている。	4	3	2	1	*		
イ カリキュラムのPDCA	P:計画	学校経営計画、学年経営案、学級経営案は、それぞれの目標や内容が連動するよう作成されている。	4	3	2	1	*	
		各教科等の教育目標や内容の相互関連が一目で分かるような、全体計画や年間指導計画等が作成されている。	4	3	2	1	*	
		年度当初に教育課程を計画する際、評価基準や方法、時期などを合わせて計画している。	4	3	2	1	*	
	D:実施	大方の教職員は、学校の教育目標や重点目標を意識して、授業や学校行事に取り組んでいる。	4	3	2	1	*	
		大方の教職員は、各教科等の教育目標や内容の相互関連を意識して、日々の授業を行っている。	4	3	2	1	*	
		大方の教職員は、既習事項や先の学年との系統性を意識して指導している。	4	3	2	1	*	
	C:評価	大方の教職員は、学校の年間指導計画の改善に役立つような記録(メモ)を残している。	4	3	2	1	*	
		児童生徒の学習成果の評価だけでなく、教育課程や授業の評価も行っている。	4	3	2	1	*	
		学校として取り組んでいる授業研究が、学校の課題解決に役立っているかについて評価している。	4	3	2	1	*	
	A:改善	教育課程の評価を、確実に次年度に向けた改善活動につなげている。	4	3	2	1	*	
		全国学力・学習状況調査や県学習状況調査・市及び学校の学力検査等の分析結果を参考に、対象学年だけでなく学校全体で指導計画(内容の組織)を見直し改善している。	4	3	2	1	*	
		全国学力・学習状況調査や県学習状況調査・市及び学校の学力検査等の分析結果を参考に、対象学年だけでなく学校全体で具体的な指導法を見直し改善している。	4	3	2	1	*	
ウ 組織構造 (人、物、財、組織と運営、時間、情報など)	大方の教職員は、学校の授業研究の成果を日々の授業に積極的に生かしている。	4	3	2	1	*		
	教育課程の編成、評価や改善には全教職員が関わっている。	4	3	2	1	*		
	めざす教育活動を行うために必要な研究・研修ができるよう、時間確保への配慮がなされている。	4	3	2	1	*		
	教職員が、他校や研修期間などの学校外での研修に、積極的に参加できるように支援されている。	4	3	2	1	*		
	目指す教育活動を行うために、教員以外の各指導員・支援員等と連携・協力している。	4	3	2	1	*		

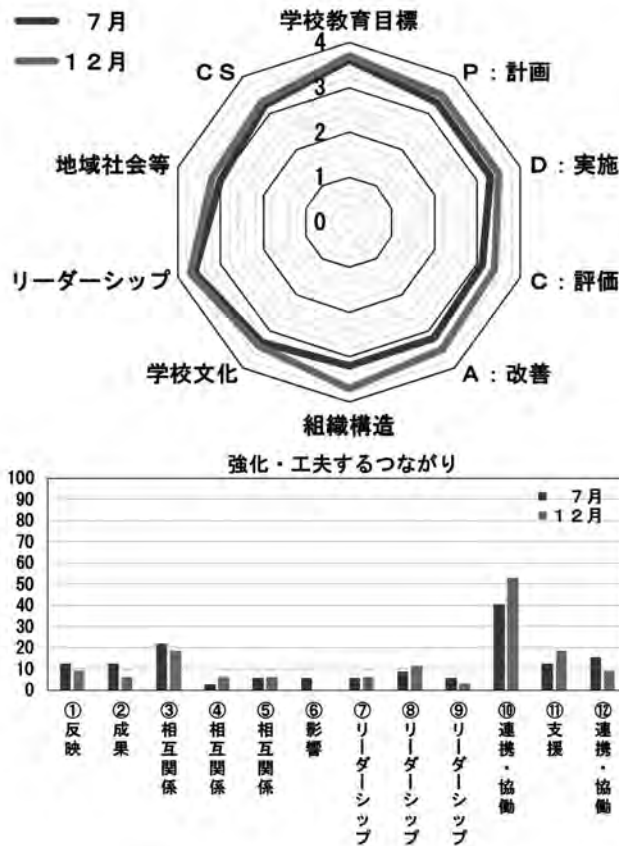
要素 (カリキュラム・マネジメントモデル参照)	項目 (カリキュラム・マネジメントの基本的な実践内容)	評価(ひとつに○)					記述 (その他気付いたこと、改善点)
		よくあてはまる	あてはまる	あてはまらなそうい	あてはまらなそうい	あてはまらなそうい	
エ 学校文化 (カリキュラム文化、組織文化、個人的価値観)	大方の教職員は、学校が力を入れている特色ある実践を具体的に説明することができる。	4	3	2	1	*	
	大方の教職員は、自己の知識や技能、実践内容を相互に提供し合う姿勢がある。	4	3	2	1	*	
	大方の教職員は、学級や学年の越えて、児童生徒の成長を伝え合い、喜びを共有している。	4	3	2	1	*	
	大方の教職員は、自分の担当学年・教科だけでなく、教育課程全体で、組織的に児童生徒を育てていくという気持ち強い。	4	3	2	1	*	
オ リーダーシップ	校長は、教育と経営の全体を見通しビジョンや戦略を示している。	4	3	2	1	*	
	教頭は、ビジョンの具体化を図るために、学校として協働して取り組む体制や雰囲気づくりに尽力している。	4	3	2	1	*	
	中堅教員は、ビジョンをもとにカリキュラムの工夫や研究推進の具体策を示して実行している。	4	3	2	1	*	
	全教職員が、立場や役割に応じてリーダーシップを発揮している。	4	3	2	1	*	
カ 地域社会	P T Aや学校報等を通して、学校の教育の成果と課題を保護者・地域と共有し、共に解決策を考えたり行動したりする機会がある。	4	3	2	1	*	
	めざす教育活動のために、図書館・博物館・科学館等を積極的に利用している。	4	3	2	1	*	
	地域の人材や素材を積極的に活用する教職員が多い。	4	3	2	1	*	
	多くの職員が、国や都道府県・市町村教育委員会主催の教員研修に積極的に参加している。	4	3	2	1	*	
キ コミュニティ・スクール	国や都道府県・市町村が提供している資料等を積極的に活用している。	4	3	2	1	*	
	学校運営協議会を通して、保護者や地域等と学校運営の基本方針や教育活動について共有している。	4	3	2	1	*	
	学校や地域、児童生徒が抱える課題等に対して、関係者が当事者意識をもち、役割分担をしながら連携・協働している。	4	3	2	1	*	
	学校運営協議会で出された意見を反映させて、学校運営や教育活動をよりよくしようとしている。	4	3	2	1	*	
	地域学校協働活動推進員と連携しながら、地域学校協働活動を推進している。	4	3	2	1	*	



(出典：田村知子・村川雅弘・吉富芳正・西岡加名恵編著『カリキュラムマネジメント・ハンドブック』ぎょうせい、2016) 改編

(2) 調査結果

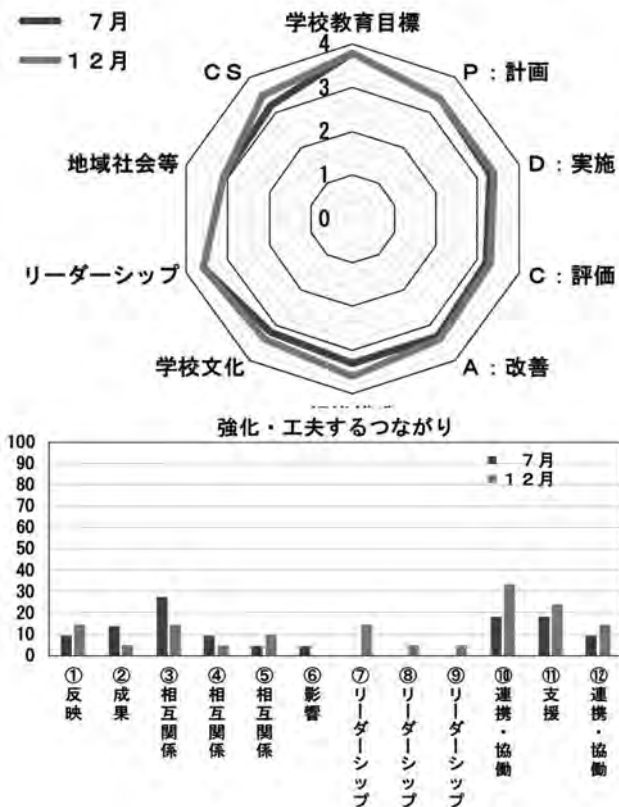
< 第四小 >



【実践校の分析】

- ・ 評価の改善が顕著だった「要素」は、「C: 評価」「A:改善」「組織構造」の3点であった。
- ・ 「C:評価」「A:改善」については、2学期全校体制で授業研究会と授業を見合う会を実施し、授業改善につなげることができた。
- ・ 「組織構造」については、重点的に取り組みたい教科・単元を学年部ごとに「一覧表」に整理した。また、併せて重点とした単元の指導成果の評価も行い、成果の実感につなげることができた。
- ・ 今後の改善点としては、地域社会との「連携・協働」の充実に努めたい。「総合的な学習の時間」の充実を目指し、3年生以上の各学年で「特徴的な一単元」の開発・整理を予定している。その取組の中で、「連携・協働」の具現化を図りたい。

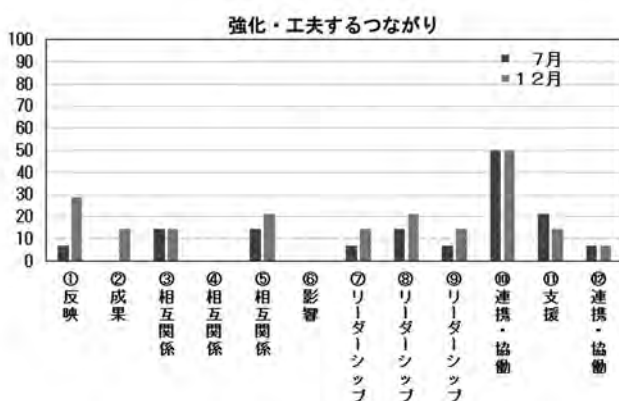
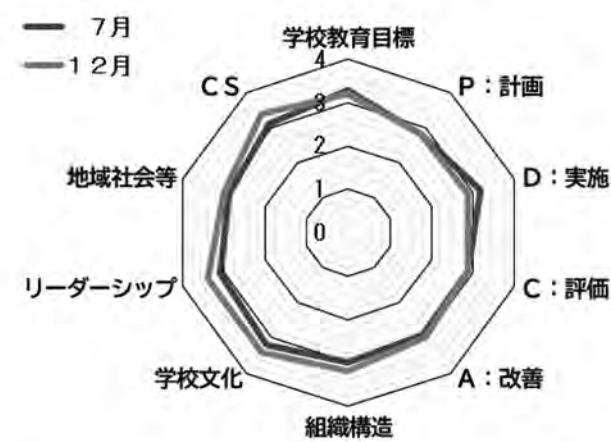
< 能代第二中 >



【実践校の分析】

- ・ 「学校教育目標」に関しては、全教職員で共有している。学校の学力傾向、実態、課題、教育目標、重点目標についての意識が高い。「ア教育目標の具現化」と「イ教育課程のPDCAの①反映②成果」を強化したいと考えている教員が多いことの表れと思われる。
- ・ 「学校文化」に関しては、協働研究「サブジェクトフリー」が全教職員の共通理解と実践に大きくつながった。「④ウ組織構造とエ学校文化」「⑤エ学校文化とイ教育課程のPDCA」の相互関係を強化したいと考えている教員の存在がある。
- ・ 「コミュニティースクール」に関しては、地域学校協働推進員との連携で、二中若活動が成功できた。「強化・工夫するつながり変容」で⑩⑪⑫を強化したいと考えている教職員が多い。

<ニツ井中>



【実践校の分析】

- ・全体的には7月と比べ数値の上昇が見られたが、「D:実施」のポイントが下がっている。
- ・「きみまちカンパニー」としての活動は効果や成果を上げた。しかし、その活動によって生徒が目指す生徒像に近付いているのか、教師が授業と関連付けたり系統性を意識したりしているかといった視点で考えると、課題も多い。
- ・「反映」と「リーダーシップ」の強化・工夫を望むポイントが上がっていることから、カリキュラム・マネジメント及びきみまちカンパニー活動は、管理職や担当者が推進していくべき活動と捉えている職員も多いのではないか。職員一人一人がカリキュラム・マネジメントに取り組む意識改革を促す必要があると考える。その意識をもつことが、「反映」にも影響を及ぼしていくと思われる。

第3節 本研究に関する本市の実態

本市は、全国学力・学習状況調査及び県学習状況調査の教科の調査において、県平均を上回るなど良好な状況が続いている。質問紙調査においても、自尊意識や規範意識、地域との関わり、学習意欲等の項目で肯定的回答の割合が高い。特に、授業内での発表、話し合い、振り返りへの取組については、9割以上の児童生徒が肯定的回答をしている。このことにより、各校における「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が進んでいるものと認識している。

令和2年度からは中学校区を基本単位とした「コミュニティ・スクール」を導入し、これまで以上に地域の教育力を教育課程に活用しながら、地域ならではの創意や工夫を生かした特色ある学校づくりを進めている。今後は、「コミュニティ・スクール」の仕組みを活用し、「社会に開かれた教育課程」の視点を基に、学校と地域が連携したカリキュラムを強化するなど、全校でカリキュラム・マネジメントを推進していこうとしているところである。

1 持続可能な体制づくり

子どもたちが未来の創り手となるために必要な資質・能力を育むカリキュラム・マネジメントにしていくためには、児童生徒や学校、地域の実態を適切に把握しながら、カリキュラム・マネジメント推進の三つのポイントについて持続的に取り組む必要がある。

そのために本市では、次のことに取り組む。

(1) 学校経営等のビジョンの共有

- ・教職員との共有：職員会議での「学校経営目標」「経営の重点」「育てたい資質・能力」等の提示
- ・保護者との共有：PTAや学校報での保護者への学校経営ビジョンの提示
- ・地域等との共有：学校運営協議会での学校経営ビジョンの提案

(2) 校内体制の工夫

- ・学校のランドデザインの明確化と教職員の意識の方向性の共有
- ・全教職員で教育課程経営に取り組むための校務分掌の見直しとスリム化

(3) PDCAサイクルの構築（「あきた型学校評価の活用」）

- ・当該年度に達成すべき目標の重点化と具体を図り、計画と評価を整合させたPDCAサイクルの推進や評価シートによる全体進行の状況の管理
- ・学校評価の学校運営協議会への公表

(4) 地域との連携

- ・市内すべての中学校エリアでコミュニティ・スクールの導入（R2～）
- ・市内すべての中学校エリアで地域学校協働活動推進員の配置（R3～）

2 「コミュニティ・スクール」の活用

家庭・地域との連携を図る上で大きな役割を担っているのが、「コミュニティ・スクール」である。解説（総則編）には、次のように記述されている。

なお、学校における教育活動が学校の教育目標に沿って一層効果的に展開されるためには、家庭や社会と学校との連携を密にすることが必要である。すなわち、学校の教育方針や特色ある教育活動の取組、生徒の状況などを家庭や社会に説明し、理解を求め協力を得ること、学校が家庭や地域社会からの要望に応えることが重要であり、このような観点から、その積極的な連携を図り、相互の意思の疎通を図って、それを教育課程の編成、実施に生かしていくことが求められる。保護者や地域住民が学校運営に参画する学校運営協議会制度(コミュニティ・スクール)や、幅広い地域住民等の参画により地域全体で生徒の成長を支え地域を創生する地域学校協働活動等の推進により、学校と地域の連携及び協働の取組が進められてきているところであり、これらの取組を更に広げ、教育課程を介して学校と地域がつながることにより、地域でどのような子供を育てるのか、何を実現していくのかという目標やビジョンの共有が促進され、地域とともにある学校づくりが一層効果的に進められていくことが期待される。

(1) コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）とは

コミュニティ・スクールとは、学校運営協議会を設置した学校のことである。子どもたちや学校を取り巻く環境が複雑化・多様化する中、子どもたちや地域の輝く未来を創るためには、「地域ぐるみ」での対応や学校・家庭・地域による一体的な取組が必要となる。それを実現可能にする仕組の一つが、コミュニティ・スクールである。

(2) 期待される効果について

①目標・ビジョンの共有＝「協働」活動

学校運営協議会を通して、子どもたちがどのような課題を抱えているのか、地域でどのような子どもを育てていくのか、何を実現していくのかという目標やビジョンを共有できる。

②当事者意識・役割分担＝地域ぐるみ

校長が示す学校運営の「基本方針の承認」を通し、学校や地域、子供たちが抱える課題に対して関係者が当事者意識をもち、役割分担しながら「連携・協働」による取組ができる。

③組織的・継続的な体制の構築＝持続可能性

教職員の人事異動に関わらず、学校運営協議会によって地域との組織的な連携・協働体制が接続可能となる。

(3) 本市の実態

本市では、平成26年度の鶴形小学校（平成31年度に第五小と統合）を皮切りに、平成29年度には常盤小・中学校（常盤中：平成31年度に東雲中と統合、常盤小：令和2年度に向能代小と統合）、令和元年度には、二つの中学校エリア（能代東中学校エリア・ニツ井中学校エリア）、そして、令和2年度までに市内全ての中学校エリアにコミュニティ・スクールを導入している。



令和2年度からは、本市の学校教育重点施策の一つ目に「学校運営協議会（コミュニティ・スクール）制度の構築」について、次のように掲げている。

(1) 主体的で創意ある教育活動の推進

- ・地域と学校が一体となる学校運営協議会（コミュニティ・スクール）制度の構築
 - ①学校・家庭・地域の連携・協働による、子どもたちの成長を支える活動の推進
 - ②小・中の系統性を踏まえた、地域全体で子どもを育む体制づくり

中学校エリアごとに小・中合同の学校運営協議会を開催し、また、令和3年度からは地域学校協働活動推進員を配置して、地域と学校の情報共有を図るとともに、地域と学校がパートナーとして協働することができるよう働きかけている。

<体制>



* 第四小学校の児童が能代第二中学校と能代南中学校に進学するため、兼任となっている。

3 あきた型学校評価システムの活用

あきた型学校評価システムとは、当該年度に達成すべき目標の重点化と具体化を図り、目標達成のための具体的な取組内容や推進状況を、保護者や地域住民に公表するとともに、保護者や地域住民の支援・協力を得て、PDCAサイクルの流れの中で学校・家庭・地域が一体となって学校教育の充実・改善を図っていかうとするものである。

また、あきた型学校評価システムにより、右の学校評価シートを、学校運営協議会のコミュニケーション・ツールとして活用することで、学校と保護者、地域が一体となった学校教育の充実・改善を図ることに努めている。



学校評価シートの様式例

①	評価領域	
②	重点目標	P
③	現状	
④	具体的な目標	
⑤	目標達成のための方策	
⑥	具体的な取組状況	
⑦	達成状況	D
⑧	自己評価 (評価) (概要)	C
<small>評価基準 A 具体的な活動がなされ目標を達成できた B 具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない C 具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない</small>		
⑨	学校関係者評価と意見 (評価) (意見)	C
⑩	自己評価及び学校関係者評価に基づいた改善策	A

<あきた型学校評価三つのポイント>

- 1 市町村の課題や各学校の課題を基に、当該年度に達成すべき目標の重点化と具体化を図り、成果をできるだけ数値化して取り組む。
- 2 目標と達成のための具体的方策を保護者や地域に公表し、目標の達成を目指して学校・家庭・地域が一体となって取り組む。
- 3 具体的な取組状況や達成状況、評価結果を保護者や地域に公表するとともに、結果に基づいた改善策を講じる。

第4節 教職員の※1カリキュラム・マネジメントマインドを高めるために




カリキュラム・マネジメントを充実させていくためには、カリキュラム・マネジメントが管理職だけのものではなく、全ての教職員が関わるものでなければならない。「カリキュラム・マネジメントマインド (CMM)」(授業、単元、年間指導計画、学校全体のカリキュラムといった、様々な層の授業実践の関係性を意識すること、カリキュラムと授業の双方向の視点をもつこと)を、すべての教職員が意識しながら実践していくことが必要である。そのために、次のような取組が考えられる。

※1カリキュラム・マネジメントマインド (CMM)…秋田大学教育文化学部こども発達・特別支援講座 准教授 細川和仁氏による

1 全教職員によるグランドデザインの策定

新学習指導要領では、「社会に開かれた教育課程」の理念に基づき、教育課程の編成についての基本的な方針を、家庭や地域とともに共有していくことが示されている。そのため、各学校においては、教育目標に照らしながら各教科等の授業のねらいを改善したり、教育課程の実施状況を評価したりすることを可能とするため、設定する教育目標は具体性を有するものであることが求められる。そこで、グランドデザイン(学校教育全体構想)の策定にあたっては、児童生徒や学校、地域の実態や特性等を明らかにした上で、校長のリーダーシップの下、全教職員が関わって協議し、共有することが重要である。そして、全教職員が関わることにより、学校の取組の方向性を意識することになり、年間を通して全教職員が教育活動の改善や充実を図ることにつながっていく。

2 可視化によるビジョンの共有

 学 校	<ul style="list-style-type: none">◆学校教育目標・学校経営計画◆本年度の重点目標◆育てたい資質・能力◆目指す児童生徒像
 教育課程	<ul style="list-style-type: none">◆年間指導計画・各教科単元計画◆学年経営計画・学級経営計画◆時間割・日程表・週時程・行事予定◆各指導部計画・各担当計画◆カリキュラム・マネジメント (教科横断・PDCAサイクル・教育資源の活用)
 教育資源	<ul style="list-style-type: none">◆ひと(教職員・保護者・地域住民・学識経験者等)◆もの(地域生産物・文化遺産・地域素材・地域施設等)◆情報(歴史・伝統文化・統計・地勢等)

～可視化することが可能な計画や資料等～

第2章 カリキュラム・マネジメントの実践例



【能代第二中学校 3年 理科】

第1節 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点等）の設定及び実現に向けた取組

【能代市立第四小学校】

1 学校の教育目標等の設定のために

本校の学校教育目標は、『夢をはぐくみ、生き生き学ぶ「あかしやの子」の育成』である。本校の伝統的な取組である「あかしや運動」と強く関連している。学校教育目標の設定に当たっては、その伝統を踏まえ、時代の移り変わりにおいても、知・徳・体のバランスのとれた教育を推し進めてほしいという保護者や地域の願いも考慮し、継続していくこととした。「あかしや運動」は、約40年間、あかしやノートを実践の手立てとして、毎年見直しを行いながら実践を積み重ねてきている。

学校教育目標の具現化のために、四つの目指す子ども像に沿って諸計画を編成し、意識化・具現化を推進するために、「あかしや」の目指す子ども像をカリキュラム・マネジメントの視点で捉え直し、三つのカリキュラム・マネジメントの側面に留意しながら、教育活動の更なる質の向上が図られるものと捉え、研究を進めることにした。

学校教育目標「夢を育み、生き生き学ぶ『あかしやの子』の育成」を実現するため、目指す児童像を次のように設定し、それぞれに年度ごとの重点項目を設けて、具体を進めてきた。



あかしやノート

【四つの目指す子ども像】

㉠ いさつがよく礼儀正しい子

→（重点項目）相手の目を見てあいさつする。

㉡ からだをきたえ命を大切にする子

→（重点項目）けがや病気、事故や災害から身を守る。

㉢ んぼう強く学び励む子

→（重点項目）学び合い、高め合う。

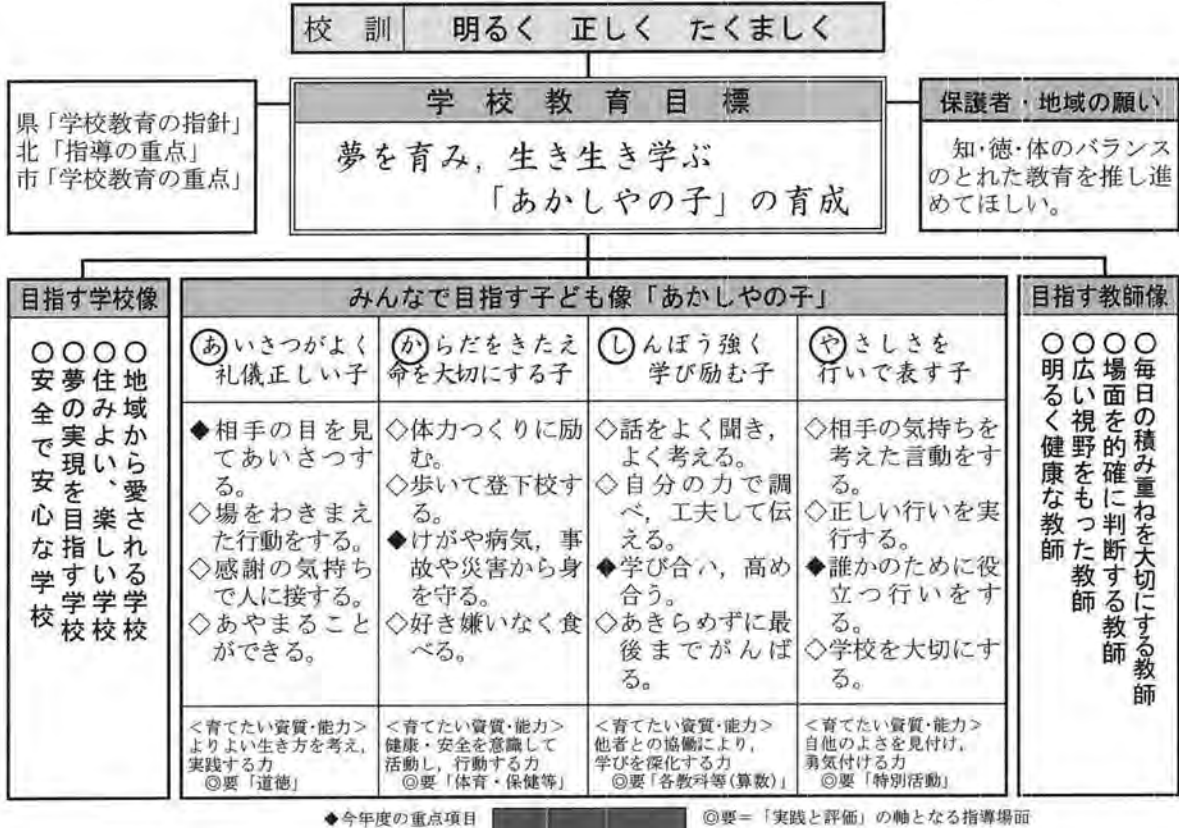
㉣ さしきを行いで表す子

→（重点項目）誰かのために役立つ行いをする。

学校評価（全職員による協議）を踏まえ、年度終盤と年度当初の職員会議等で「学校経営目標」とその具現化に向けた「経営の重点」を整理し、各指導部（教務部、生徒指導部、学習指導部、体育健康指導部）や各学年部の経営につなげるよう共通理解を図った。

令和3年度 学校経営の基本構想

能代市立第四小学校



経営の重点		●重点項目と◇具体◇
1 生徒指導の充実	●児童にとって、「心の居場所となる学校」「絆づくりの場となる学校」を目指す。 ◇具体◇ キーワード「元気・勇気」＝「一人一人が元気で、勇気付ける友達がいる」学校 ①温かな相互評価(教師・友だちに認められる場の設定) ②適切な自己評価(めあて・振り返りへの指導) ③学級活動や児童会活動・学校行事等で「認め合い」を促す活動を行う。	・交通事故防止等の安全指導の徹底を図る。 ・関係機関等との連携により児童の状況を把握し、いじめ・不登校等の未然防止・即時対応に努める。
2 学力の向上	●分かる、できる、楽しい授業を構築する。 ◇具体◇ キーワード「準備・工夫」＝「先生方の準備と工夫、子どもたちの対話が光る」授業 ①探求型授業の基本プロセスを意識した授業マネジメント ②授業を見合う会等のチーム研究の取組 ③「比較・検討」に係る教科等横断的な指導の充実 ※「発表する機会」「話し合う活動」の確保	・児童が安心して学習できる「(間違いを大切に)望ましい集団づくり」に努める。 ・新学習指導要領の具現化に向けた研修を推進する。～教員の資質向上に係る重点①～
3 体力の向上、心身の健康の保持・増進	・望ましい運動習慣を確立し、体力の向上を図る。 ・家庭等と連携し、基本的な生活習慣の改善に努める。	◇課題◇ メディア・コントロール
4 特別支援教育の推進	・児童の実態を把握し、特別な支援を必要とする児童への指導方法を工夫する。 ・特別支援教育について、全教員で研修を進める。～教員の資質向上に係る重点②～	
5 ふるさと教育・キャリア教育の推進	・豊かな体験活動等を通して、社会で自立的に生きる基礎(社会性、自主性、意欲等)を育成する。 ●地域人材・施設、関係機関、幼保・小・中・特別支援学校との連携を図り、教育活動の充実を図る。 ◇具体◇ キーワード「あいさつ・健康づくり」＝「あいさつと健康づくりで繋がる」学校と地域 ①幼・保・小連携(交流活動等の実施) ②小・中連携(合同授業等の実施) ③地域学校協働活動として、あいさつ運動を継続し、健康づくり活動を計画・実行する。	

保護者に対して、PTA総会で経営ビジョンを示すとともに、学校報等で繰り返し周知を図るようにした。また、学校運営協議会においては、学校教育目標等の「設定」「具現化」「評価」の各段階において、承認と助言を得るようにしてきた。



学校運営協議会の様子

鹿代市立第四小学校
令和3年4月12日
NO. 1 文責：校長

令和3年度スタート!

ともに目指そう!

「あかしやの子」

令和3年度の第四小学校がスタートしました。全校児童は、442名。新しい学級と新しい友だち、新しい学級担任が決まり、児童たちの表情は、とても晴れやかです。その様子を見て、「リセット」「ふりだしに限る」という文言が頭に浮かびました。真っ新な気持ちで新しいスタートラインに立っている子どもたち。児童一人一人が自分のよさを十分発揮し、充実した学校生活を送れるように、全職員が心一つにして指導・支援に努めて参ります。保護者の皆様方のご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。

学校教育目標
夢を育み、生き生き学ぶ「あかしやの子」の育成

みんなで目指す子ども像「あかしやの子」

- ⑥ いさがつがよく礼儀正しい子
★相手の目を見てあいさつする。
- ⑦ らだききたえ前を大切にする子
★けがや病気、事故、災害から身を守る。
- ⑧ んぼう強く学び励む子
★学び合い、高め合う。
- ⑨ さしさを行いで表す子
★誰かのために役立つ行いをする。

★キーワード①
あいさつ ○月1回程度、あいさつ運動を実施します。

◆地域との協働◆
・登校時の見守り活動と一体的に、あいつ運動を実施し、地域に元気な声を届けたい!

★キーワード②
健康 ○継続づくり活動を継続(業間等)
○メディア・コンテロールに係る指導を計画的・継続的に実施します。

◆地域との協働◆
・夏季休業中のラジオ体操を地域の方々とともに(できる地域から)。
・PTA事業「歩こう会」でも、工夫を加え、参加者の幅を拡大!

★キーワード③
学び合い ○自分の考えを出し合い、比べ合い、まとめ合う授業づくりを一層工夫します。

★キーワード④
勇気付け ○各学級や児童会活動で、友達のがんばりを認め勇気付ける活動を奨励します。

◆ポイント①◆
○「履となる教科等」を設定し、成果と課題を児童が実感できるようにします。

◆ポイント②◆
○学校運営協議会委員と保護者等からの評価を教育活動の改善に生かします。

◆ポイント③◆
○例年通り年に2回保護者アンケート「あかしやアンケート」で評価いただきますが、質問項目の意図を丁寧に説明します。

◆授業参観では、7月と12月のいずれかは、「学び合い」を意図した学習場面を参観いただき、ご意見・ご感想をいただきます。

2 学校の教育目標等の実現のための取組（1年目）

(1) 育てたい資質・能力と要となる教科の設定

① 育てたい資質・能力の設定

前年度学校評価から全職員で学校の実態をSWOT表を用いて現状を踏まえ、四つの目指す子ども像「あ・か・し・や」に対応する「育てたい資質・能力」について、全職員でワークショップを行い、丁寧に検討した。そこで、要となる教科や児童に示すキーワードを協議し、その具現化に向けた「経営の重点」を整理し、各指導部や各学年部の経営につなげるためにビジョンの共有を図った。

強み (S)	学校の現状	弱み (W)
<p>★勢い</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒数400名超 ・教職員数40名超 ・人材の多様性 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域とのつながり希薄 ・児童同士のつながり築かれにくい 	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 0 auto; width: 80%;"> <p style="text-align: center; font-weight: bold;">児童</p> <p style="text-align: center;">元気・素直・諸調査県平均</p> </div>		
<ul style="list-style-type: none"> ・見守り隊 ・民生児童委員の会 		<ul style="list-style-type: none"> ・核家族と3世代家族 ・旧来からの地域と新興住宅地の混在
機会 (O)		脅威 (T)

② 要となる教科の設定と目標実現のためのキーワードの設定

学校教育目標等の実現に向け、重要となる各教科等の内容を選択し、教育内容を教科等横断的な視点で組織するようにした。本校の目指す児童像と関連付けて「本校で育てたい資質・能力」を次のように設定した。また、それぞれに「要となる教科等」を位置付けて、指導と評価の場を明確にするとともに、教科等横断的に取り組むことと重点的に取り組むことを整理し具現化を図るようにしてきた。



【目指す子ども像】

・「あいさつがよく、礼儀正しい子」

<資質・能力>

→ **よりよい生き方を考え、実践する力**

<要となる教科等> 道徳

<児童・保護者等に示すキーワード> 「あいさつ」

【目指す子ども像】

・「体を鍛え、命を大切にする子ども」

<資質・能力>

→ **健康・安全を意識し、行動する力**

<要となる教科等> 体育（保健）

<児童・保護者等に示すキーワード> 「健康」

【目指す子ども像】

・「しんぼう強く学び励む子」

<資質・能力>

→ **他者との協働により学びを深化する力**

<要となる教科等> 算数、総合的な学習の時間

<児童・保護者等に示すキーワード> 「学び合い」

【目指す子ども像】

・「やさしさを行いで表す子」

<資質・能力>

→ **自他のよさを見付け、自主的に活動する力**

<要となる教科等> 特別活動（学級活動、児童会活動）

<児童・保護者等に示すキーワード> 「勇気付け」

(2) 「他者との関わりで学びを深化する力」の具現化

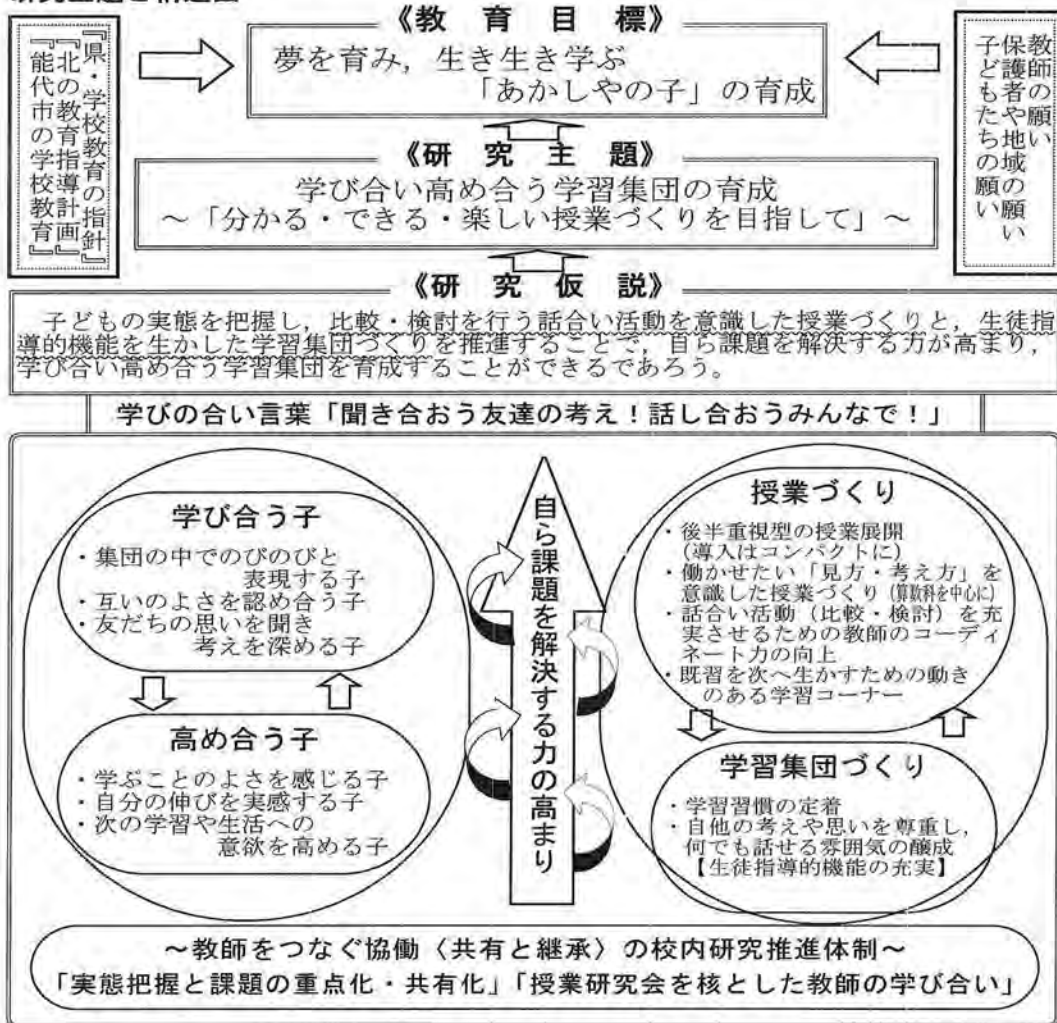
① 「比較・検討」に係る指導の充実～教師をつなぐ協働〈共有と継承〉の校内研究

ア 実態把握と課題の重点化・焦点化

【子どもの実態について ～各種調査や実態から見られる課題や特徴～】

- ・ 県学習状況調査では、県平均をほぼ上回り良好だった。しかし、文章や資料の読解力に課題が見られる。また、他者意識をもった話し方ができるよう指導を継続していききたい。
- ・ 学習状況や意欲においてTT活用による効果が見られる。より有効な活用の工夫を図りたい。
- ・ 四小学びのアンケートの「話し合い」や「振り返り」の項目は、肯定的評価が約90%以上と高い。「学びの合い言葉」を基に、後半重視型の授業の積み重ねに努めてきた成果といえる。
- ・ 学習集団づくりについては、学びのアンケートの結果から肯定的評価の割合が高い。しかし、「自分には、よいところがある」の項目は、高学年になるにつれて低くなる傾向が見られる。児童同士が認め合ったり、教師が褒めて伸ばしたりすることで自分のよさに気付かせ、自己肯定感や有用感を高めていきたい。

研究主題と構造図



【授業づくりの共通実践について】

- ①後半重視型の授業展開「見通す・学び合う・振り返る」の過程を意識
- ②働かせたい「見方・考え方」を意識した授業づくり（算数科を中心に）
- ③比較・検討する話し合いを教師がコーディネート
→研究成果として、比較検討するための教師の発問（キーワード）をまとめる。
- ④生徒指導の三機能を生かした学習集団づくり

【自己決定の場を与える・自己存在感を与える・共感的人間関係を育成する】

縦系（規律）と横系（つながり）がしっかりと張られた学級経営

⇒【主な縦系：しつけ、礼節（返事、あいさつ、敬語等）、ルール（相手を意識した話し方、聞き方等）、教室環境】

⇒【主な横系：教師と子ども、子どもと子どものつながりが見える豊かな表情】

- ⑤既習を次へ生かすための動きのある学習コーナー

《算数科研究主題》

進んで学び、伝え合い、考えを深める子どもの育成

《目指す子どもの姿》

- ①基礎的・基本的な知識や技能を身に付けた子ども
- ②言葉や数・式・図・表・グラフなどを適切に用いて、問題解決をしたり、自分の考えを分かりやすく表現したりする子ども
- ③見通しや解決方法を振り返り、互いの考えのよさに気付いたり、自己の学びを評価したりするなど、主体的に学ぶ子ども

学びの合い言葉「聞き合おう友達の考え！話し合おうみんなで！」

「学び合い高め合う」算数授業

Ⅰ 導入 《関心・意欲》 ～学習のねらいの焦点化～	Ⅱ 展開 《学び合い》 ～算数的活動の充実～	Ⅲ 終末 《高め合い》 ～学びの確認と定着～
<p>つかむ 見通す</p>	<p>考える 学び合う まとめる</p>	<p>深める 高め合う</p>
<p>□問題提示、めあて・課題設定 ・学習意欲や解決の必要感を高める提示をする。 《部分や全体提示、図や絵、実演や体験提示等》 ・子ども自身から不思議や驚き、疑問を引き出してめあてや課題を設定する。 《今までの方法でできるか、できないか、前時との違いは何だろう等》</p> <p>□見通す ・働かせたい「見方・考え方」を意識させる。 ★何（見方）をどうする（考え方）を明らかにする。 ★学習課題と既習の知識を関連させて解決の見通しをもたせる。 《大まかに考える、見当を付ける、仮定する》</p>	<p>□自力解決 ・個の時間を保障する。</p> <p>□考えの発表⇒比較・検討 ★子どもの意見をコーディネートする。 《思考を促す発問や指示の精選 発言の関連付けや問い返し 子どもの考えの可視化》</p> <p>・学習形態を工夫する。 《必要感のあるペアやグループ学習、TT指導》</p> <p>・図（数直線や表等）と式と言葉を関連付けながら思考や表現をするよう促す。</p> <p>□本時の学習のまとめ ・キーワードや子どもの言葉を生かしながらまとめる。</p>	<p>□評価・練習問題 ・ねらいを達成した子どもの具体的な姿を想定し、評価基準を設定する。 ・個に応じて補充的、発展的な学習を取り入れる。 （単元評価問題等の積極的活用）</p> <p>□本時の学習の振り返り ★振り返りの視点を明示する。 ★働かせた「見方・考え方」を子どもに自覚させるよう働きかける。 ・集団で学ぶことのよさや自分の伸びを実感する場として設定する。 《見通しや課題解決に有効だった見方や考え方について振り返る》 《比較検討したことにより授業で学んだこと、友達の考えのよさ、次の学習への意欲付け》</p>

イ 授業研究会を核とした教師の学び合い

5月。「比較・検討」する話合いのモデル授業を提案し、**くらべる**板書カードの活用、指導案に**見方・考え方**を働かせた児童の姿（考え）、**くらべる**比較・検討の場面における教師の指導・支援の記載を位置付けることを確認した。

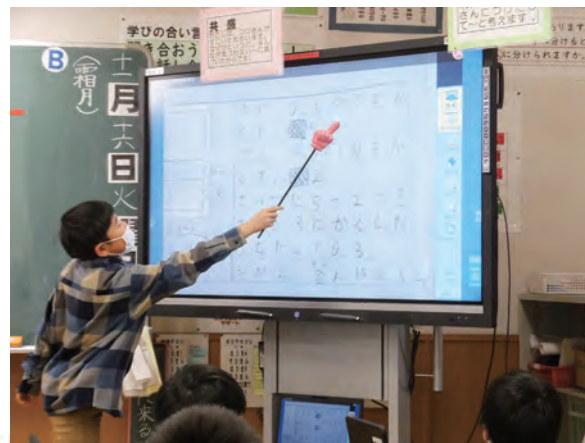
【5梅算数】階段状の立体のかさの表し方を考える



板書の工夫

具体物、図、式を結び付けて比較
ノートタイム（学び合いをノートに残す）

【3竹算数】小数のひき算



ICTの活用

タブレットの活用
電子黒板の2分割画面による比較、発表

【6梅算数】データの特徴を調べて考察する



学習形態の工夫

グループごとにデータの処理
話合い→全体で考えの交流・比較

【4竹総合】福祉について体験を通して考える



体験活動の充実

コロナ禍における体験活動を提案
（車いす、手話、点字、高齢者疑似体験等）
ゲストティーチャーの活用

以上の他に、特別支援学級、通級指導教室の全校授業研究会を行い、授業のユニバーサルデザインについて共通理解を深めた。

ウ 授業を見合う会による教師の学び合い

【3松算数】小数のたし算



3竹の授業研に先立って、見合う会で同単元の前時を提示。単元構想のつながりが見えた。

【2梅算数】かけ算を使って●の数を求める



アレイ図と式を連動。他者説明をすることで、自分と友達の考えを比べる。

【6松外国語】スピーチを充実させる



ペアの友達と英作文を交換して音読。内容を比べたり、読み方を教え合ったりした。

【2松学級活動】ゲーム大会を開くための学級会



板書で学級会の見通しをもたせる。一人一人の意見を見える化して比べる。

【1松算数】ひろさをくらべよう



実物を比べて広さを捉えさせ、実感を伴った課題設定・解決を行う。

【1竹国語】どうぶつの赤ちゃん



学習コーナーを活用して、前時と比べる。視点を与え、単元を通して比べ読みする。

1年間の研修を通して、「くらべるタイム」は、まとめにつなげるために行うこと、そのためには、「聞く・話す」力を高める必要があることを確認した。

② 他教科との横断的な取組

教科等横断的な取組を実現するために、各学年で「カリキュラム・マネジメント取組一覽表」を作成した。目指す子ども像から育てたい資質・能力のつながりを示し、要の教科である算数科の取組である「比較・検討」の評価チェック欄を設けた。そして、算数科での「比較・検討」する学習活動や指導・支援を意識して他教科等へ広がるようにした。各学年部で算数科を軸にして、単元ごとに評価するように進めてきた。

資料④—6 令和4年度 カリキュラム・マネジメント 取組一覽表 能代市立第四小学校

みんなで目指す子ども像「あかしやの子」							
あいさつがよく 礼儀正しい子		からだをきたえ 命を大切にする子		しんぼう強く 学び励む子		やさしさを 行いで表す子	
資質・能力	よりよい生き方を考え、実践する力 ・要「道徳」 キーワード ところをつなぐ「あいさつ」		健康・安全を意識して活動し、行動する力 ・要「体育・保健等」 みんなで一緒に「ヘルスアップ」		他者との協働により、学びを深化する力 ・要「算数」→各教科 対話で「学び合い・高め合い」 【比較・検討】◎○△		自他のよさを見つけ、勇気付ける力 ・要「特別活動」 一人一人の元気な行動で「勇気付け」
	算数			他の教科等			
4		身体測定	「対称な図形」 「文字と式」	○ △	国「漢字の形と音・意味」 社「わたしたちの暮らしと日本国憲法」 理「物の燃え方と空気」 総「1年生マイルプロジェクト」	○ △ ◎ △	今日のあかしやさん発表 前期委員会 児童会総会
5	規則の尊重 「どんな心が見えてきますか」	運動会練習 運動会 何でも食べよう週間	提案授業（6竹） 「分数のかけ算」	◎	国「聞いて、考えを深めよう」 国「笑うから楽しい」 社「国の政治の仕組みと選挙」	◎ ○ △	運動会を成功させよう
6	あいさつ運動 （梅組ポスター）	何でも食べよう週間・歯みがき週間	授業研（2松） 「分数のわり算」 「分数の倍」	◎ ◎	国「話し言葉と書き言葉」 社「子育て支援の願いを実現する政治」 社「縄文のむらから古墳のくにへ」 理「植物の体の働き」	◎ △ ○ ○	クラブ活動
7	あいさつ運動 （竹組ポスター） 礼儀 「心にふく風」	すこやかチャレンジ（メディア・コントロール）	「比」 「算数で読みたい」	◎ ○	国「私たちにできること」 外「Unit3 Lets go to Italy」	○ △	
＜振り返り＞ 「あかしやノート」の活用							
8	帰ってきたクニマス	ラジオ体操 身体測定	「拡大図と縮図」	○	総・国「秋田まるごと探検隊」 社「貴族の暮らし」	◎ ○	
9	あいさつ運動 （松組ポスター） 移動教室の夜	あかしやマラソン 何でも食べよう週間・歯みがき週間 マラソン大会	「円の面積」	◎	国「いちばん大事なものは」 社「武士の世の中へ」 理「月の形と太陽」	◎ ○ ○	楽しい修学旅行にしよう 修学旅行
＜評価・改善の機会＞ ・自己評価・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8月第1回学校評価会 ・PTAとの連携・・・・・・・・・・・・・・・・ 4・7月授業参観、保護者アンケート ・市・県教育委員会との連携・・・・・・・・ 所長訪問 ・コミュニティスクールとの連携・・・・・・ 5・7月学校運営協議会							

(3) 学校運営協議会等と連携した人的・物的資源の活用

① 地域学校協働活動としての「あいさつ運動」

生活科・総合的な学習の時間や他教科等の学習において、地域学校協働活動として地域人材を効果的に活用するようにした。

特に地域の協働として、民生委員の皆さんの協力を得て、月1回あいさつ運動を実施してきた。子どもたちからも「あいさつボランティア」を集い、通学する児童や地域の人たちへ元気な声を届けることができた。



6月1日(火)	6名
7月1日(木)	6名
8月1日(水)	6名
9月1日(金)	6名
10月1日(月)	6名
11月1日(火)	6名
12月1日(水)	6名

② 地域と連携した健康づくりでの取組

目指す子ども像「体を鍛え、命を大切にする子ども」での取組では、要となる教科である体育科（保健）やあかしやマラソン等を通して実施してきた。また、地域学校協働活動のとしても、自治会の協力を得て「ラジオ体操」や、PTA活動の保護者と一緒に体力づくりをする日曜日の朝の「歩こう会」も地域にも呼びかけて実施することができた。

本校の健康面での課題である「メディアコントロール」については、本校の学校区二つの中学校区の学校と連携して、「すこやかチャレンジ」を実施することができ、兄弟姉妹・家族でメディア使用について話し合うよい機会となった。



●起きる時刻	6時30分
●寝る時刻	1・2年生～9時 3・4年生～9時30分 5・6年生～10時
●メディア時間	60分まで

※『メディア』とは、ゲーム機・スマホ・タブレット・iPad・パソコンなどの通信機器です。(今回はテレビの時間を入れません。)

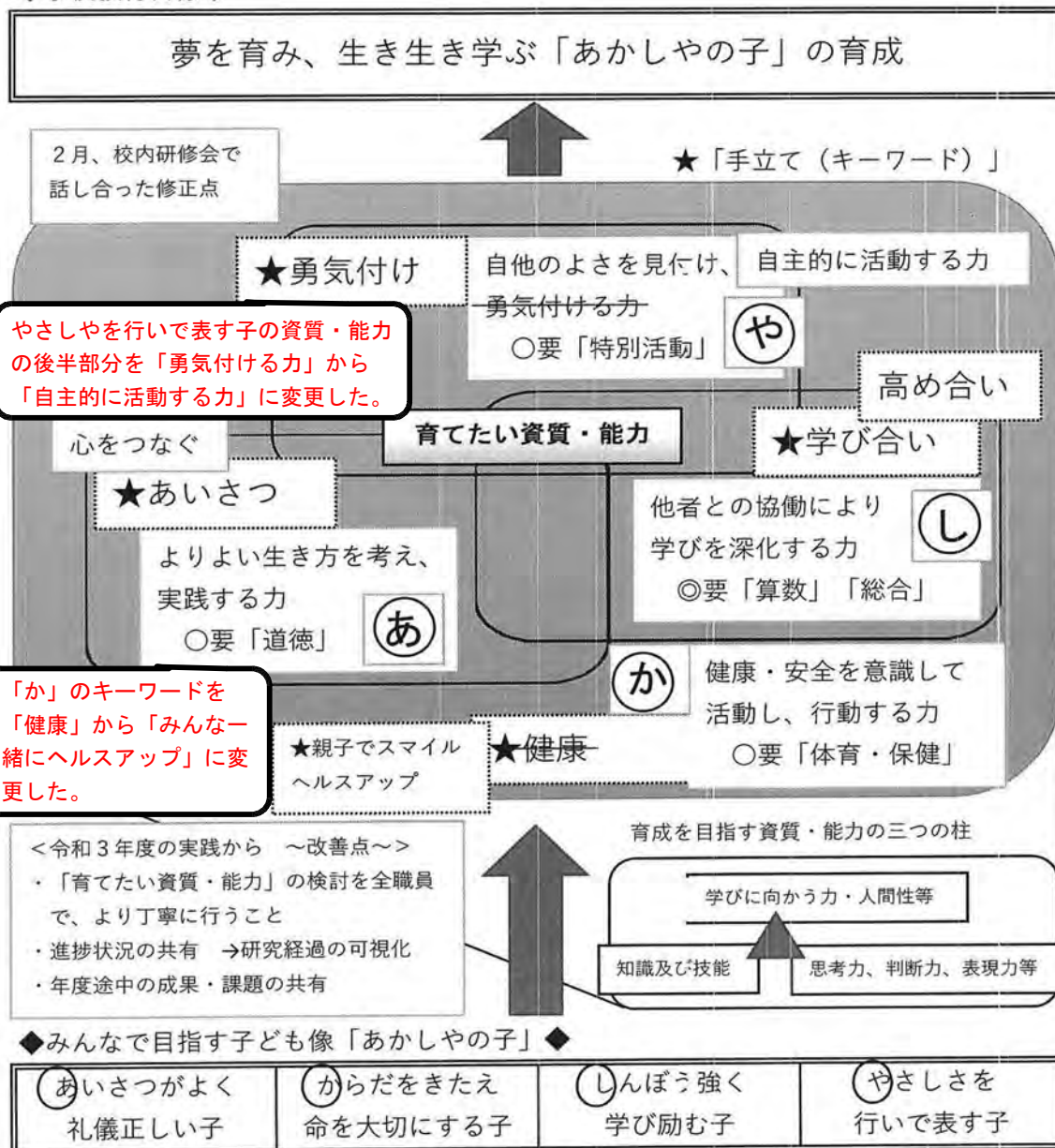
※7/9(金)提出 (担任 → 保健委員 → 保健室)

② 次年度への構想とビジョンの共有

年度当初の職員会議や研修会で、学校教育目標の実現のために、目指す児童像に対応した「育てたい資質・能力」を児童に身に付けさせるため、要の教科の設定や児童に示す合い言葉やキーワード等について再確認した。

【次年度への構想 ～具現化へのアプローチ～】

◆学校教育目標◆



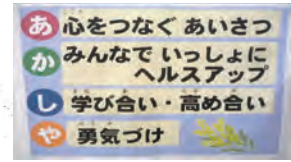
本校にとってのカリキュラム・マネジメント

- 四小の伝統的な取組「あかしや運動」をカリキュラム・マネジメントの視点で捉え直し、教育課程・教育活動の重点化を図る。
※あかしや運動＝目指す児童像に沿って諸計画を編制・実施し、意識化・具現化を目指した実践
- 目指す児童像の4項目に沿い「要となる教科・領域等」を設定し、共通実践項目を「教科横断的な内容◎」と「重点的な内容○」とに整理し行う。

【学校経営の基本構想 ～ビジョンの共有～】



令和4年度 学校経営の基本構想



校訓 明るく 正しく たくましく

県「学校教育の指針」
北「指導の重点」
市「学校教育の重点」

学校教育目標
夢を育み、生き生き学ぶ
「あかしやの子」の育成

保護者・地域の願い
知・徳・体のバランスのとれた教育を押し進めてほしい。

目指す学校像	みんなで目指す子ども像「あかしやの子」				目指す教師像
<ul style="list-style-type: none"> 安全で安心な学校 夢の実現を目指す学校 住みよい、楽しい学校 地域から愛される学校 	<p>あ いさつがよく 礼儀正しい子</p> <ul style="list-style-type: none"> 相手の目を見てあいさつする。 場をわきまえた行動をする。 感謝の気持ちで人にあやまることができる。 	<p>か らだをきたえ 命を大切にす子</p> <ul style="list-style-type: none"> 体力づくりに励む。 歩いて登下校する。 けがや病気、事故や災害から身を守る。 	<p>し んぼう強く 学び励む子</p> <ul style="list-style-type: none"> 話をよく聞き、よく考える。 自分の力で調べ、工夫して伝える。 学び合い、高め合う。 	<p>や さしさを 行いで表す子</p> <ul style="list-style-type: none"> 相手の気持ちを考えた言動をする。 正しい行いを実行する。 誰かのために役立つ行いをする。 	<ul style="list-style-type: none"> 毎日の積み重ねを大切にす教師 場面を的確に判断する教師 広い視野をもった教師 明るく健康な教師
	<p><育てたい資質・能力>よりよい生き方を考え、実践する力 ◎要「道徳」</p>	<p><育てたい資質・能力>健康・安全を意識し、行動する力 ◎要「体育（保健）」</p>	<p><育てたい資質・能力>他者との協働により、学びを深化する力 ◎要「算数」「総合」</p>	<p><育てたい資質・能力>自他のよきを見付け、自主的に活動する力 ◎要「特別活動」</p>	

目指す子供像に対して「育てたい資質・能力」と要となる教科を位置付ける。

◆今年度の重点項目 ◎要＝「実践と評価」の軸となる指導場面

★今年度の合い言葉

みんながのびる みんなで のびる

経営の重点	経営の重点の中にキーワードを示す。
<p>1 生徒指導の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ●児童にとって、「心の居場所となる学校」「絆づくりの場となる学校」を創出する。 ◇具体◇ キーワード「勇気づけ」＝「一人一人が元気で、勇気づける友達・先生がいる」学校 <ul style="list-style-type: none"> ①温かな相互評価（教師・友だちに認められる場の設定） ②適切な自己評価（めあて・振り返りへの指導） ③学級活動や児童会活動・学校行事等で、自己有用感を高める活動・振り返りを継続する。 ・「生活安全」「交通安全」「災害安全」に係る指導を計画的に行い、「適切な判断・行動」を育てる。 ・関係機関等との連携により児童の状況を把握し、いじめ・不登校等の未然防止・即時対応に努める。 	
<p>2 学力の向上</p> <ul style="list-style-type: none"> ●分かる、できる、楽しい授業を構築する。 ◇具体◇ キーワード「学び合い・高め合い」＝「構想と準備、児童相互の対話が光る」授業 <ul style="list-style-type: none"> ①探求型授業の基本プロセスを意識した授業マネジメント ②授業を見合う会等のチーム研究の取組 ③「比較・検討」に係る教科等横断的な指導の充実 ※「発表・話し合い」の成果への気付き ・児童が安心して学習できる「（間違いを大切にす）望ましい集団づくり」に努める。 ・算数科・総合的な学習の時間を軸に協働的な学びの充実を図る。～教員の資質向上に係る重点①～ 	
<p>3 体力の向上、心身の健康の保持・増進</p> <ul style="list-style-type: none"> ●望ましい運動習慣を確立し、体力の向上を図る。 ●家庭等と連携し、基本的な生活習慣の改善に努める。 ◇具体◇ キーワード みんな一緒に「ヘルス・アップ」 <ul style="list-style-type: none"> ①体力づくり（マラソン、なわとび）の継続 ②メディア・コントロールに係る指導・啓発 	
<p>4 特別支援教育の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ●児童の実態を把握し、特別な支援を必要とする児童への指導方法を工夫する。 ●特別支援教育について、全教員で研修を進める。～教員の資質向上に係る重点②～ 	
<p>5 ふるさと教育・キャリア教育の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ●豊かな体験活動等を通して、自立的に生きるための基礎（社会性、自主性、意欲等）を育成する。 ●地域人材 施設、関係機関、幼保・小・中、特別支援学校との連携を図り、教育活動の充実を図る。 ◇具体◇ キーワード 心をつなぐ「あいさつ」＝「あいさつと健康・学びで繋がる」学校と地域 <ul style="list-style-type: none"> ①幼・保・小連携（交流活動等の実施） ②小・中連携（合同授業等の実施） ③地域素材・人材の活用 ④域学校協働活動として、あいさつ運動を継続し、健康づくり活動を計画・実行する。 	

(2) 「他者との関わりで学びを深化する力」の具現化

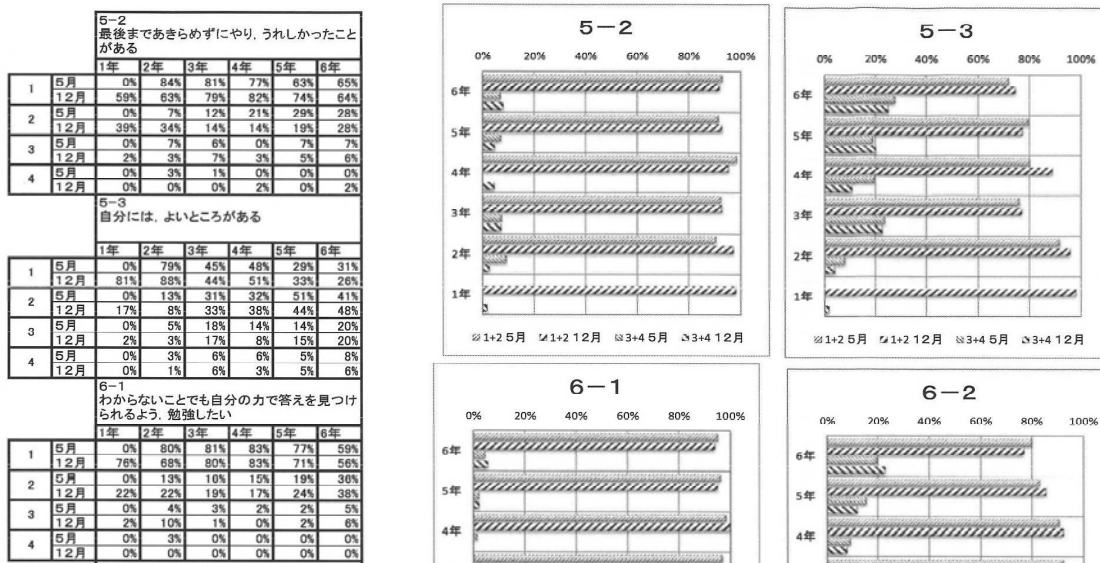
① 「比較・検討」に係る指導の充実～教師をつなぐ協働〈共有と継承〉の校内研究

ア 実態把握と課題の重点化・焦点化

【子どもの実態について～各種調査や実態から見られる課題や特徴～】

- ・ 県学習状況調査では、県平均をほぼ上回り良好だった。しかし、国語の言語についての知識・技能、算数の「小数の乗法・除法」、「直径、円周と円周率の関係」等において、基本的な知識が定着していない児童も見られた。
- ・ 質問紙調査より、「友達と話し合う活動をよく行っている」の肯定的評価が95.5%に対し、「話し合う活動を通じて自分の考えを広げたり深めたりしている」の肯定的評価は87.9%で、若干の差があった。自分の考えが広がったり深まったりしたことを児童が実感できるような授業を工夫する必要がある。
- ・ 学びのアンケートより、学習集団づくりについては、前年同様、全般に肯定的評価の割合が高い。しかし、「自分には、よいところがある」、「難しいことでも、失敗を恐れないで挑戦している」の項目は、高学年になるにつれて低くなる傾向が見られる。挑戦すべき課題を与え、できたことを認めながら自己肯定感をより高めていきたい。

四小学びのアンケート 6・12月比較



イ 授業研究会を核とした教師の学び合い

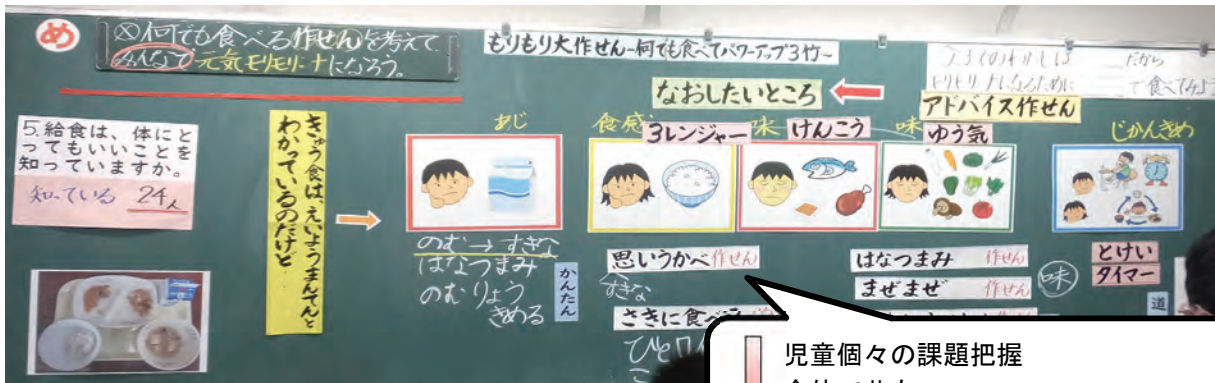
5月。「まとめにつなげるくらべる話し合い」の提案授業により、研修をスタートした。



【2松算数】長さ単位（1cm）を理解する
児童が主体的に課題解決に向かうための手立ての工夫

「交流学級の友達に長さを伝えたい」という課題意識
話し合い（ペア・全体）を支える学習の躰の定着
机間指導（花丸）による勇気付け

【3竹学級活動】給食時間内にしっかり食べるための作戦を話し合い、個々の課題を解決する



個々の課題を話し合うことで解決に導く授業構成、
栄養教諭との連携

児童個々の課題把握
全体で共有
解決策を話し合う
比べてよさを焦点化・価値付け
解決に向けた個々の取組

【1松生活科】家庭でのお手伝いを振り返り、続けようとする意欲をもつ



気付きの質を高めるICTの活用工夫

家庭でのお手伝いの様子をタブレットで撮影
写真を見て報告
気付いたことを比べて話し合う
ホワイトボード、付箋紙の活用
自分たちの成長を自覚

【5松算数】台形の面積の公式を求める



児童のアウトプットの機会の保障

比べるためのグルーピングの工夫
学習の場を分ける
(グループ学習は多目的室、その他は教室)
タブレットにより個々の考えを電子黒板に集約

ウ 授業を見合う会による教師の学び合い

【3松総合】風の松原のよさを見付ける



タブレットにより、個々の意見をキーワードで集約
的確な指示によるスムーズな学習活動
もっと話したくなる聞き方の徹底

【2竹生活科】

町探検の約束を考える



役割・目的意識をもった言語活動

【6梅学級活動】話合いを通して自分の家庭学習を見直す



話合いを活発にするために

学習シートの工夫 (表面: 課題把握、話合いの結果記録)
(裏面: これからの取組について)

話合いシートの工夫 (座標軸、付箋紙)

流れの分かる構造的な板書

【桐組生単】買い物に向けて

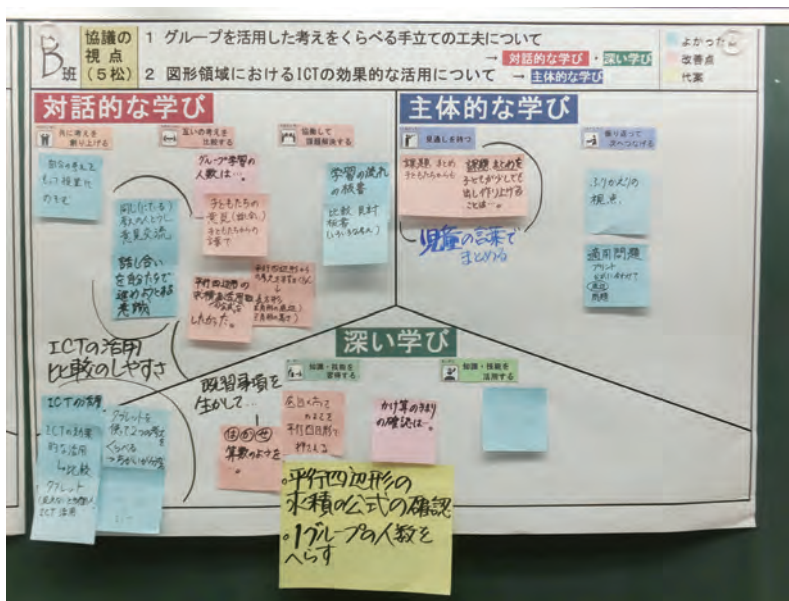


学年に応じたためあての設定・役割分担

学習活動を繰り返す効果

活動ごとの場の設定

エ 授業研究会 (事後研究会) の具体



協議は、視点を「主体的・対話的で深い学び」に整理しながら行っている。

学習過程や児童の姿が、どの学びに当てはまるのかを考えることで、「主体的・対話的で深い学び」を達成するための授業の在り方について、研修を深めるためである。

付箋紙には、できるだけ児童を主語にして書くことにし、児童の姿で授業を検証することを目指している。



協働研究体制が促進されるようワークショップ型で協議

ビデオクリップ→

② 「総合的な学習の時間」を核とした横断的な取組

総合的な学習の時間での「特徴的な単元」を整理・開発することを目指し、3年生以上でプランニングシートを作成した。教科等とのつながりも明らかにして、教科等横断的な視点で特徴的な単元内容を捉え直して取り組んできた。

3年

「見たい、知りたい、伝えたい 能代市の自然の魅力～発信・のしろを伝えるンジャー～」→国語、社会、道徳との関連

4年

「みんな友だち！」

(福祉体験から暮らしやすいまちへ)

→国語、道徳との関連

5年

「広がれ!! 笑顔とあいさつの輪！」

→国語、社会、図工、道徳との関連

6年

「秋田ミニ探検隊

～能代のゆたかさを発信しよう!～」

→ 修学旅行、道徳、国語との関連

資料③-3 ◎令和4年度に重点的に取り組む単元◎

第5学年 総合的な学習の時間・プランニングシート

1 単元名	広がれ!笑顔とあいさつの輪!!				
2 単元の目標	<ul style="list-style-type: none"> ・地域を廻って四小児童とあいさつを交わしてくれる地域の人を探し、交流を深めることを通じて地域の人に見守られ、支えられていることを自覚するとともに、地域を大切にしようとする心を育てる。 				
3 単元の評価規準	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に取り組む態度		
①通学路を基本として、学区内での自分の行動圏の様子や地域の人々の様子を理解している。	①地域の人とあいさつを交わすことの意義を考え、進んであいさつしようとしている。	①積極的に地域の人と関わり、あいさつを交わそうとしている。			
②目上の人に対して正しい敬語を使いながら話すことができる。	②自分たちを見つめ、支えてくれている地域の人に感謝の気持ちをもちつづけることができる。	②登下校に限らず、地域の人にこれからもあいさつをしようとする気持ちをもっている。			
4 指導計画	月	小単元名(時数)	主な学習活動(時数)	評価規準	教科との関連
	9月上旬	地域の人にあいさつをしよう。(5)	<ul style="list-style-type: none"> ・通学路を基にして、分担するエリアごとのグループを決める。(2) ・地域の人にあいさつをし、あいさつを返してくれる人をさがす。(3) 	①	①(国)敬語
	9月下旬	あいさつを返してくれる人のいる場所を地図にまとめよう。(4)	・あいさつしてくれた人がいた場所を地図にプロットする。(4)	①	(社)地図の見方
	10月上旬	あかしやサポーターに認定しよう。(5)	<ul style="list-style-type: none"> ・あかしやサポーター認定バッジを作る。(1) ・再び地域を歩き、あいさつしてくれる人にバッジを渡し、感謝の言葉を伝える。 	②	(図)デザイン (道)国や県上を促す態度
5 主な連携先	見守り隊(地域の児童民生委員)				
6 成果と課題	<p>(1) 成果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童が地域に目を向け、見守られていることを自覚することができた。 ・国語や社会、図工、道徳との関連を切りながら指導することができた。 <p>(2) 課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・初めの活動で出会った人に再度会ってバッジを渡すことが難しく工夫が必要だった。 ・将来に向けた指導の継続が必要である。 				

(3) 学校運営協議会等と連携した人的・物的資源の活用

① 生活科等での地域探検での地域学校協働活動

2年生の生活科や3年生の社会科においての地域探検や町探検をするときには、4～6名の榊地区民生委員の方々(見守り隊)が協力して下さった。地域のことを教えていただいたり、引率での安全面に配慮していただいたりした。



4 教育課程等の評価・検証・改善

(1) 評価指標を設定したPDCAサイクル

カリキュラム・マネジメントに取り組む上で、その内容は適切であったか、また効果的であったか、定期的に実施状況の評価をして、その結果に応じて改善することが重要になる。つまり、PDCAサイクルでのPlan（計画）→Do（実行）→Check（評価）→Action（改善）という4段階を繰り返しながら取り組んでいく。カリキュラム・マネジメントについても、計画・実行するだけでなく、PDCAサイクルの考え方をうい、評価や改善を行った上で、再度、計画や実行に反映して繰り返し取り組んでいくようにした。

年 月	P	D	C→A	研究スケジュール	
令和3年度	4	学校経営の基本構想 →PTA総会等	●自他を「勇気付ける」活動 ●探求的な学び「比較・検討」	研究計画立案 ★計画内容の周知検討	
	5	→第1回学校運営協議会 ※あきた型学校評価	●「あいさつ」で人と繋がる活動 ・協働①見守り活動、あいさつ運動 ※毎月実施	C→A地域人材等を活用した評価	
	6	P共有と周知	●「健康」づくり活動	◎所長訪問	
	7	D重点化と共通実践	◎第2回学校運営協議会 ◎PTA、保護者アンケート ・学校評価（自己評価）	第1回検討会議	
	8		・協働②ラジオ体操	◎学校評価会①	★研修会（計画修正）
	9		・協働③歩こう会		
	10		◎第3回学校運営協議会		第2回検討会議
	11	次年度の構想	D要となる教科等の位置付け	◎教育長訪問	
	12		＜ポイント＞要となる教科等において指導と評価を行い、実践の成果を児童が実感できるようにする。 ・あき型「特別な教科 道徳」 ・かき型「芸術・保健等」 ・しき型「各教科等（算数科）」 ・やき型「特別活動」	◎PTA、保護者アンケート ・学校評価（自己評価）	第3回検討会議 （成果の検証①）
	令和4年度	1		◎学校評価会②	
		2		◎第4回学校運営協議会 ※あきた型学校評価	研究のまとめ ★研修会（成果確認）
		3			次年度の登出し
4		＜「あきた型学校評価」における評価項目と評価指標＞			
5		1 生徒指導 (1) 自己有用感に係る質問への肯定的回答の割合 ①「自分には、よいところがあると思う。」★や ②「不登校及び不登校傾向児童の状況」			C→Aデータに基づく評価
6		2 学習指導 (1) 進学習状況調査の通過率 →標準平均との比較★し (2) 質問紙調査の肯定的回答の割合 ①「ふだんの授業では、自分の考えを発表する機会があると思う。」★し ②「普段の授業では、話し合う活動をよく行っていると思う。」★し			
7		3 学校間連携及び地域連携			第1回検討会議
8		＜保護者アンケートにおける評価指標＞			第2回検討会議
9		・「8 子どもたちはあいさつがよく、礼儀正しくなっていると思う。」★あ			「手引き」作成
10		・「9 子どもたちは体を鍛えようと努力し、意を大切にしていると思う。」★が			
11		・「10 子どもたちはしんぼう強く学び始めていると思う。」★し			研究のまとめ ※研究発表会
12		・「11 子どもたちはやさしさを行いでできていると思う。」★や			研究の総括
1	・「13 学校は地域から学び、地域に貢献する活動をしていると思う。」★基登				
2	・「20 学校と家庭・地域との連携は、よくなされていると思う。」★基登				
3					

本校で実施した諸調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成・実施・評価し、改善を図るようにした。特に令和3年度に実施した「カリキュラム・マネジメント検討シート」では、カリキュラム・マネジメントの基本的な実践内容について、10項目（ア 教育目標、イ 計画、実施、評価、改善、ウ 組織構造、エ 学校文化、オ リーダーシップ、カ 地域社会等、キ コミュニティ・スクール）について、年2回調べることで本校の取組状況を把握することができた。

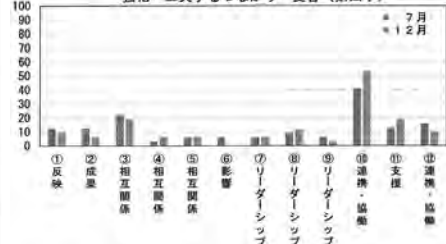
カリキュラム・マネジメント検討シート（実践校用） R3. 月

学校種 [幼・小・中・高・特学]	評価項目	評価内容	評価結果	取組状況				
小学校	ア 教育目標	学校全体の学習計画、その他の実践や課題について、全職員で共有している。	4	3	2	1	0	
	イ 計画	学校の教育目標や教育計画は、児童生徒や地域の実態を踏まえて設定されている。	4	3	2	1	0	
	ウ 組織構造	学校の教育目標や教育計画は、「授業実践に活かす」目的で実践されている。	4	3	2	1	0	
	エ 学校文化	学校の教育目標や教育計画は、それぞれの学年や内容が関係するようになっている。	4	3	2	1	0	
	オ リーダーシップ	各学年の教育目標や内容が関係するようになっている。実践計画や実践活動が関係している。	4	3	2	1	0	
	カ 地域社会等	学校の教育目標や教育計画は、関係する学年や内容が関係するようになっている。	4	3	2	1	0	
	キ コミュニティ・スクール	学校の教育目標や教育計画は、関係する学年や内容が関係するようになっている。	4	3	2	1	0	
	評価項目	学校の教育目標や教育計画は、関係する学年や内容が関係するようになっている。	4	3	2	1	0	
	評価項目	学校の教育目標や教育計画は、関係する学年や内容が関係するようになっている。	4	3	2	1	0	
	評価項目	学校の教育目標や教育計画は、関係する学年や内容が関係するようになっている。	4	3	2	1	0	

カリキュラム・マネジメント評価 変容（第四小）



強化・工夫するつながら 変容（第四小）

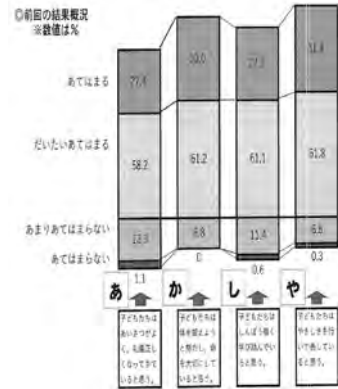


【評価項目と結果の一覧から ～児童・保護者の反応】

項目	評価項目	令和2	令和3	令和4
		現状	目標値	目標値
1	あ 保護者アンケート項目8「子どもたちはあひさつがよく、礼儀正しくなってきたと思う。」の肯定的評価の割合(%)	82.9	85.0 89.4	90.0
2	か 保護者アンケート項目9「子どもたちは体を鍛えようと努力し、命を大切にしていると思う。」の肯定的評価の割合(%)	86.3	90.0 93.1	90.0
3	保護者アンケート項目10「子どもたちはしんぼう強く学び励んでいると思う。」の肯定的評価の割合(%)	90.1	90.0 92.5	90.0
4	★学習 県学習状況調査の通過率における県平均との比較(4年3教科・5年4教科・6年4教科・計11教科のうち、県平均を上回っている教科の数)	8/11	11/11	11/11
5	★学習 し 県学習状況調査・質問紙調査「ふだんの授業では、学級の友達との間で話し合う活動に進んで取り組んでいると思う。」の肯定的回答の割合 ↑(質問の内容に変更あり) <参考>令和2年度・質問紙調査「ふだんの授業では、自分の考えを発表する機会があると思う。」	4年85.6 5年80.4 6年92.9 (86.3)	4年100 5年93.5 6年93.0 (95.5)	90.0
6	★学習 し 県学習状況調査・質問紙調査「ふだんの授業では、学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり広げたりすることができる」と答えていると思う。」の肯定的回答の割合(%) ↑(質問の内容に変更あり) <参考>令和2年度・質問紙調査「ふだんの授業では、話し合う活動をよく行っていると思う。」	4年90.4 5年87.4 6年96.4 (91.4)	4年96.9 5年86.8 6年80.0 (87.9)	90.0
7	★学習 や 県学習状況調査・質問紙調査「自分には、よいところがあると思う。」への肯定的回答の割合(%)	4年81.9 5年74.7 6年80.0 (78.8)	4年81.8 5年84.4 6年76.5 (80.9)	90.0
8	★学習 や 保護者アンケート項目11「子どもたちはやさしさを行いで表していると思う。」の肯定的評価の割合(%)	89.5	90.0 93.1	90.0
9	★連携 基盤 保護者アンケート項目13「学校は地域から学び、地域に貢献する活動をしていると思う。」の肯定的評価の割合(%)	91.4	95.0 94.7	95.0
10	★連携 基盤 保護者アンケート項目20「学校と家庭・地域との連携は、よくなされていると思う。」の肯定的評価の割合(%)	88.6	90.0 89.8	90.0

★あきた型学校評価(学校関係者評価)で取り上げている評価項目
○現状の数値と目標値を上回った項目
○現状の数値を上回った項目

保護者アンケートの「あかしや」に係わる項目



目指す児童像「あかしや」の項目について、児童の諸調査と保護者アンケート結果から評価し、課題や改善策を検討していた。

(2) あきた型学校評価を基盤としたPDCAサイクル

学校運営協議会において評価するあきた型学校評価を基盤として、児童による諸調査の結果や職員による自己評価、保護者アンケート結果を踏まえた改善等を行いながら、PDCAサイクルを確立していくようにした。

令和3年度 学校評価シート

能代市立第四小学校		評価領域	学習指導
重点目標	「分かる・できる授業」による「確かな学力」と「学ぶ意欲」の向上		
現状	<ul style="list-style-type: none"> 県学習状況調査で、県平均をほぼ上回り、良好であった。 校内児童アンケートでは、「学習意欲に関して「勉強は大切だ」「勉強がよく分かる」の項目で、各学年で90%以上だった。学び合いと振り返りに関しては「授業で話し合う活動を行っている」で各学年85%以上、「授業で振り返る活動を行っている」で各学年90%以上であった。 		
具体的な目標	<ul style="list-style-type: none"> 県学習状況調査の平均通過率を全学年県平均を上回るようにする。 「主体的で対話的な学び」の具現化を目指し、質問紙調査「自分の考えを発表する機会がある」「話し合う活動をよく行っている」の肯定的回答90%以上を目指す。 		
目標達成のための方策	<ul style="list-style-type: none"> 教師の授業力を磨き、「見直す、学び合う、振り返る」過程を意識した授業展開を積み重ねる。→「指定訪問」「授業を見学交流会」等の研修機会の充実 「問題」を大切に「望ましい集団づくり」に努める。→「比較・検討」に係る学習場面の一層の充実 少人数制等の指導形態の工夫が可能となる指導体制を構築する。 諸調査・テスト等を効果的に活用し、学習の定着状況を把握する。 「自学のやり方」を提示し、家庭学習で基礎的・基本的な定着を図る。 		
具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> ○後半重視型の授業過程を定直し、「分かる・できる・楽しい授業」を目指して校内研究を推進した。 ○授業改善に向け、5回の授業研究会を実施。事後研究会では、「主体的・対話的に深い学び」の3つの視点から児童の姿で授業を検証した。また、12月までに「授業を見学交流会」を11回実施した。 ○算数科を中心に比較・検討する学び合いの場を重視し、ねらい達成のための学習活動や発問の仕方などについて研修を深めた。 ○算数科で学習室を利用して少人数学習に取り組んだ。 ○「自学ノート展」を年間開催し、学年だけでなく良いノートを紹介した。 		

達成状況	<ul style="list-style-type: none"> 県学習状況調査で、4、5年生はほとんどの教科で県平均を上回った。6年生は、県平均とほぼ並びであった。 「主体的で対話的な学び」の具現化について、質問紙調査「話し合う活動に進んで取り組んでいる」の肯定的回答は95.2%、「話し合う活動を通して自分の考えを深めたり広げたりしている」の肯定的回答は87.9%であった。 	<table border="1"> <thead> <tr> <th>県学習</th> <th colspan="4">各教科平均通過率</th> </tr> <tr> <th>状況調査</th> <th>国語</th> <th>社会</th> <th>算数</th> <th>理科</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>6年</td> <td>本校 76.9</td> <td>71.5</td> <td>73.3</td> <td>79.9</td> </tr> <tr> <td>年</td> <td>全国 79.7</td> <td>71.5</td> <td>69.1</td> <td>79.7</td> </tr> <tr> <td>5年</td> <td>本校 71.4</td> <td>74.8</td> <td>68.3</td> <td>82.7</td> </tr> <tr> <td>年</td> <td>全国 66.9</td> <td>68.1</td> <td>67.5</td> <td>78.1</td> </tr> <tr> <td>4年</td> <td>本校 80.5</td> <td>80.2</td> <td>81.9</td> <td>82.0</td> </tr> <tr> <td>年</td> <td>全国 73.5</td> <td>71.3</td> <td>82.0</td> <td>82.0</td> </tr> </tbody> </table>	県学習	各教科平均通過率				状況調査	国語	社会	算数	理科	6年	本校 76.9	71.5	73.3	79.9	年	全国 79.7	71.5	69.1	79.7	5年	本校 71.4	74.8	68.3	82.7	年	全国 66.9	68.1	67.5	78.1	4年	本校 80.5	80.2	81.9	82.0	年	全国 73.5	71.3	82.0	82.0	D
県学習	各教科平均通過率																																										
状況調査	国語	社会	算数	理科																																							
6年	本校 76.9	71.5	73.3	79.9																																							
年	全国 79.7	71.5	69.1	79.7																																							
5年	本校 71.4	74.8	68.3	82.7																																							
年	全国 66.9	68.1	67.5	78.1																																							
4年	本校 80.5	80.2	81.9	82.0																																							
年	全国 73.5	71.3	82.0	82.0																																							
自己評価	<ul style="list-style-type: none"> チーム化を図って取り組んだ授業研究会の事後研究会は、グループワークセッション内で改善案を話し合い、全体で共有することで、授業改善に生かすことができました。 「授業を見学交流会」の実施により、多様な手立てを学び合い、授業力の向上や指導技術の継承ができました。 「くらべる」を合い言葉に、教師と児童が共に学び合うことを意識できたことで、学び合うことのよさを実感する児童が増えた。 少人数学習によって、児童の学習意欲が高まり、教師は顔の見取りを丁寧に行うことができました。 さらに「くらべる」学び合いを充実させるために、「聞く・話す力」を学年に応じて高めたい。 	B	C																																								
評価基準	<ul style="list-style-type: none"> A: 具体的な活動がなされ目標を達成できた B: 具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない C: 具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない 																																										
学校関係者評価と意見	<ul style="list-style-type: none"> 県学習状況調査では、3教科が県平均を下回ったが、全体としては良好な状況である。質問紙調査における学習意欲の変化にも成果が感じられる。授業における児童の様子にも、主体的で対話的な姿が感じられる。 研修の取組にも、全体として高まる工夫が見られる。 自学ノート展や通信等での情報提供も、児童・保護者に対し、学校が目指している姿が明確に伝えられていた。 	A	C																																								
自己評価及び学校関係者評価に基づいた改善策	<ul style="list-style-type: none"> 児童の学び合いの中で高め合う場を確保し、質問紙調査「自分の考えを深めたり、広げたりすることができる」という項目への肯定的な回答が、各学年で改善されるようにする。 算数科で少人数学習を推進するとともに、他教科でも、児童の達成状況を確認に見取るようにする。 	A	A																																								

5 成果と今後の展望

(1) 成果

○学校経営目標の具現化を目指し、目指す児童像から「育てたい資質・能力」を設定し、前年度の反省を踏まえて重点項目を示した。各主任が、学年部や指導部の経営案に重点項目を反映させ、具体を進めることができた。

【校内体制の整備】

○次年度の構想にあたっては、目指す児童像につながる「育てたい資質・能力」の内容・文言の見直しと児童等に示すキーワード（手立て）の設定を学校評価に合わせ全職員で行ったことで、教職員の参画意識が一層高まった。

【キーワードの設定とビジョンの共有】

○「他者との協働により学びを深化する力（キーワード：学び合い）」の具現化については、重点教科である算数科の「比較・検討」に係る指導を要とし、他の教科等においても重点的に取り上げ、横断的な取組とすることができた。

【一覧表の作成・整理】

○「くらべる」という言葉が、その手法とともに児童に定着した。算数科の同じ単元の中でも、「くらべる」のに取り組みやすい時間とそうでない時間があることが見えてきた。徐々に、より効果的に「くらべるタイム」をもてるようになってきた。

【くらべるタイムの充実】

○算数以外の教科においても、「くらべる」視点を焦点化することによって、話し合い、学び合い、課題解決に向かえる手応えがあった。

【他教科への広がり】

○あきた型学校評価を基盤として、職員による自己評価や保護者アンケート、児童による四小学びのアンケート等を実施し、その結果を踏まえた年度中の成果や課題を共有し、改善等を行うなどして、一連のPDCAサイクルを構築することができた。

【評価の構築】

(2) 今後の展望

- 「くらべるタイム」は、できるだけ児童の発言をつないで児童の言葉でまともに迫りたい。どんな視点を与えるか、児童の発言をじっと待てるかなど、クリアすべき課題が見えてきた。
- 総合的な学習の時間での「特徴的な一単元」を整理・開発することを目指し、3年生以上でプランニングシートを作成した。教科等とのつながりも明らかにして、教科等横断的な視点で特徴的な単元内容を捉え直し、令和5年度以降のマネジメントに生かせるようにしたい。
- 生活科・総合的な学習の時間や他教科等の学習における地域人材の活用等については、更なる児童の学びの充実につながるよう、地域の協力の基、一層の連携をしながら取り組んでいく必要がある。
- 引き続き細かなPDCAサイクルにし、短期間での改善、機を逃さず教職員で協議しながら、教職員や児童を巻き込んだカリキュラム・マネジメントの更なる推進を目指していきたい。

第2節 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた取組

【能代第二中学校】

はじめに

(1) 本校の学校経営とカリキュラム・マネジメント

本校では、「秋田県・能代市が目指すふるさと教育の充実のために、全教職員が自分の立場から学校経営に参画する手立てを共通の用語で伝え合い、実践すること」を学校経営の理念としている。共通の用語とは、学習指導要領、県の指針、市の学校教育に示されたものであり、共通実践によって当たり前のことの精度を高めることが学校の教育力の向上につながると捉えている。当たり前の精度の高さによって基盤が整うほど、地域や学区、生徒の実態に応じた学校の特色は一層明確になっていくものとする。

本校職員は同僚性が高く、チームとして組織的な取組を推進しやすい。また、変化を厭わない職員、生徒は本校の校風ともいえ、恵まれた環境にある。

カリキュラム・マネジメントも上記の理念を基に進め、授業づくりについては「秋田の探究型授業」における授業改善に沿って行っている。



地域に根ざした特色ある教育活動



(2) 共通の理念、共通の用語

秋田県教育委員会が学校教育共通実践課題として推進している「ふるさと教育」は、全教育活動を通して「地域に根ざしたキャリア教育の充実」及び「“問いを発する子ども”の育成」に取り組むことを核に、生きる力の育成を目指している。全国的に高い評価を得ているものであり、能代市の学校教育、本校の学校経営も「ふるさと教育」を基盤としている。

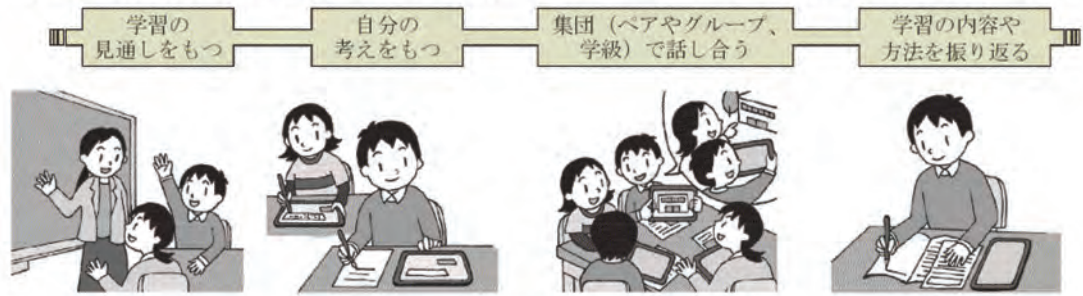
そこで本研究の基軸を「ふるさと教育」、そして「“問いを発する子ども”の育成」の核となる「秋田の探究型授業づくり」とし、全職員が共通の理念、共通の用語で研究を進められるようにする。単に型をなぞるだけでは「秋田の探究型授業」とは言えず、各プロセスを機能させることを重視しており、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善が図られる。よい授業のイメージが全県的に共有できており、共通の理念、共通の用語での研究が容易になる。

したがって、本研究は本校の独自性を強めることより、本県・本市が脈々と取り組んできていることの精度を一層高めることに力点を置く。これは、本校職員が本校で培った資質・能力、身に付けた指導スキルは、他校に異動しても、ポジションが変わっても通用するということにもなる。成果の波及という観点からも、本調査研究の趣旨に沿っているものと捉えている。

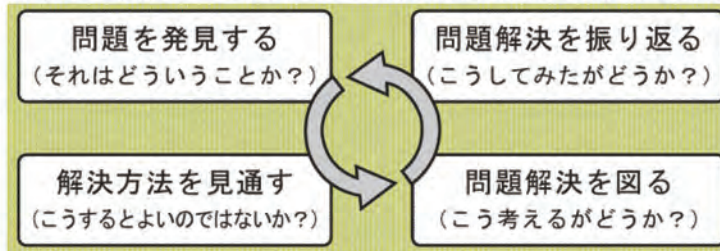
共通の理念、用語である「“問いを發する子ども”の育成」「秋田の探究型授業」

【「秋田の探究型授業」の基本プロセス】

図は「令和4年度秋田県教育委員会学校教育の指針」より



「問い ≠ 疑問」「問い = 発信」 → 双方向の活動【協働的な学びの根幹】



R4 能代市の授業づくり【本年度の重点】

学習の見通しをもつ



自分の考えをもつ



集団(ペア・グループ・学級)で話し合う



学習内容や方法を振り返る



【「秋田の探究型授業」の基本プロセス】

主体的な学習を促す授業展開の工夫

- ◇前時との違い等、既習事項を生かしながら、児童生徒の主体的な活動を促すような課題の設定をする。
- ◇主体的な学習のために、課題に対する予想や見通しの時間を設定し、授業の流れや学びのゴールを示す。

学び合いを充実させる手立ての工夫

- ◇学び合いや評価に生かす等、明確な目的をもって机間指導を行い、学びの深まりにつながる意見を意図的に取り上げる等、学び合いをコーディネートする。
- ◇児童生徒同士による対話、学習リーダーを生かした小集団による学び等、指導の目的に応じた学習形態を工夫し、全体での学び合いに生かす。
- ◇使用する場面・目的を明確にして、思考・表現ツールとしてICT機器を効率的に活用する。

1 「見方・考え方」を働かせた学びを深める生徒を育成するために

(1) 学習の基盤となる資質・能力

「生きる力」の育成を目指す「ふるさと教育」が本校の教育課程編成の根幹であるので、本研究における「学習の基盤となる資質・能力」とは学習指導要領に具体的に示された三つ

(ア 言語能力、イ 情報活用能力、ウ 問題発見・解決能力)とする。これらは主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善と軌を一にしている秋田の探究型授業づくりを通して育成されていくものと捉えている。

特に、本校は能代市が委託を受けている県の事業「ICTを活用した秋田の教育力向上事業」研究協力校であり、秋田の探究型授業を機能させるためのICT活用に昨年度から重点的に取り組んでいる。

(2) カリキュラム・マネジメントの側面 i ~ iii について

協働研究体制の推進は、i ~ iii の三つの側面を通じた教育活動の質の向上を図ることにもなると捉えている。

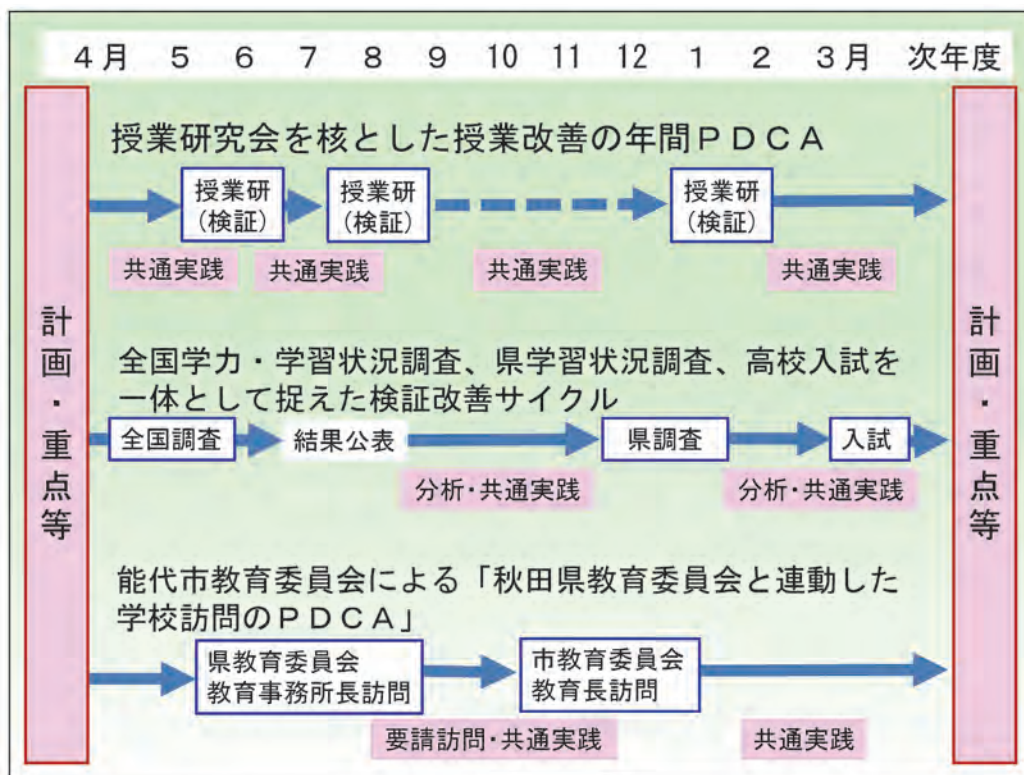
① 側面 i について

学習指導要領においては、「何を学ぶか」という教育の内容を選択して組織していくことと同時に、その内容を学ぶことで「何ができるようになるか」という、育成を目指す資質・能力を指導のねらいとして明確に設定してことが求められている。「ふるさと教育」、そして「“問いを発する子ども”の育成」の核となる「秋田の探究型授業」の充実を図るために各教科等の指導計画は作成されている。こういった視点で編成された教育課程は、「生きる力」の育成という教育の目標の具体化に結び付いていると捉えている。

協働研究体制の推進は、教科等横断的な視点からの指導のねらいの具体化や、教科等間の指導の関連付けといった点においても効果的であると考えられる。

② 側面 ii について

本研究に係る検証改善は次の三つの柱で進めている。この他に、職員による自己評価、生徒や保護者アンケートの結果を踏まえた評価、改善も行っている。



ア：授業研究会を通じた評価と改善

協働研究の象徴である授業研究会は、サブジェクトフリーの実施により、2回の事前研を核とした「自分事研究会」へと大きく進化し、授業改善のP D C Aが強化された。この授業研究会を年5回程度行うことによって、年間P D C Aサイクルを確立させている。

イ：全国学力・学習状況調査、県学習状況調査等による評価と改善

秋田県では、10年以上前から全国学力・学習状況調査、県学習状況調査、高校入試を一体として捉えた検証改善サイクルを構築しており、本校もこのサイクルによる評価、改善を行っている。

ウ：能代市教育委員会独自の学校訪問システムによる評価と改善

能代市では「秋田県教育委員会と連動した学校訪問のP D C A」を構築しており、市内の他校同様、客観的、専門的な指導を受けながら改善を進めている。

③ 側面iiiについて

本研究を効率的に進めるにあたって、人的又は物的な体制を確保していくことは重要なポイントである。視点の一つは外部から専門的知識をもつ人材を招き研究の質を高めること。もう一つは業務量を縮減し、研究の時間を確保することである。

ア：外部指導者による専門的な指導体制

教科等横断的な授業研究は学校全体の授業力向上につながる一方、中学校においては教科の専門的な研究が深まりにくいともいえる。そもそも近隣の学校も含め、学校規模が年々縮小しており、本校でも部員が多い教科で3人、部員が1人という教科もある。日常的にも、校内の教科部だけでは教科の専門的研究が深まりにくい状況になっている。したがって、校外から当該教科等を専門とする外部指導者を招いて指導を仰ぐ必要がある。幸い、本市の学校は、県教育委員会及び市教育委員会の指導主事等の外部指導者による専門的かつ客観的な指導を受けられる体制が整っており、非常に恵まれた環境にある。今年度行われる全ての授業研究会は、県教育委員会や市教育委員会の指導主事を招いて指導を仰いだ。中には、事前研の段階から直接指導を仰ぐことができたケースもあった。また、本校の経営の重点の一つである特別支援教育の充実に関しては、能代市教育委員会の特別支援教育統括コーディネーターや県立能代支援学校の教育専門監等からの支援により大きく進展している。

また、本研究によるものではないが、能代市山本郡の教職員で構成する「能代山本教育研究会」では、長年、各教科等の部会単位で授業研究会を行ってきた。校内だけでは補いきれない自分の専門教科の指導について、存分に語り合い、研修を深められる場になっている。今年度から、授業研究会の参加について、部会を超えての参加が可能となった。「精度の高い秋田の探究型授業、いい授業」のイメージの共有が能代市山本郡で一層図られていくことを期待している。

イ：研究時間の確保

本市で実施している学校運営協議会は、中学校区を単位としており、本校は学区の二つの小学校と一緒にしている。学校運営協議会において「地域の一員として、地域の方々と一緒に、地域を創る生徒を育成する」学校経営方針を承認いただき、地域学校協働活動推進員と連携しながら教育活動の充実を図っている。その中で、働き方改革の視

点で、「基本的には学校以外が担うべき業務」に相当する部分を地域や保護者をお願いした。能代市全体では来年度から学校集金業務も学校を経ずに行う予定である。

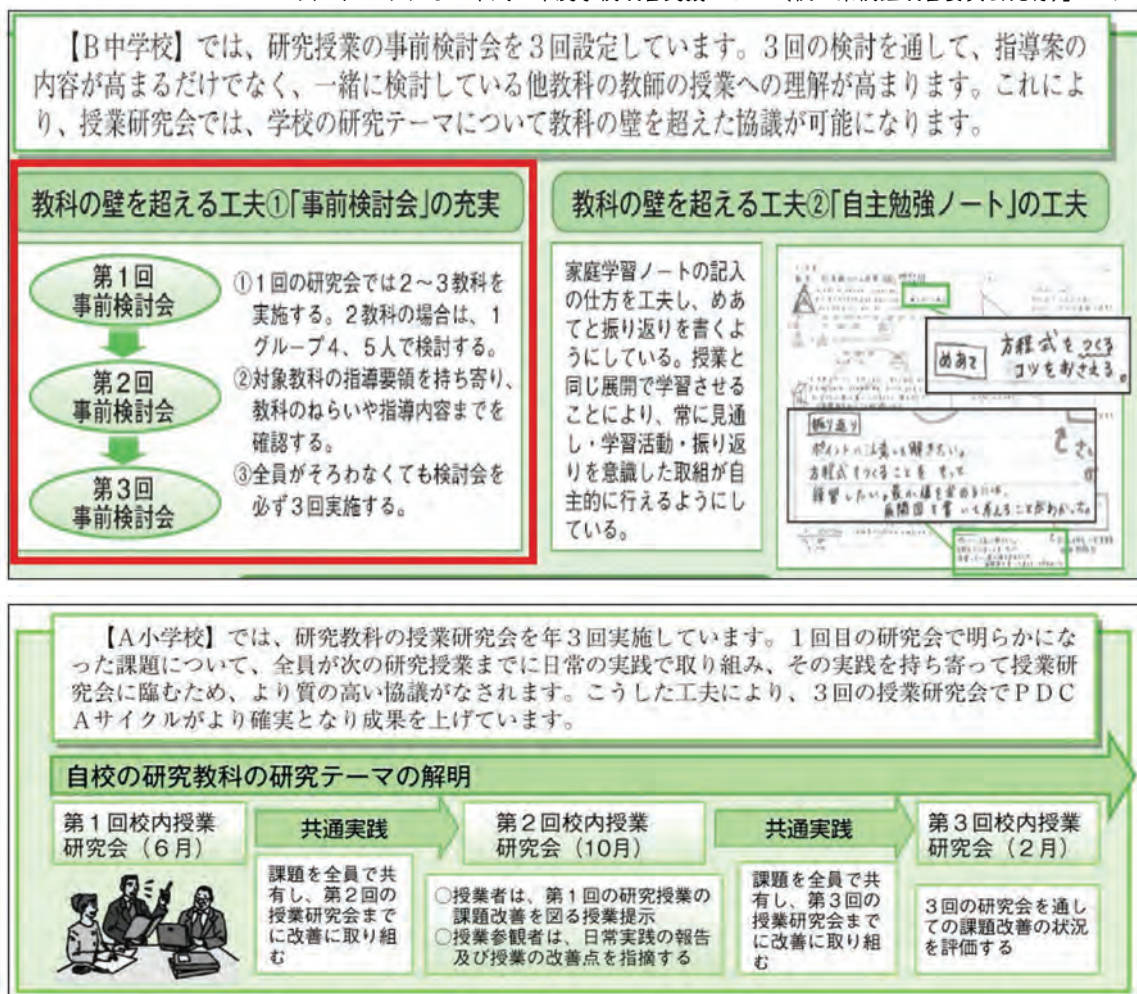
ICTは、授業だけでなく業務の効率化にも活用している。特に生徒アンケート、職員アンケート、保護者アンケート等は全てGoogleフォームを活用した。その他、諸会議の数や内容の縮減、通知表発行回数の縮減等も行った。

(3) 研究の柱「教科の壁を超えた協働研究」

① 「教科の壁を超えた協働研究」の背景

「秋田の探究型授業」における授業改善の視点は、学習指導要領に示された「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の取組及び方向性と軌を一にしていると言われており、全県的に浸透している。また、本県教員の同僚性の高さ、充実した共同研究体制もまた、全国的に評価されている。秋田県検証改善委員会（秋田県教育委員会設置）においても10年以上前から「教科の壁を超えた共同研究（本研究においては「協働研究」と表記）」がキーワードとして示されている。先述の通り、本校の研究は新たな手法ではない。協働研究体制についても、秋田県検証改善委員会が発行した学校改善支援プランの平成27年度版で校内研修の好事例として紹介されている内容をベースにしている。なお、次の図中のB中学校は、昨年度の本校校長が取組を始めた学校であり、事前研を核とした授業研究会の手法は現在も能代山本地区の各学校で進化しながら広がりを見せている。

図は、いずれも「平成27年度学校改善支援プラン（秋田県検証改善委員会発行）」より



② 「教科の壁を超えた協働研究《サブジェクトフリー》」と本校の研究主題

本研究では、「教科の壁を超えた協働研究」という表現が端的ではないため、都合上「サブジェクトフリー」という造語に置き換えることにした。既に全県的に整っている基盤をイメージしたものではあるが、単なる造語であり、本研究の成果の波及において認識されていく用語ではないと捉えている。

本研究は、ゼロからのスタートあるいは独自性を求めるものではなく、既に全県的に整っている基盤にどのように上積みを図っていくかという研究である。この捉えを一層明確にし、共通理解が図られるよう、今年度の本校の授業研究に係る研究主題を「“問いを発する子ども”の育成」の副題を引用し、「問題を発見し、他者との関わりを通して主体的に問題を解決していく生徒の育成」とした。秋田の探究型授業における授業改善を中核に据えることで、「教科の壁を超えた協働研究《サブジェクトフリー》」は一層機能すると考える。

(4) 目指す授業づくり

① 教師と生徒で共有すべき姿

生徒と共有するのは、主体的に学びを構築する生徒自身の姿である。秋田の探究型授業を基軸に全ての教科等において探究のプロセスを機能させた授業を推進していけば、生徒は学び方を身に付け、授業の中でも主体的に学びを構築する「学びのセルフマネジメント」の部分が増えていく。本研究においては、「生きる力を身に付けるために自ら学びを構築していくこと」が生徒にとって目指すカリキュラム・マネジメントである。したがって、セルフマネジメントという用語も生徒と共有する必要はなく、共有するのは「自分たちで学びを構築していく姿」である。これまで同様、教師と生徒と一緒に授業をつくりながら、自分たちで学びを構築していく部分を増やしていけるように授業改善を進めていく。近年、授業改善において「教師のコーディネート力」が着目されているが、生徒の発達の段階を踏まえながら、「学びのセルフマネジメント」への一層のシフトを図っていく必要がある。

本県独自の家庭学習文化として50年以上前から存在し、「学びのセルフマネジメント」の象徴とも言える「家庭学習ノート」は本校でも既に習慣化されている。探究のプロセスを重視した授業、板書とノートとのリンク等によって、家庭学習も自ら学びを構築するスタイルとして意識化が図られる。授業や家庭学習に主体的に取り組もうとする内発的な意識の高まりにつなげるため、生徒会（学芸専門部）が行う集会や学習強調週間、タブレット端末を使ったアンケート等を行った。

② 見方・考え方と深い学び、振り返り

「どんな見方・考え方を働かせたか、深めた学びを次につなげる振り返りの場の工夫」も昨年度の課題であったため、サブジェクトフリーの視点で具体的な対応を整理した。

ア 秋田の探究型授業のプロセスは、習得・活用・探究という学びのプロセスそのものである。教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら「深い学び」の実現を図ることへの取組は、これまでも「北の教育要覧（秋田県教育庁北教育事務所発行）」の推進資料等を参考に進めてきている。共通の用語、共通実践という視点で捉えると、「主体的な学び」及び「対話的な学び」は、秋田の探究型授業を通して共通実践の部分を多くしながら全校体制で取り組む。教科等の特質によって「見方・考え方」働かせながら

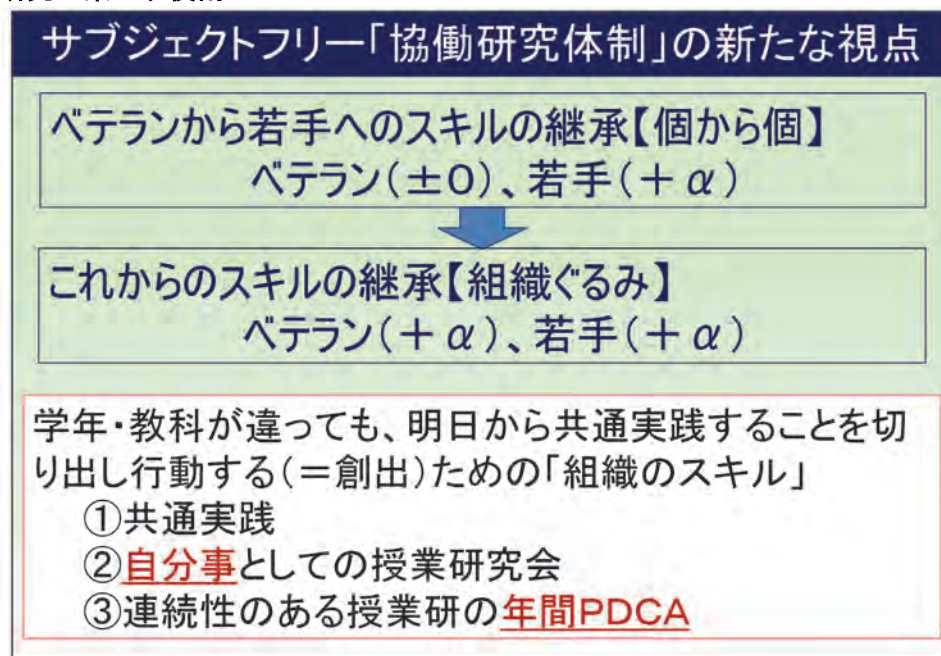
実現を図る「深い学び」は、「知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう姿」を共通のイメージとしながら各教科部を機能させて取り組むこととした。「学校全体・教科部等の小集団・個々の教員」が担う部分を明確にし、それぞれが果たす役割を共通理解しながら主体的な研究体制を構築していくことも本研究のねらいの一つである。

イ 振り返りについては、各教科等の特質に応じて何を振り返らせるかを明確にした「振り返りの視点」を各教科部ごとに作成して明示できるようにした。「見方・考え方」に触れた振り返りを教師が意図的に取り上げたり、掲示したりして共有を図った。

2 「教科の壁を超えた協働研究」への取組

(1) 教科の壁を超えた協働研究《サブジェクトフリー》体制の構築

① 協働研究の果たす役割



これまでは、ベテランの優れた指導スキルを若手教員へ継承する視点に重きを置いて取組が進められてきた傾向にあった。若手教員が増えてきている現在、ベテランから若手教員への一方向の継承から、ベテランも若手も一緒にスキルアップを図る協働的な取組へのシフトが求められていく。個のスキルだけでなく、組織としてのスキルが重要になると考える。組織としての持続可能なスキルを構築し、そのスキルが機能することにより、個々の教員の指導スキル向上につながることを期待できる。サブジェクトフリーは学校全体でスキルアップが図られるシステムであり、「令和の日本型学校教育」を担う教師の学びとして校内研修を一層充実させていく上でも有効と考える。

② 共通実践を容易にする手立て

「自分たちで学びを構築していく姿」を生徒と共有していくためには、共通実践が鍵となる。生徒にとって、教師が違えば探究のプロセスの捉えも違う上に、板書構成も違ふと

なれば、目指す姿の共有は困難になる。「秋田の探究型授業」は型ではないため、客観性、汎用性の高いエッセンスの部分の共通実践としなければ、型枠にはめるような取組や方向性の定まらない取組になりかねない。

ア：エッセンスの示し方

共通の理念、共通の用語による研究は、共通実践を容易にする。研究主任から示される研究の重点や取組のポイントは、文部科学省の資料や秋田県教育委員会発行の「学校教育の指針」、先述の「学校改善支援プラン」等に記載されている表現を基にしているため、具体的で客観性の高いものになる。

例えば、研究部報を通して「導入」についての共通理解を図る場合、表記は平成30年度学校改善支援プランを基にした。既に周知され、客観性の高い内容であれば共通実践は一層容易になる。

能代第二中学校研究部報「みち」より

「見通し」をもたせるまでが導入である。

- ①課題意識を高める。
 - ・単元の見通しから引き出す。
 - ・生徒の気付きや疑問等をどのように引き出すか考える。
 - ・課題設定は、生徒と共につくり上げる場合や生徒が話し合いながら見いだしていく場合もある。
- ②解決の見通し・ゴールの姿が見える。
 - ・何について、どのようにして考えていけばよいのかを明らかにする。
 - ・既習内容との関連に目を向けさせたり、見通しにつながるキーワードを発言させたりする。

イ：学区内の小学校との接続

学区内の湊城南小学校及び第四小学校は、授業研究が盛んで質の高い探究型の授業づくりを推進している。小学校6年間の学び方を生かした授業づくりを進めていけば、生徒にとっても連続性のあるものになる。本校は、以前から小学校との接続を生かした授業づくりを進めてきており、良好な成果につなげている。年度当初には、両小学校とそれぞれの研究計画を共有し、本校の共通実践につなげている。

数学の板書例

学習課題
「2つの2元1次方程式の交点を求めるには」

まとめ
①2つのグラフを書いて交わったところの座標を求める。
②2つの式を連立方程式とみて解を求める。

両小学校の実践により、自分の考えを表現する力、特に書く力が育った生徒が入学してきていると捉えている。ここ数年、本校ではプリントを使った授業から、小学校で行っているノートづくりをベースにした授業にシフトしてきている。現在は、本校においても生徒と一緒に学習課題（めあて）をつくり、生徒の言葉を引き出しながら「まとめ」を行うように取組を始めたところである。小学校において十分経験をしてきた生徒にとっては、むしろ当たり前の授業である。

今年度は、小学校の実践を参考に、横書きの板書の場合「学習課題（めあて）」の横に「まとめ」の部分を位置付けることとし、整合性がより意識されるようにした。

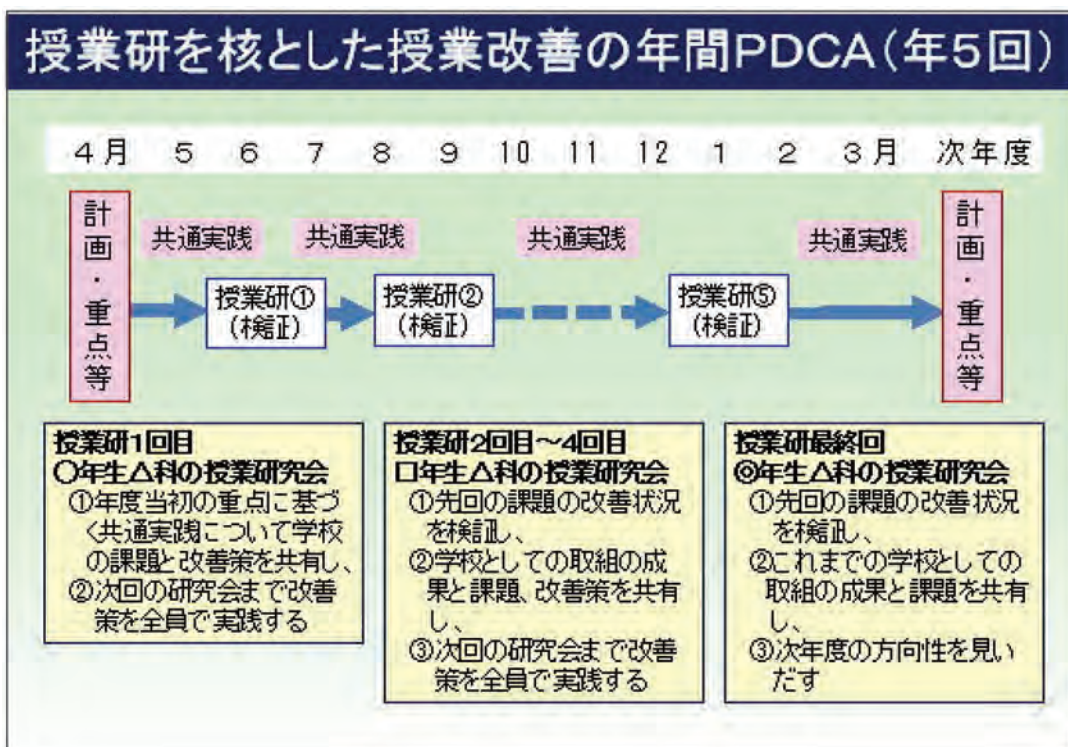
(2) 教科の壁を超えた協働研究《サブジェクトフリー》の実際

① 連続性のある授業研の年間PDCA

年間計画による授業研究会は、共通実践が成果につながっているか全員で検証できる場である。全職員が教科横断的に取り組んできたことであり、教科や学年が違っても検証する視点は変わらない。

本年度は、重点に基づき次の2点を共通の視点とした。

- ・「秋田の探究型授業」の基本プロセスを機能させた授業づくりについて【探究】
- ・自分の考えをもった上で、互いに伝え合う場の工夫と充実について【学び合い】



図の通り、授業研の1回目は、年度当初の重点に基づく共通実践がどう機能していたか、各自（各教科）の実践と照らし合わせて成果と課題を検証し、次回の授業研まで全員で取り組む改善策を切り出し、次の日から共通実践する。2回目以降は、全員で取り組んできた改善策は当日の授業で成果として表れていたか検証し、課題についての改善策を次回の授業研まで共通実践するというサイクルである。最終回は、検証した成果と課題を次年度の計画や重点の作成に反映させるための場にもなる。

② 事前研究会からつながる「自分事」授業研究会の構築

教科横断的な授業研究を進めていく上で、成果と課題を協働で切り出し、改善のための共通実践を進めることが重要である。昨年度も教科横断的なチームで2回の事前研究会を行い、授業研究会の充実を図ってきた。

先述の通り、本校における授業研究会は、共通実践がどう機能していたか教員一人一人が自らの実践と照らし合わせて検証する場として位置付けられている。すなわち授業者はもちろん授業者以外も「自分事」というスタンスが前提になる。指導案づくりの段階から学校の重点や共通実践と照らし合わせながら、全員で関わっている。事前研究会の段階から一人一人のスキルアップが図られることにもなる。

授業研究会を通しての教科横断的な学校全体のスキル向上と、当該授業者の教科専門的な指導スキルの向上の両立は、次のように図られる。

【学校全体のスキル向上】

- ・学校主体による授業改善の年間P D C A

【当該授業者の教科専門的な指導スキルの向上】

- ・県教育委員会や市教育委員会の指導主事等の外部指導者による指導助言

授業研究会までの流れは次の通りである。



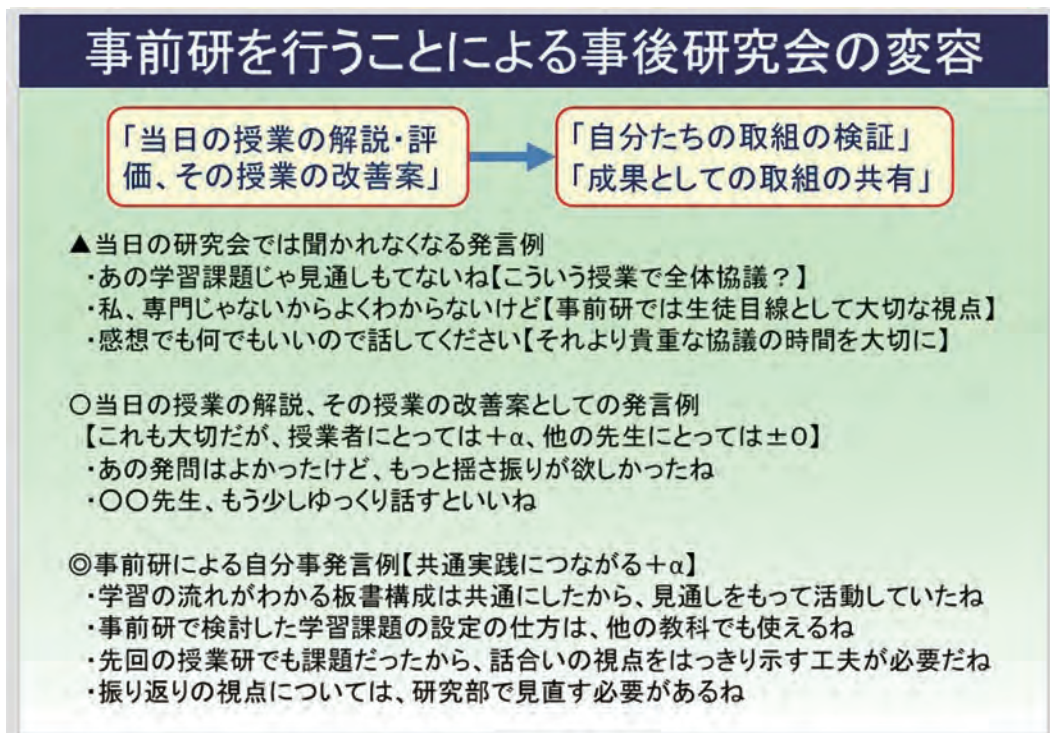
指導案は、まずは教科部において、教科の専門性や教科等の特質によって「見方・考え方」働かせながら実現を図る「深い学び」等について検討する。

事前研究会1回目は、全教員による教科横断的なメンバーで検討をする。全員が当該教科の指導要領解説を手元に置き、深い学びの姿「知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう姿」を共通のイメージとして検討会に臨んでいる。

本校に限らないことだが、長年の取組により「教科の専門性という壁」は意識されていない。事前研においては「専門外だからよく分からない」という視点はむしろ重要な視点である。「他教科の教員が分からない授業は、生徒も分からない授業」であり、生徒目線からの授業改善の視点になるため、ストレートな意見交換の場になる。教科の専門的な指導の妥当性については、授業研究会当日に県教育委員会や市教育委員会の指導主事等の外部指導者からの指導助言をいただくこととしているので、全体の検討の視点はぶれずにすむ。他教科の教員から解説の表記を根拠に授業のねらいの妥当性について指摘があったり、重点を機能させるため新たな提案があったりするなど、メンバー全員で指導案をつくり上げている。

2回目は、検討した指導案を基に模擬授業等を行い、発問等の妥当性を検討し精度を高める。本校の重点の一つであるICT活用を一層推進するため、今年度は模擬授業において教師専用の生徒アカウントID・パスワードを設定し、参加者が実際にタブレット端末を手にしながらか活用方法の妥当性を検討した。

2回の事前研究会による検討を経て全員でつくり上げた指導案は、当該授業者だけでなく、その時点での学校全体の授業づくりを表出するものとなる。自分たちの取り組んでいる共通実践と照らし合わせて検討した発問が当日の授業で機能していたとすれば、学校全体の取組、一人一人の取組の方向性が正しいことになる。逆に機能しなかったとすれば、全体で改善に取り組む課題として切り出されることになる。授業同様、個と全体が往還してつくり上げる研究になると考える。



③ 協議の視点を深掘りする手立て

昨年度も授業研究会の視点は年間を通して共通のものとし、教科横断的な視点で協議を深めることができた。今年度は、事前研究会及び当日の授業研究会の参加メンバーを「探究グループ」と「学び合いグループ」に分けて検討を進めた。グループに分ける手法は、先述の「ICTを活用した秋田の教育力向上事業」支援校である能代第一中学校の取組を

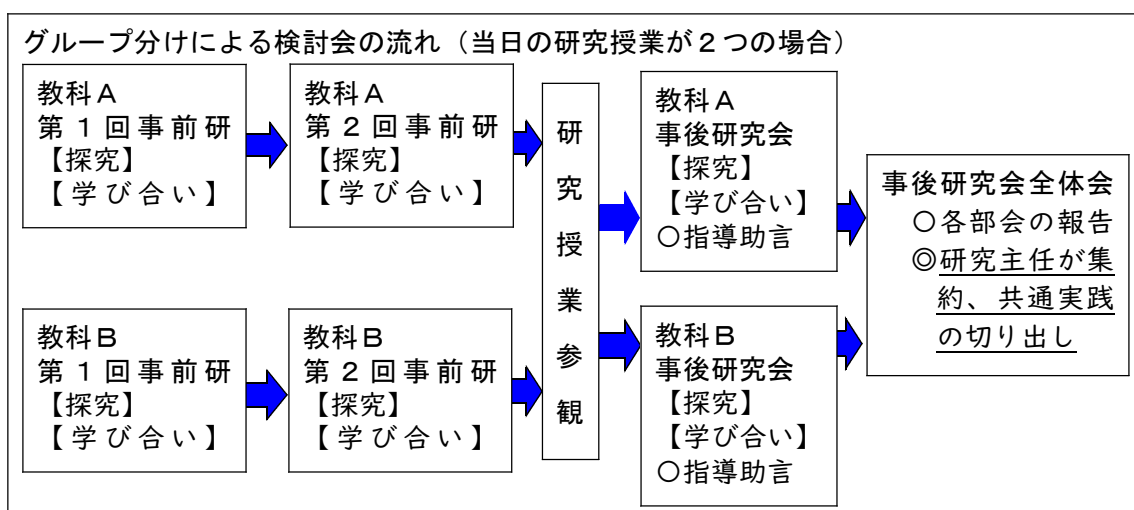
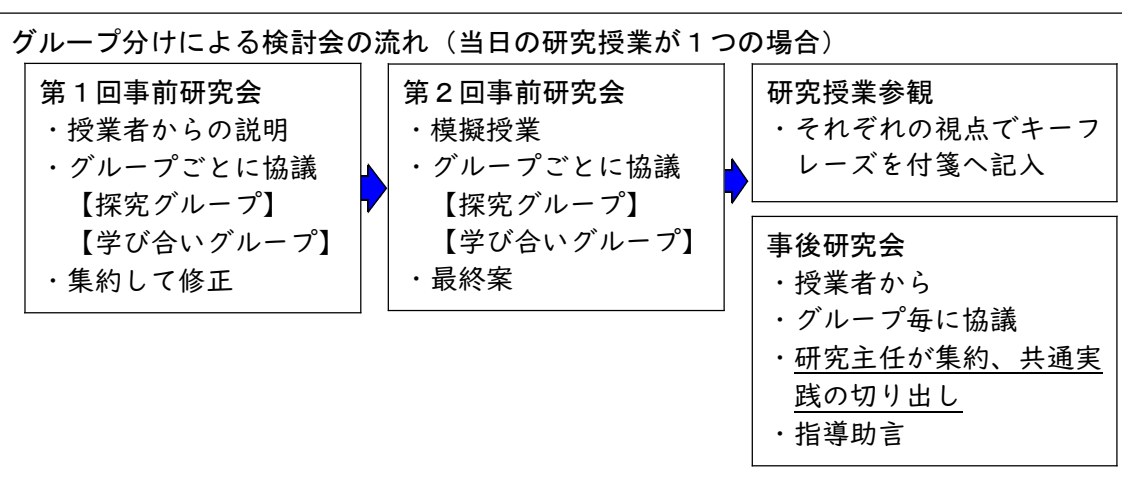
参考にしている。

【探究グループ】「秋田の探究型授業」の基本プロセスを機能させた授業づくり

【学び合いグループ】自分の考えをもった上で、互いに伝え合う場の工夫と充実

一つの授業に対して、探究グループは見通しから振り返りまでの一連のプロセスについてどう機能させるかという視点で指導案検討をし、当日も同じ視点で授業を検討する。学び合いグループは、探究のプロセスにおける「学び合い」に焦点化し、思考・表現ツールとしてのICTの活用も含めて検討する。当然ながら協議の内容は重なる部分もあるが、アプローチの仕方が異なる。探究グループは、授業全体を俯瞰しながら学び合いの位置付けも含めて検討する。学び合いグループは、学び合いの質を高めることに重きを置きつつ、学び合いにつながるプロセスの妥当性も検討する。

なお、グループの振り分けは年間を固定したのではなく、研究会毎に入れ替わるので、それぞれの視点で研究を深められる。



それぞれのグループの具体的な視点については、研究部報で次のように示し、共通理解を図った。

能代第二中学校研究部報「みち」より 第1回事前研の具体的な流れ

① 事前に指導案がある場合、読んでおいてください。

(学習指導案、本時の教科書、学習指導要領解説)

- ② 経営のしるべと①の資料を持参し「探究」「学び合い」にまとまって座ってください。
- ③ 司会が進行し、授業者から説明をしてもらいます。(10分くらいで)

(授業者) 検討してほしい課題や助言を求める点を明確にする。

(参加者) 学校の重点と検討課題に沿って討議を進め、改善点を明確にする。

- ④ メンバーから質問をしてもらいます。
- ⑤ 「探究」「学び合い」グループに分かれて「学校の重点」にそって検討してください。

※授業者はどちらの検討会にも適宜参加し、質問を受けたり共に協議したりしてください。

- 「探究」グループは、秋田の探究型の基本プロセスを機能させた授業になっているかを中心に検討を進めてください。(※下のものは例です。)

- ねらいを達成するための学習課題は適切か。
- 学習の見通しは、課題意識を高めるものか、解決の見通し・ゴールの姿があるか。
- 自分の考えをもつことができるか。
- 生徒に働かせたい「見方・考え方」が明確か。
- 学び合いの視点は何か。
- 話し合う必然性があるか。
- 学習課題とまとめに整合性はあるか。
- 振り返りでは、どんなことを振り返るのか。
- 生徒がこの1時間でどんな力が付くのが明確か。(評価規準は妥当か)

- 「学び合い」グループは、授業者から提案された学び合いの場面について検討してください。

- 自分の考えをもった上で伝え合うことができそうか。
- 話し合う必然性があるか。(解決の必然性、表現の必然性)
- 話し合う目的・視点は生徒に分かりやすく示されているか。
- 学び合う場面の設定は有効か。
- 思考・表現ツールとしてICTを効果的に活用することはできるか。
- 協働的な学び(対話的な学び)にするための教師のコーディネートが具現化できているか
(発問や補助発問等、言葉の吟味や学習形態、ICTの活用など等)

能代第二中学校研究部報「みち」より

第2回事前研の具体的な流れ

授業者

- ・ 模擬授業やタブレットの準備
- ・ 前回と変更箇所を中心に指導案の説明
- ・ 場面ごとの重点を確認
→ 目指す生徒の姿や言葉の共有
① 課題設定 ② 見通し ③ 学び合い
- ・ ①～③まで場面毎に模擬授業
- ・ 模擬授業に対して協議
- ・ 協議内容を基に改善箇所の模擬授業

参加者

- ・ 指導案を読んでおく。各自タブレット準備
IDはst■■■■ パスワードは■■■■
- ・ 模擬授業では生徒役（どんな生徒役をするか分担）
- ・ 生徒役をして気付いたことをメモ

・ 教師の発問や切り返し、価値付け等、
学び合いが機能しているかを話し合い、
改善点を出し合う。

・ 学習活動や発問等、気になるところを
一つ一つ止めながら確認をしていく。

**この部分は共同研究でとても大切なところ
ですので、たくさん意見を出してよりよい
ものにしていきましょう。**

④ 共通実践を切り出す手法

昨年度の研究では、事後研究会から共通実践を切り出すところまで進んでいなかったため、年間のPDCAサイクルの強化を図るためにも取り組む必要があった。今年度の研究で最も力を入れた部分であり、かつ改善の余地がまだまだ残っている部分でもある。

しかし、研究の方向性を共有している分、授業参観の視点が焦点化されたり、付箋紙を使ったワークショップ型の協議内容にも変化があったりと成果につながった部分も大きかった。

ア：授業参観における付箋紙記入、グループ別協議の変容

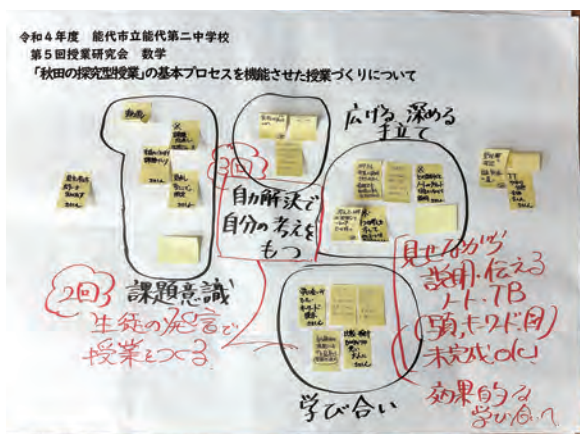
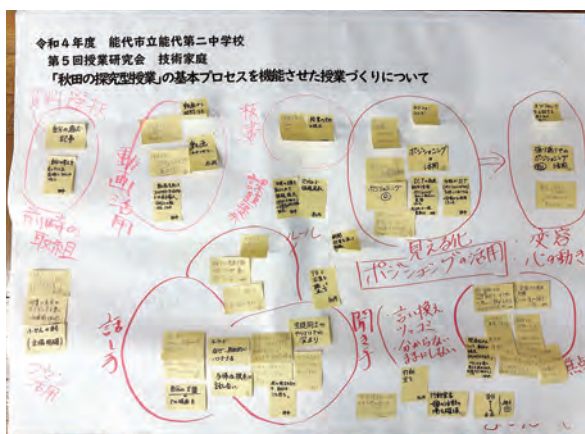
秋田県では、平成20年あたりから事後研究会における協議は「付箋紙を使ったワークショップ型」を取り入れる学校が広まり始め、多くの学校において行われている。本校も以前から取り入れている手法であるが、一層焦点化が図られるよう改善を図った。

これまでは、どちらかといえばその授業の「成果」と「課題」を切り出して協議を進めていたため、その授業の改善策は明確になるが、学校全体の取組の検証につながりにくい傾向にあった。また、「付箋紙を使ったワークショップ型」は、より多くの意見を出しやすいという利点はあるが、視点を絞らないと参加者は手持ちの付箋を全て貼って説明をしてしまうため時間が足りず、全体共有する際も「○○や△△…□□…◇◇など

たくさんの意見が出ました」といった紹介で終わってしまうこともあった。

今年度は事前研究会から「探究グループ」と「学び合いグループ」に分け、視点を絞って協議を重ねてきている。授業参観をする場合も、「探究」の視点でのキーワードは黄色の付箋、「学び合い」の視点でのキーワードは青色の付箋に記入することで、より一層意識化を図った。全員、黄色と青の付箋を持ち、「探究グループ」のメンバーであればそれぞれの視点に合った色の付箋に記入し、黄色の付箋は自分たちの協議に、青色の付箋は「学び合いグループ」のメンバーに渡して協議に使ってもらえるようにした。

事後研究会においても「探究グループ」と「学び合いグループ」に分かれて協議するので、焦点化された協議になる。次の写真は、社会科の事後研究会における「探究グループ」と「学び合いグループ」の協議結果である。貼られている付箋の数は、一般的な協議の半分以下である。この時、参加者は手持ちの付箋を全て貼っておらず、手元に残したままであった。書いた付箋は全部貼らないといったルールを事前に確認したわけではないので、改善の方向性を共有するため、発信する情報を各自が取捨選択していたことになる。変化を厭わない校風が、内発的な変化を生み出したのかもしれない。

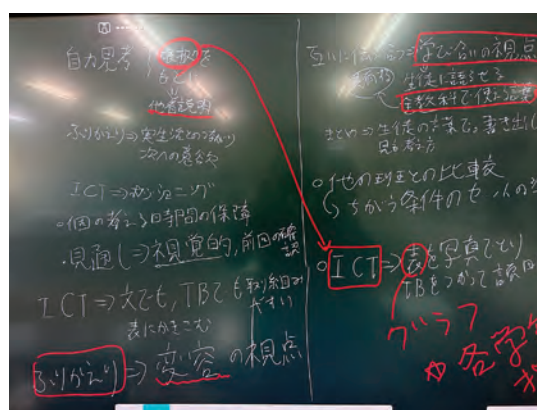


イ：共通実践を切り出すことの課題

第1回の授業研究会（特別支援教育）では、県教育委員会の特別支援教育担当指導主事に授業の指導助言を仰いだ他、市教育委員会指導主事から協議におけるファシリテーションについての指導の機会を設けていた。

しかし、共通実践を切り出すためのファシリテーションについては、いくつかの手立てを経る必要があった。

国語科と社会科の2教科同時で行った第2回授業研究会を例に挙げる。本校では、2教科の分科会で協議したことを全体会場の場を設け、集約しながら共通実践することを切り出すのは初めての試みであった。結果的には、それぞれの教科の検討会で焦点化してきたことを、全体会で研究主任が集約しながら共通実践することを切り出し、研究部報で共通理解を図ったが、切り出す手法についての課題も明らかになった。



能代第二中学校研究部報「みち」より

<第3回授業研究会までにみんなで取り組んでいくこと>

- ①個の自力思考の時間を保障する。→学び合いに向けて、個の考えをもたせて臨ませるため
- ②子どもが発表したことをすぐ認めるのではなく「どう思う?」「どういうこと?」「大切なことは?」など切り返しをして広める。
- ③子どもの言葉で授業作りをする。課題設定、見通し、学び合い、まとめ等
- ④ねらいを達成するために、学び合いの視点を示し、形態を工夫する。
→「比較するのか」「検討するのか」「自分の考えの再構築なのか」

しかし、複数の教科部会で同じ視点で協議してきたことであっても、二つの部会の提案から共通の成果と課題等を切り出すことは容易ではなかった。各部会の各グループの協議の段階で、ファシリテーションが十分機能せず、方向性に微妙なずれが生じたまま全体協議に入ったことが課題として明らかになった。

そこで、研究主任から各グループ協議におけるファシリテーションについて共通理解を図るため、授業研究会前日までに、各グループのファシリテーターと打合せを行った。このことにより、全体会での集約が効率的になった。



ウ：共通実践事項

諸事情により、年間5回を予定していた授業研究会は延べ6回になった。最後の授業研究会では、これまでの経緯を振り返り、次年度の改善等について各教科部で検討していくこととした。

- ①ユニバーサルデザインの視点で授業づくりをすすめる。
- ②手順や学習の流れを視覚化する。情報の整理のため「色」を効果的に活用する。
- ③学習が困難な生徒を想定して授業づくりをする。(ICTの活用)
- ④個の自力思考の時間を保障する。
→学び合いに向けて、個の考えをもたせて臨ませるため
- ⑤子どもが発表したことをすぐ認めるのではなく「どう思う?」

「どういうこと?」「大切なことは?」など切り返しをして広める。

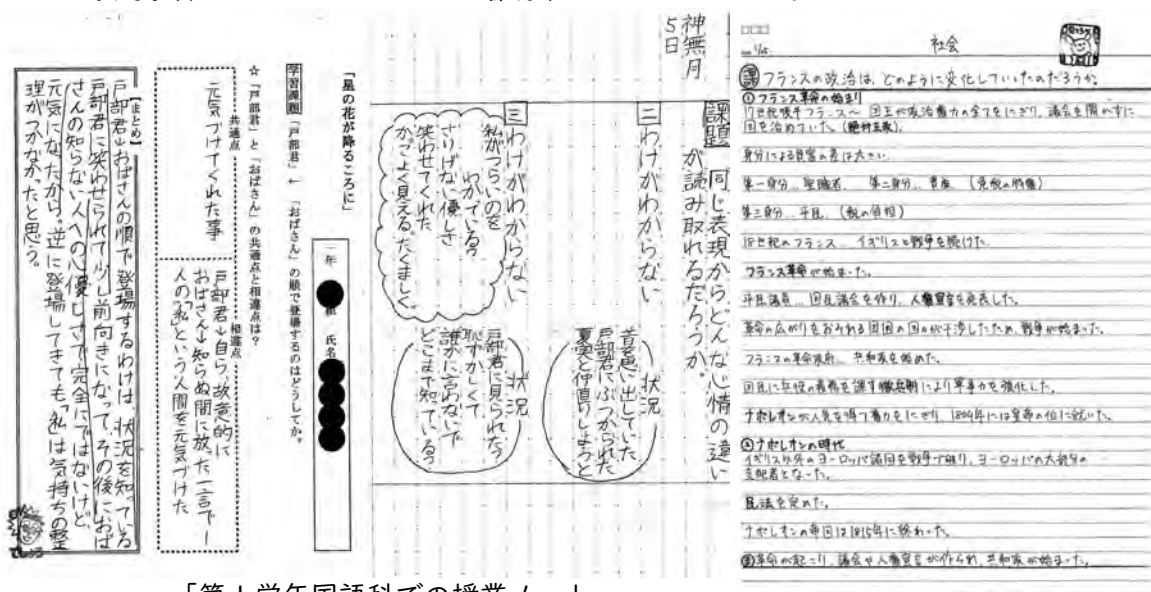
- ⑥ 子どもの言葉で授業づくりをする。
課題設定、見通し、学び合い、まとめ等
- ⑦ ねらいを達成するために、学び合いの視点を示し、形態を工夫する。
→「比較するのか」「検討するのか」「自分の考えの再構築なのか」
- ⑧ 考えの根拠を大切に授業を展開する。
- ⑨ 個の考えをICT等を活用して共有し、書き込みながら考えを再構成していく。
- ⑩ 学び合いの視点と振り返りの視点を共有する。
- ⑪ 自分の考えをもつことができる自力解決場面を保障する。
- ⑫ 自分の考えを分かりやすく伝えるために、ノートやタブレット端末を指さしながら行う。

(3) 生徒にとっての学び

① 探究のプロセスの共有

先述の通り、生徒と共有するのは、主体的に学びを構築する生徒自身の姿である。生徒には「毎日の授業は、秋田の探究型です」とか「学びのセルフマネジメントをしましょう」という説明はしていない。生徒会が中心になって行う活動等もあるが、毎日の授業づくりを充実させていく中で「学び方」を共有していくのが重要と考える。

既に多くの学校でも行われていることだが、本校では共通実践の一つとして、課題づくりやまとめを生徒主体で行う場面を増やし、学び合い等に必要な時間を生徒に決めてもらうなど一部のタイムマネジメントも生徒主体で行うように意識して授業を行っている。探究のプロセスを重視した授業、板書構成、学びを振り返られるノート、自ら学びを構築する家庭学習ノートのつながりが一層明確になってきている。



「第1学年国語科での授業ノート」

「第2学年生徒の家庭学習ノート」

② 生徒主体の取組

より主体的な家庭学習を推進するため、生徒同士で互いの家庭学習ノートにアドバイ

スをし合う活動を取り入れている。アドバイス内容を付箋に書き、ノートに貼りながら情報交換等を行っている。



3 その他の取組

(1) 教科部ごとの取組

本校は大規模校ではないが、音楽、美術、技術・家庭以外の教科は、複数の教員を配置いただいている。上記3教科は3学年全てにおいて1人で授業をするので、必然的に学年横断的な取組ができる。それ以外の教科は、学年によって指導する教員が異なる場合がある（TTを組んでいる学年を除く）ので、教科主任を中心としたチームが、学年横断的な取組を支えることになる。

全国学力・学習状況調査、県学習状況調査、高校入試を一体として捉えた検証改善サイクルは、当該教科だけの検証改善にとどまらず、教科、学年を超えて学校全体で取り組むことが重要とされている。本校でも、諸調査の結果、本校の学習アンケート、定期テスト等の結果を基に、教科部単位での分析や改善策等の検討を年2回行っている。

特に、県学習状況調査質問紙調査には、教科毎の質問項目も含まれるので、より具体的な検討ができる。本校の学習アンケートも同じ項目で行っている。

6-7 技・家の勉強は好きだ

選択肢
1. 当てはまる
2. どちらかといえば当てはまる
3. どちらかといえば当てはまらない
4. 当てはまらない

選んだ気持ち

1. 内容に興味がある
2. 分かりやすい
3. 将来、社会に出たときに役立つ
4. 生活の中で役立つ
5. 考えるのが楽しい
6. 得意
7. 内容に興味がない
8. 分かりにくい
9. 将来、社会に出たときに役立たない
10. 生活の中で役立たない
11. 考えるのがめんどろ
12. 不得意
13. その他

(2) ICT活用

本校は昨年度から秋田の探究型授業を機能させるためのICT活用に重点的に取り組んでおり、令和4年度全国学力・学習状況調査質問紙や令和4年度秋田県学習状況調査生徒質問紙結果で、ICT活用についての項目が県平均を大きく上回るなど、成果につながっている。

① ICT活用イメージの共有、共通実践

タブレット端末の導入により、ICT活用の主体は教師から生徒に移行している。したがって、授業においては、インターネットで調べるとか写真等を記録するといった活用は当然のこととして、「思考・表現ツール」として活用した場合、どう授業が変わるかを共通理解した。ICT活用が目的ではなく、豊かな授業を構築するための便利な手段であるという認識を共有した。例えば、とすれば文章による表現のみに終始しがちだった学び合いは、キーワードやグラフ、図、表等を活用しながら伝え合う豊かな言語活動の場へと進化していく、そういった具体的な授業イメージを共有した。探究のプロセスを重視し、豊かな学び合いを構築してきたベテラン教師や力のある教師ほど、ICTを活用するとよい授業をする傾向があり、これは本校だけではないと感じている。教師のICT活用スキルの研修は、これまで他校同様に県や市の研修を利用してきた。本校の同僚性の高さなのか、有益な活用情報は研修会等を設定しなくても校内で波及しやすい環境にある。

※表の数値単位は%

5-1 ぶだんの授業では、コンピュータなどのICT機器をどのくらい使用していますか

選択肢	実施時期	R4. 6月			R4. 10月			学習状況調査		
	学年	1年	2年	3年	1年	2年	3年	1年	2年	3年
1. ほぼ毎日		69.5	95.2	72.6	84.0	98.7	78.6	73.4	97.4	92.4
2. 週1回以上		27.4	3.6	27.4	12.8	1.3	21.4	25.3	2.6	7.6
3. 月1回以上		1.1	1.2	0.0	2.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
4. 月1回より少ない		2.1	0.0	0.0	1.1	0.0	0.0	1.3	0.0	0.0

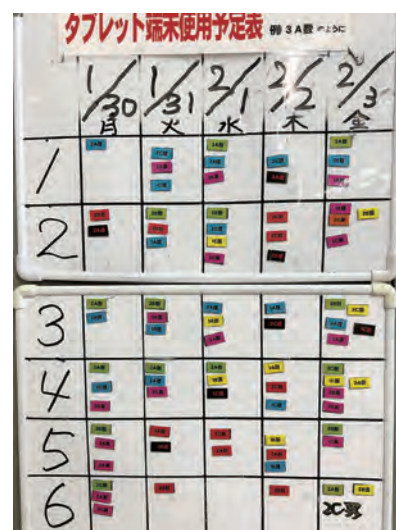
5-2 あなたは学校で、コンピュータなどのICT機器を、他の友達と意見を交換したり、調べたりするために、どのくらい使用していますか

選択肢	実施時期	R4. 6月			R4. 10月			学習状況調査		
	学年	1年	2年	3年	1年	2年	3年	1年	2年	3年
1. ほぼ毎日		38.9	60.7	53.4	55.3	79.2	61.4	57.0	85.7	74.2
2. 週1回以上		52.6	34.5	42.5	37.2	20.8	37.1	30.4	13.0	25.8
3. 月1回以上		5.3	4.8	4.1	5.3	0.0	1.4	10.1	1.3	0.0
4. 月1回より少ない		3.2	0.0	0.0	2.1	0.0	0.0	2.5	0.0	0.0

② 先進事例の成果を共有

秋田県教育委員会は「ICTを活用した授業改善支援事業」により支援校を指定して研究を行ったり「ICTの効果的な活用による学校改善支援プラン」を作成して発信したりしている。能代第一中学校は当事業の令和3年度及び4年度支援校であり、本校は協力校である。公開授業だけでなく、日常的に本校職員が授業参観等をさせていただきながら、研究の成果を取り入れてきた。①で述べたICTを活用したよい授業のイメージは、実際の授業を見せていただいた中で共有してきたものである。

職員室にタブレット端末使用予定表を掲示し、お互いの授業が見合えるような環境の工夫も参考とした。



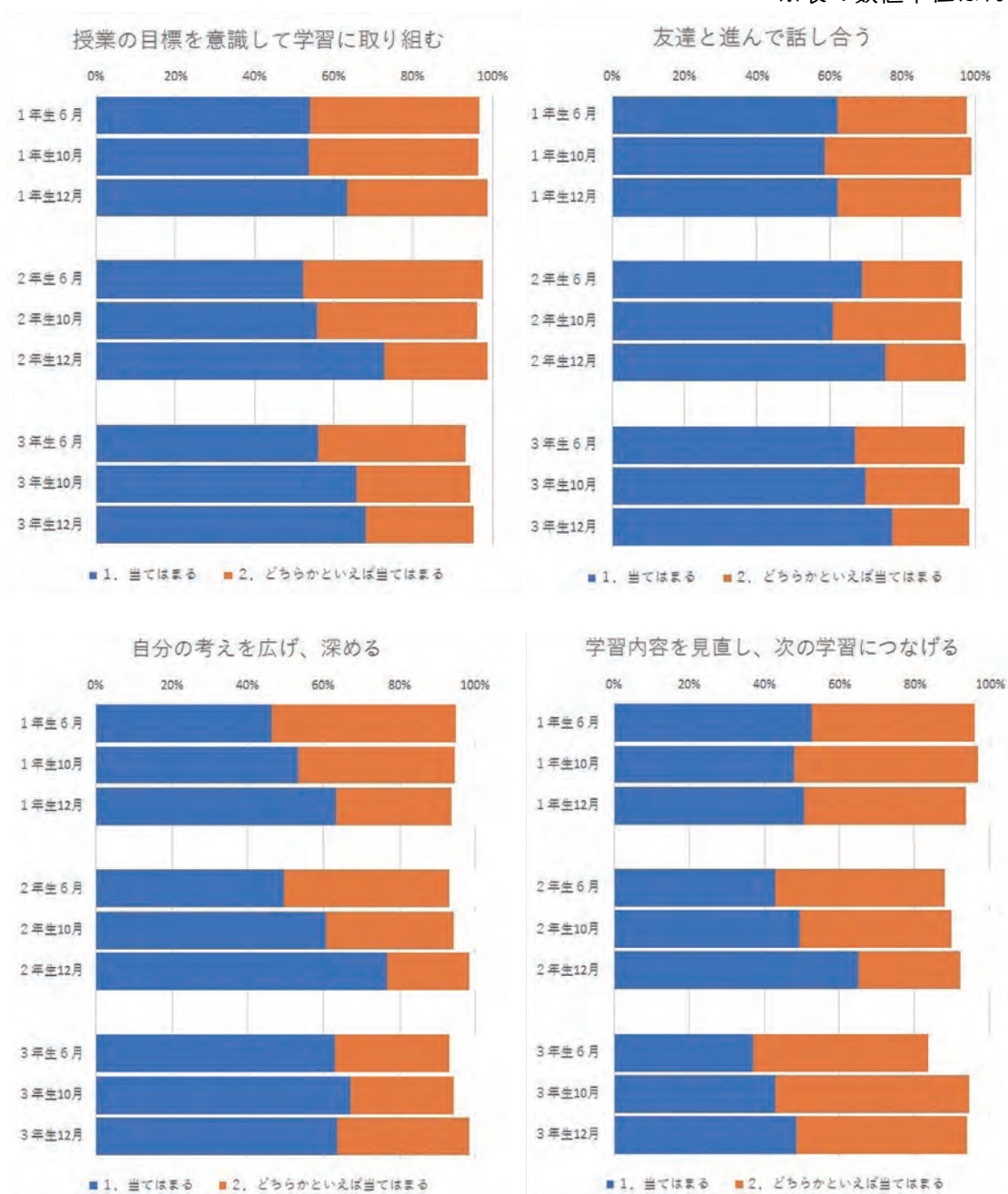
4 教育課程の評価・検証・改善

(1) 県学習状況調査生徒質問紙とリンクした評価

評価・検証を行っていく上で、研究の目的によっては学校独自の評価の設定も有効な場合もあるが、本研究においては客観的な比較ができることを重視した。国や県の調査結果等は、比較する上で客観性の高いデータである。先述の県独自の検証改善サイクルによる評価、改善は教科の結果だけでなく、質問紙調査の結果も重要な検証データとなる。

今年度から生徒アンケートは、県の学習状況調査生徒質問紙の内容を全て取り入れ、県平均との比較だけでなく、自校生徒の経年比較もできるようにした。Googleフォームの活用により集計が容易になったため、全学年、6月、10月、12月に行った。なお、12月は1、2年生の県の学習状況調査と同日に行い、データは県の集計支援システムに入れた。同日、対象外の3年生もアンケートを行っている。

※表の数値単位は%



十分な成果と言えるかは別として、6月から12月にかけて肯定的な回答の割合が、令和4年12月実施の県学習状況調査結果の県平均と比較しても有意に上回る結果となった。

生徒と共有したのは、探究のプロセスをがんばろうということではなく、探究のプロセスを重視した授業を一緒につくろうということであった。協働研究による学校全体の授業改善の成果として捉えることができるのではないかな。

5 成果と今後の展望

(1) 成果

① 当たり前前の精度を高めることの効果

全国学力・学習状況調査の児童生徒質問紙や県学習状況調査児童生徒質問紙の質問項目は、現在求められている、今後求められていく学校教育の方向性を反映させたものと捉えている。授業づくりに関する項目も「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の方向性を示すものとして、当たり前前のことの指標として捉えて取組を進めてきている。

本研究は本校独自の内容ではなく、当たり前前のこととして多くの学校で実践してきたことを整理して価値付けたり、他校の好事例を取り入れたりするなど、本県、本市で行っていることの精度を高めようとしたものである。したがって本校の授業や研究は「二中スタイル」や「〇〇式」といった固有名詞で呼ばれるものではないし、本意ではない。

諸調査の結果や職員のスキルアップなど具体的な成果につながった部分は、研究の方向性として評価できるのではないかと捉えている。成果の波及という視点において参考にしていただける部分があれば幸いである。

② 指導スキルの効率的な波及

組織的な研究は、校内における指導スキルの波及も早い。教科部内では教材データや教具の使用方法等の共有、学校全体ではICT活用スキル等の共有が促進されていると捉えている。

特に、教科主任や生徒指導主事など各部会の主担当を核としたチームとしての取組を重視したことによって、リーダーシップの醸成、スキルの波及、同僚性の更なる向上につながったと捉えている。何より、教科主任が若手であっても先輩の教科部員と授業づくりについて日常的に意見を出し合える雰囲気は本校にはある。これも当たり前と言い切るには不遜であり、職員一人一人の豊かな人間性に支えられた成果である。

(2) 今後の展望

① 当たり前前の先にあるもの

本研究は、これまでの様々な取組の精度を上げることを主軸にしてきたが、単に現在や過去をなぞる取組とは捉えていない。本県の「ふるさと教育」や「秋田の探究型授業」、「能代の教育」は、学習指導要領の改訂や「令和の日本型教育」等によって示された新たな方向性に沿って先進性を保ちつつ進化してきており、本校の取組も必然的に進化している。また、変化を厭わない校風は新たな教育活動を生み出すなど、価値の創出にもつながっている。客観性の高い取組は、持続可能な研究を可能にすると考え、今後も取組を進めていきたい。

② ICT活用と授業づくり

現在、タブレット端末を中心としたICT活用は、主に授業における「思考・表現ツール」としての活用に重きを置いてきた。活用率についてはある程度の成果が得られ、授業における活用方法についても幅が広がってきていると捉えている。

本校では、来年度からAI型ドリル(導入予定のドリルには記述問題の採点機能はない)を導入し、タブレット端末持ち帰りも含め新たな活用の方向性を探る予定である。授業においては、これまで以上に「考えたことを言葉や図・表等を使って表現し、伝え合いながら協働的に学ぶ」場面を意識しやすくなり、探究のプロセスを一層機能させた授業づくりが推進できる。家庭学習においては、AI型ドリル完結ではなく、探究のプロセスを意識して構成する家庭学習ノート(タブレット端末におけるノート、レポート的活用も含む)の役割が重要になってくる。学び方の構築の新たな方法について、研究を進めていきたい。

ICT活用による本校の学びの変化

授業

①探究型の授業イメージの明確化

「考えたことを言葉や図・表等を使って表現し、伝え合いながら協働的に学ぶ授業」

- ・ICTを思考・表現ツールとして活用した自力解決
- ・思考・表現ツールを活用した協働的な学び合い

②評価問題の使い分け

- ・基礎・基本の定着はAI型ドリル
- ・習得したことの活用は「全国調査」「県学習状況調査」「県単元評価」問題等

家庭学習(自学ノート)

○ノート(タブレット端末におけるノート、レポート的活用も含む)の役割の変化

- ・日常生活や社会と関連させた学習等、探究的な学習に焦点化

○基礎・基本の定着はAI型ドリル

第3節 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた取組

【能代市立ニツ井中学校】

1 現代的な諸課題に対応するための資質・能力を育成するために

本校の生徒は、明るく素直で、学校行事や生徒会活動、部活動に意欲的に取り組んでいる。授業に前向きに取り組む生徒が増えてきて、自分の目標を設定し、更に力を伸ばそうと努力する生徒も見られるようになった。一方で、生徒の大部分は、子ども園から中学校まで同じ集団で過ごしており、人間関係が固定化しているため、コミュニケーション能力や表現力を起因とするトラブル、不登校、自己有用感の低下等、生徒指導上の諸課題を抱えている生徒も少なくない。活動に消極的で、自分で考えようとせず人任せな行動も時折見られる。

自然豊かで、観光資源に恵まれた本地域であるが、少子高齢化、過疎化をはじめ、地域全体に活気がなくなってきているのが現実である。そこで、地域に元気を取り戻すための一員になってほしいと願い、「現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究」をテーマに掲げ、育みたい資質・能力を「地域や社会における産業の役割を理解し、地域創生等に生かす力」として研究を進めることとした。

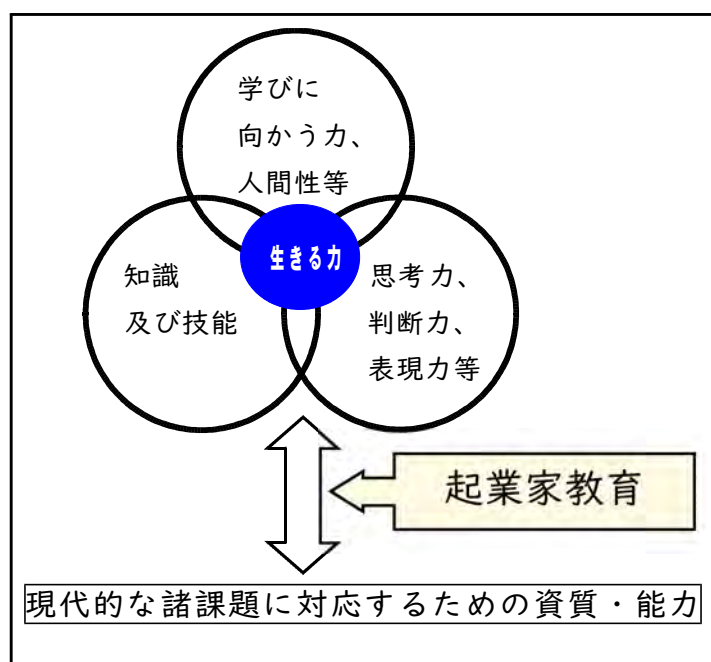
2 起業体験活動への取組

(1) なぜ、起業家教育に取り組むのか

本校は、令和元年度、文部科学省「小・中学校等における起業体験推進事業」の実践校として、ニツ井小学校と連携して研究を行った。地域と共同開発したおにぎり販売を通して、会社経営の一端を学ぶことができたが、最も大きな収穫は「起業家精神」に触れたことであり、これこそが「現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成」をする上で大切なことの一つであると考えた。

学習指導要領では、子どもたちの「生きる力」の育成を目指し、三つの資質・能力の育成が求められている。グローバル化、情報化は加速度的に進み、変化の大きな時代を生き抜く力が必要となる。

起業家教育は、起業家や経営者だけに必要な教育ではなく、高い志や意欲をもつ自立した人間として、他者と協働しながら新しい価値を創造する力等、これからの時代を生きていくために必要な力を育成するためのものである。具体的には、チャレンジ精神、創造力、



探究心等の「起業家精神」や、情報収集・分析力、判断力、実行力、リーダーシップ、コミュニケーション力等の「起業家的資質・能力」の育成を目指す。そして、起業家教育の充実、今後必要とされている「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善が推進されるとともに、学校と地域社会とのつながり（連携・協働）が強化され、「社会に開かれた教育課程」の実現に寄与すると思われる。

(2) 起業家教育の取組内容の充実について

本校では、これまでも学級活動や総合的な学習の時間等に「起業家・経営者など外部講師を招いての講演」「企業・商店の訪問」「職場体験学習」「職業調べ」「模擬店舗の出店体験」「企業・地域団体等との新商品の開発」を実施してきた。本地域の現代的な諸課題（少子高齢化、過疎化等）に対応するため、できるだけ早い発達段階から起業家教育に取り組み、「起業家精神」や「起業家的資質・能力」を育む必要性を感じ、協力校であるニツ井小学校と連携しながら、これからの時代を生きていくための資質・能力の育成を目指した。

令和3年度には、地域の課題を自分事として捉え、積極的に関わる意識を高めるために模擬会社「きみまちカンパニー」（以下「きみまちカンパニー」）を設立した。会社の組織を明確にして、「模擬店舗の出店体験」「企業・地域団体等との新商品の開発」等の更なる充実を図った。

(3) これまでの起業体験活動の歩み

本校の現在の起業体験活動の取組は、令和元年度の活動に始まり、令和2年度には、地域との関わりを広げた活動を行った。令和3年度は、これまでの起業体験活動を継承しつつ、地域創生のための活動を展開し、令和4年度には、前年度の反省を生かし、事業内容等の見直しを図りながら活動を進めてきた。

令和元年度	文部科学省「小・中学校等における起業体験推進事業」の実践校として、ニツ井小学校と連携し起業体験プロジェクトを立ち上げ、地元の企業とおにぎりの共同開発・販売をする。
令和2年度	起業体験プロジェクトを継続し、ニツ井のおみやげ品を考案し、いとくとの共同開発で「うまい井」、道の駅ふたついで・松雲堂との共同開発で「恋文マドレーヌ」を商品化し、販売する。
令和3年度	地域創生プロジェクトとして「きみまちカンパニー」を立ち上げ、観光・農業・福祉・企画開発・道の駅・いとくの6事業部での運営を展開する。活動のゴールとして、10月末に第1回「きみまちカンパニーフェスティバル（以下『きみ・パ・フェス』）」を地元の商店街で行い、多くの来場者が訪れた。
令和4年度	前年度の反省を生かし、事業部や活動計画等の見直しを図る。観光・農業・福祉・企画開発・産業の5事業部での運営に変更する。11月3日に第2回「きみ・パ・フェス」を行い、ステージ発表やバザー、地元の木工品や特産品販売等を行い、大盛況であった。

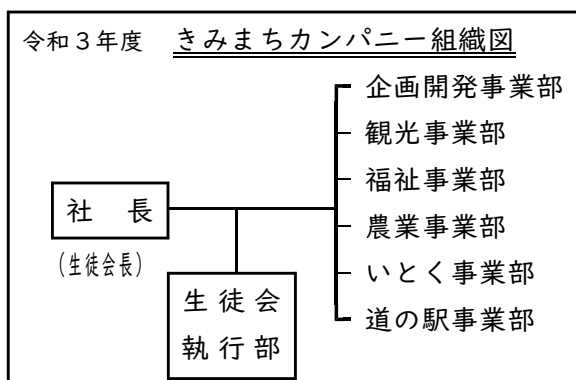
(4) カリキュラム・マネジメントと起業家教育について

本校の起業家教育は、主に総合的な学習の時間や特別活動において取り組んでいる。そして、「企画」「福祉」「観光」「農業」「産業」等の起業体験活動で展開される多様な取組には、各教科等の学習内容や考え方を生かすことが必要となり、そのため各教科等の横断的支援の下での展開が行いやすいものになっている。

現代的な諸課題に対応する資質・能力を「地域や社会における産業の役割を理解し、地域創生等に生かす力」としてその実現を目指すとき、学校組織としてカリキュラムを編成・実施・評価し改善を図っていくカリキュラム・マネジメントこそが、最適な手法だと考えている。そして、この過程においては、学校と地域社会の連携・協働が最も重要なことであり、「社会に開かれた教育課程」を掲げている学習指導要領を基にして積極的に取り組んでいくべきものと考えている。

(5) 起業体験活動の実際

① 令和3年度の取組



令和3年度の「きみまちカンパニー」は、「地域の人と協力して、ニツ井をもっと元気にしたい」という社長の思いを受け、6事業部を立ち上げた。児童生徒の所属事業部は希望制にし、小5～中3の全児童生徒が所属する縦割りで構成した。

活動のスタートにあたり、地域創生プロジェクトの概要、社長の思いを伝える総会

を開催した。また、本地域をよく知る元ニツ井町長を招いて講演をしてもらい、児童生徒が地域の現状を理解し、課題の発見や見通しをもって活動に臨むことができるようにした。

ア 各事業部の内容

10月末に地元の商店街（以下「きみまち商店街」）で実施する「きみ・パ・フェス」（模擬店舗の出店体験）をゴールに活動を進めた。

- <企画開発事業部>
- ・「きみまち商店街」を盛り上げるためのイベント運営
 - ・「きみ・パ・フェス」の宣伝
 - ・地場の農作物を活用したスイーツ、惣菜パンの商品開発

◇スタンプラリー&ガラポン

「きみ・パ・フェス」当日の、商店街や全事業部店舗への集客を考慮したイベントを商店街の方々と考案した。

お客さんがたくさん来るといいな。



スタンプラリーはどうか？！

商店街で以前にガラポンをやっていたよね。

◇ラズベリータルト

秋田市将軍野の「Konditorei JIN」のパティシエ（ニツ井出身）と焼菓子を共同開発した。生徒が考えたスイーツに地元の特産品を使用した。

ラズベリーの色合いがいいね。



200円で販売しよう。

美味しいスイーツを作りたいな。

能代産ラズベリーを入れられないかな。



◇ばにこっぺ

ニツ井の馬肉チャーシューからヒントを得て、馬肉を使った惣菜パンを発売する。馬肉と能代うどん pasta「ノシロチーネ」で作った焼きうどんをコッペパンに挟んだ惣菜パンを地元の商店と共同開発した。

馬肉は使いたいな。



パンに挟んで食べやすくしよう。



高橋商店さんから作り方も教えてもらったよ。

<観光事業部> ・地域の観光PR

◇ニツ井の魅力パンフレット製作

米代川でのカヌー体験やきみまち阪探索で見つけたニツ井の魅力をまとめたパンフレットを作った。

景色がいいね。



カヌー体験、楽しいよ。

手作り感を出したいから手書きにしよう。



◇きみまち阪ガイドツアー（10月中旬）

きみまち阪を訪れ、観光協会のガイドからきみまち阪の名所や歴史等について学んだ。学んだことを生かし、小・中学生観光ガイドとして、お客様を募集し、「きみまちカンパニーきみまち阪ガイドツアー」を実施した。

おすすめのポイントがいっぱいあるよ。



上手く説明できるかな。



たくさんのお客様が集まったね。

<福祉事業部> ・ 地域の高齢者福祉の現状について学び、自分たちができる高齢者との関わり方を考え、実践する。

社会福祉法人ニツ井ふくし会理事長から、高齢者福祉の現状について学んだ。

認知症サポーター養成講座を受講し、高齢者の行動の仕方や周囲ができることについて理解を深めた。

施設利用者とweb会議システム「zoom」で交流し、フェス来場者に配るエコクラフトテープのコースターづくりを一緒に行った。

施設職員の方から車いす介助と脳活トレーニングの仕方を学び、きみ・パ・フェスで実践した。



施設で看取る方のための「安心ノート」の取組について教えてください。



お礼の言葉は、大きい文字で書くといいんじゃない？

車いすに乗る人が怖くないようにするには、どんなことに注意するのかな。



実際にやってみると、難しいな。

<農業事業部> ・ 地場の農作物を活用した商品開発

◇おむすびの共同開発

東京都に本社を構える「おむすび権米衛」とおむすびを共同開発した。地場の農作物を使った具材を考え、おむすび販売につなげた。

ニツ井の特産物を使いたいね。



目立つキャラクターでおむすびのPRをしよう。



おいしいお米に合う具材は何かな。

いろいろな具の種類があるといいよね。

◇様々な農業体験

- ・アイガモ農法見学 無農薬栽培や美味しい米を作るための農法を学んだ。
- ・ウド栽培見学 地場の農作物について知る。
- ・稲刈り体験

カモは雑草を食べてくれるんだね。稲を植える間隔を普通より広くしておいしいお米づくりをしているね。



美味しいお米を作るって、大変だな。

<いとく事業部> ・地場の農作物を活用した商品開発

◇味と名称を改良「うまうま弁当」

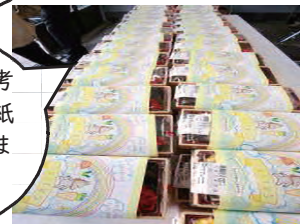
馬肉を使った「うまうま弁当」をいとくと共同開発した。味の改良を図り、掛け紙作りにも取り組んだ。

おいさをPRしたらいいと思います。

彩りがいいね。さらに美味しくなったね。

新しいネーミングも考えよう。

僕たちの考えた掛け紙も付いています。



<道の駅事業部> ・「道の駅ふたつ」を盛り上げるためのイベント運営

◇イベント企画・運営

集客を増やすために、バスケットコートを活用して「フリースロー大会」を企画した。イベントを楽しんでもらうための運営、準備等を児童生徒で考えた。

参加者全員に景品をあげようよ。



参加者をどうやって集めようか。

ルールが必要だね。当日の仕事の役割分担しよう。

◇「恋文マドレーヌ」の改良

ニツ井地域の名産として、令和2年度に開発した「恋文マドレーヌ」を継続して販売する。ラズベリーの増量、販売方法の変更、キャラクターシールを考案し、多くのお客様に販売する方法を考えた。

ラズベリーの数を増やしたら、おいしいかも。



今年はバラ売りにしよう。

イ 模擬出店体験で学びの成果をアピール

令和3年10月30日 第1回「きみ・パ・フェス」

商店街を歩行者天国にして、空き店舗等を利用して事業部ごとに学びをアピールした。



オープニングセレモニー



ガラポン準備中



ポスター

<企画事業部>



早朝から「ばにこっぺ作り」



「ばにこっぺ」販売



スタンプラリー

<観光事業部>



紙芝居「八郎太郎伝説」



きみまち阪ガイド実演中



ちびっこ縁日

<福祉事業部>



福祉クイズ



車いす体験



フリースロー大会運営

<農業事業部>



みょうが侍 見参!

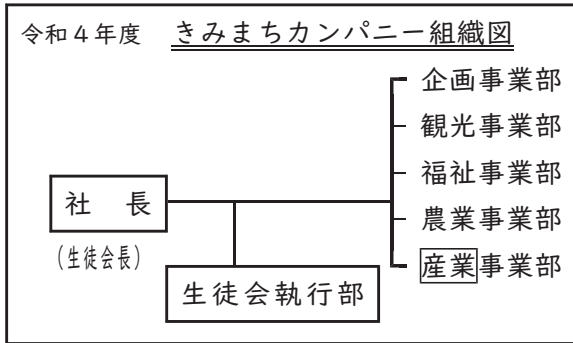


おすすび販売



「うまうま弁当」販売

② 令和4年度の取組



令和4年度は、「地域と人を元気にし、もっと地域のものをアピールしたい」という社長の思いを受け、5事業部（「いとく事業部」と「道の駅事業部」を合併して「産業事業部」とした）で活動をスタートした。

ア 各事業部の内容


<企画事業部> ・商店街を盛り上げるためのイベント運営

◇スタンプラリー&ガラポン

さらに多くの集客を願い、スタンプラリーとガラポンを企画した。前年度の反省から、できるだけ多くのガラポンを引く方法を考えた。商店街の方と何回も打合せをし準備を進め、ガラポンの景品は、商店街のお店から準備をしてもらった。

誰がもらってもいいものを景品にしよう。

今年はガラポンの数を増やそう。




商店会からはどんな景品を出していただけますか？

◇ステージ発表の運営、進行

地域の夏祭りです使った仮設ステージを活用して、ステージ発表を企画した。地域の方に喜んでもらえるように、吹奏楽部や小学校1～4年生、ニツ井出身の歌手にも出演を依頼した。

地域の夏祭りです使った仮設ステージを活用できそう。



ニツ井出身の歌手に来てもらいたいな。


出演者や司会でイベントを盛り上げよう。

<観光事業部> ・観光のPR

◇ニツ井の観光資源の発見→観光ルート作り

観光資源発見、いいところの再発見をねらいに、各自が調査した資源を基に観光ルート作りをした。小・中学生の視点で、時期や相手を意識したルートになるようにグループで話し合い、まとめた。

どんな人に、ニツ井に来てもらおうか。



こんな順番で回ると効率的だね。ここは、もう少し余裕をもたせて。

◇観光に関する関係者からの講話

ニツ井観光協会や地域おこし協力隊の方から、観光PRのためのポイントについてお話しいただいたり、自分たちの観光プランについて助言をしていただいたりした。

ニツ井のいいところ、
いっぱいあるね。

ニツ井のおすすめ写真を
プレゼンしよう。



やっぱり相手をしぼった
コースがいいんだね。

コースを入れ替えた方が、
巡る人には都合がいいね。

<福祉事業部>・地域の高齢者福祉の現状について学び、自分たちができる高齢者との関わり方を考え、実践する。

◇高齢者福祉について学ぶ

認知症サポーター講習を受け、認知症の症状や対応の仕方等について学習した。また、高齢者施設を訪れ、高齢者福祉の実態や施設の工夫等について学んだ。

認知症のお年寄りにどんな声掛けをしたらいいのかな？



どんな工夫をしているのかな？



◇一緒に作ろう 新聞紙エコバック

コロナ感染拡大を考慮し、高齢者施設の入居者の方々と一緒に、ZOOMで新聞紙エコバックを作った。この新聞紙エコバックは、「きみ・パ・フェス」のバザーでの購入品を入れる買い物バッグとして使用された。



声を大きく、ゆっくりしゃべると伝わるかな。

ここにのりをつけます。



◇チャリティーバザー・脳活トレーニングの開催に向けて

高齢者の方も含め、全ての人々に楽しんでもらう企画として、チャリティーバザーを考案した。買いやすいように展示の工夫をし、売上はニツ井ふくし会に寄付をした。また、昨年度に引き続き、脳活トレーニングを行った。

どのように配置したら見やすいかな？



高齢者はもちろんだけど、いろいろな年齢の人を楽しんでもらうためには？



<農業事業部> ・地場の農作物を活用した商品開発

◇おむすびの共同開発

今年度も「おむすび権米衛」と地場の農作物を使った具材を考え、おむすびを共同開発した。「ねぎレモン」、「馬におむすび」（馬肉の煮付け）、「塩おむすび」の3種類を考案した。待ち時間を少なく、多くの数量を販売するためにアドバイスをもらい、1500個のおむすび販売につなげた。

もう少し味が濃い方が売れるかも。



売れるためには、何が必要かな？

もっとおいしくするにはどうしたらいいかな。



お客さんの目にとまるポスターにしよう。

◇様々な農業体験

- ・ねぎ栽培見学と出荷準備体験 地場の農作物や農業の現状について知る。
- ・農機具試乗体験

収穫後、出荷までの工程がたくさんあるんだな。



出荷作業は見た目にも気をつかうだね。

農業を楽にできて収入を増やすにはどんな工夫ができるかな。

後継者不足を解消したいな。

スマート農業で完全無人化できそうかも。



AIが食べ頃の野菜を選んでくれるようになればいい。

<産業事業部> ・地域の産業を生かした商品開発

◇木工班…県北パネルさんと協働

地元の木材加工業の企業の協力で、木工ネームキーホルダーを考案した。秋田杉の廃材を再利用し、英字や音符、ボール等の形を切り抜いたものを並べて思い思いのネームキーホルダーを作ることができる。お客様の立場になって切り抜く形を考え、販売につなげていた。

どんな形にしようかな。



パーツの種類がいっぱいだから、お客様が喜んでくれるといいな。



◇ラズベリー班…「恋文マドレーヌ」の販売

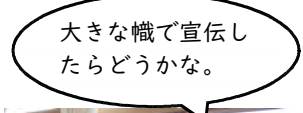
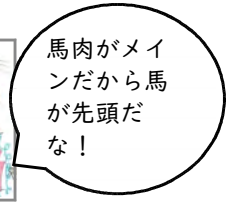
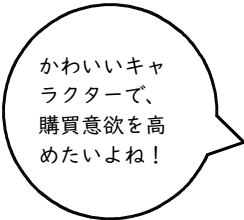


「恋文マドレーヌ」の更なる改良に着手した。ニツ井産ラズベリーの個数を検討し、より美味しく、多くのお客様に販売する方法を考えた。マドレーヌに貼る新しいシールも生徒が考え、新しいキャラクターシールが完成した。

◇じゃっぷう班… オリジナルキャラクターの考案

「うまうま弁当」掛け紙の改良と販売

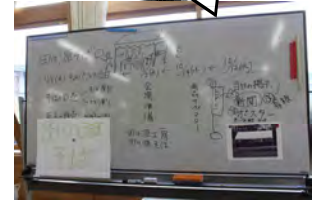
ニツ井地区で古くから親しまれている氷菓子「じゃっぷう」の歴史を学び、より広く知ってもらうために、オリジナルキャラクターを考案した。それを缶バッジにして購入者へのプレゼントとし、販売促進につなげた。いとくと共同開発した「うまうま弁当」は、掛け紙を一新して販売した。



◇田の源そば班…そば畑と加工所の見学と販売

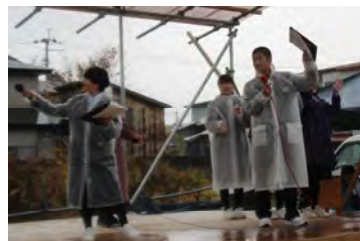
種梅地区で栽培されている「田の源そば」をもっと知ってもらうために、栽培や加工の仕方をポスターやチラシで宣伝することになった。

接客の仕方を学び、「きみ・パ・フェス」につなげた。



イ 児童生徒の学びの成果をアピール 令和4年11月3日 第2回「きみ・パ・フェス」
きみまち商店街を歩行者天国にして、商店街の空き店舗等を利用したり、道路上にテントを設営したりして行った。これまでの学習の学びの成果を事業部ごとにアピールした。

<オープニング>



藤田ゆうみんさんと「約束」合唱 社長の合図で活動がスタート

<企画事業部>



ガラポン



商店街でショータイム



塚本タカセさん ライブ

< 農業事業部 >



おむすび販売

< 商工会青年部 >



販売整理券配付中



ちびっこ縁日

< 観光事業部 >



観光ルートの紹介

< 福祉事業部 >



バザー大盛況



脳活トレーニング

< 産業事業部 >



「うまうま弁当」販売



田の源そば 販売中



木エキーホルダー販売

< 一緒に販売 >



商店街のお店が出店し、一緒に販売活動を行った。

< エンディング >



商店会会長の万歳で閉会

ニツ井小学校・中学校合同地域創生プロジェクト

もみ・パフェス

日時 令和4年 11月3日 10:00~14:00

場所 きみまち商店街 (ニツ井町駅前通り)

観光事業部
①商店街 まち巡りガイド
②ニツ井の魅力紹介ポスターの掲示
③商店街の魅力PR
マップ・しおりの配布
スライドショーでのPR

企画事業部
各事業部を回ると参加できるカラポン抽選会を実施！豪華景品が当たります！たくさんの参加をお待ちしています！

福祉事業部
バザー
売り上げは、ニツ井ふくし会へ寄付します。お買い上げの商品は、よねしる利用者と作った新編はまパワーズに入れてお渡しします。持ち出し物があるかも？
脳活トレーニング
難段と違う種目の面白い、文字の読み方などをする事で、認知や記憶が強化になるのが楽しい「脳トレ」。一緒にやってみませんか？

産業事業部
ニツ井に関わる商品を販売します。
うまうま弁当
恋文マドレーヌ ※田の源そば
木製キーホルダーづくり
他関連商品多数
道の駅にてじゃぶふうを買ったオリジナルキャラクターハッシュプレゼント
(小銭・硬い物袋持参にご協力ください)

農産事業部
おむすび雑米街とのコラボおむすびを販売します。3つの味が楽しめる!!
具材はニツ井小中の児童生徒が考えました。ご賞味あれ!

ステージ発表
特設ステージで小中学生や地域団体による発表を行います。お楽しみに!

縁日コーナー
小さなお子さんも楽しめます。商工会青年部の方々が運営します。

登録場
ニツ井公民館
ゆつちゃん、ふつちゃん

新型コロナウイルス感染症対策に取り組みます。
ご来場の際は、マスクの着用・手指の消毒にご協力ください。

主催：きみまちカンパ(ニツ井小・ニツ井中)~
共催：ニツ井きみまち商店会、ニツ井町商工会、ニツ井町観光協会、道の駅ふたつい
お問い合わせ先：TEL0185-73-2711 (ニツ井中学校)

3 その他の取組

(1) 教職員のカリキュラム・マネジメントに取り組む意識の啓発

職員会議や研修会、研究部報等で、研究の方向性を確認し、教員の共通認識を図った。また、研究の方向性を可視化し、職員室内に掲示し、他校の実践等の情報提供や書籍の紹介を行った。職員室内の掲示板は、職員が目につきやすい場所にし、情報共有のための連絡用としても活用した。



<職員室内の掲示板>

令和4年4月21日(木)

きみまちの風 第6号

文責：岩澤

地域創生事業「きみまちカンパニー」を軸とした
カリキュラム・マネジメント研究<2年目>

本校は、文部科学省の「地域創生事業「きみまちカンパニー」」を軸としたカリキュラム・マネジメントの在り方に関する調査研究の調査実施校です。現代の諸課題（地域創生）に対応するための資質・能力を育むための「きみまちカンパニー」を軸とした教育課程を教員等協働的に構築する取組について研究しています。

1 カリキュラム・マネジメント とは？

学校の教育計画をマネジメントしていくことで、教育の質を向上させること。

その際、学級担任、学年主任、学習指導部、部活動部長、教務主任等、それぞれの立場で考えず、カリキュラム・マネジメントに関わっている。その方針一つを軸として、同じ方向に向かって、学校全体で取り組むことが大切である。
～現代教育研究所発行「ふいこ」から～

2 カリキュラム・マネジメントの3つの側面

この3つの側面について、どんな取組もしたが記録を残します。今年度は2年目なので、さらに本校の取組を確立していきたいと意図します。

3つの側面	進め方にお困りしたいこと
①教科横断的・組織的な配列 * 生徒カリ・マネー一覧表 * 得意・苦手調査	・融合で行っている地域創生事業「きみまちカンパニー」の活動に繋がる（関連がある）教科における単元、題材、学習活動、連絡・学習で学習内容 などについて記録を残し、取組の共有を図る。
② PDCAサイクルの確立	・生徒同士で、活動をしつかり振り返ることができるようになるようにサポートする。うまく進んでいないこと、なぜそうなったのかを尋ねる。 この振り返りの活動を定着させて、次の活動プランを立上げていきたい。
③地域との連携	・コミュニティスクールや地域学校協働活動推進員の積極的な活用をする。

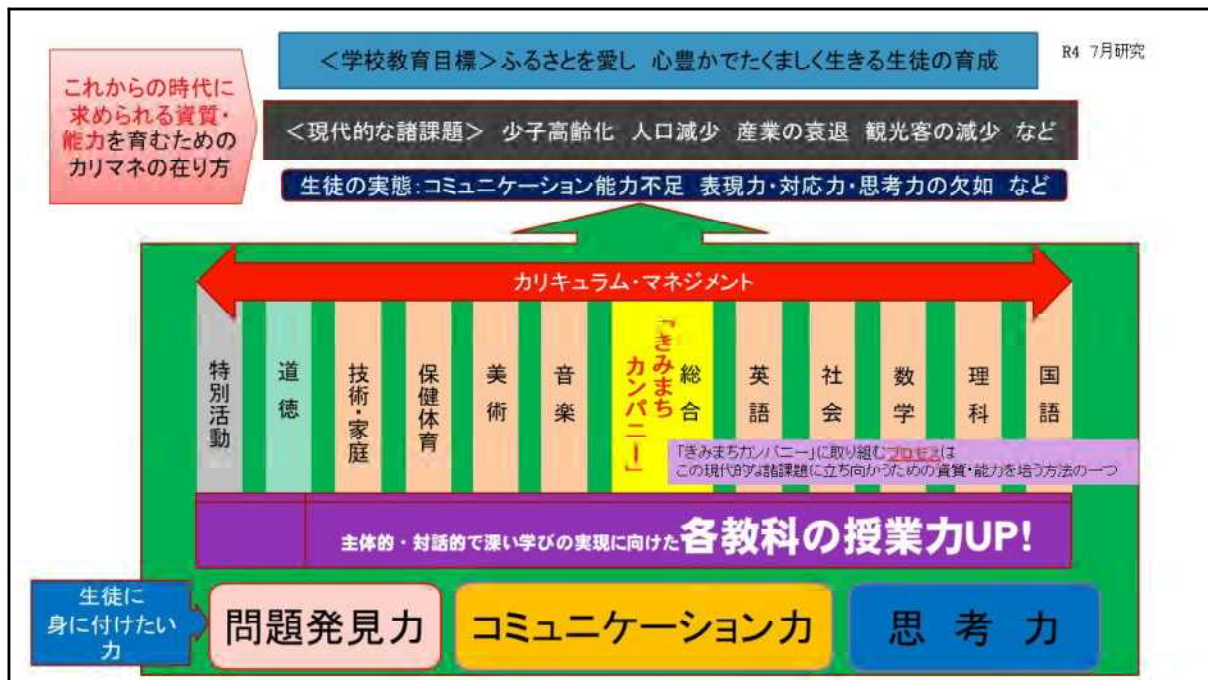
3 地域創生事業「きみまちカンパニー」を目指す 具体的な生徒の姿

昨年度の反省から、地域創生事業「きみまちカンパニー」で目指す「具体的な生徒の姿」が見えないという声がありました。学校教育目標に基づき考えましたので、ご意見をください。

学校教育目標・・・ふるさとを愛し 心豊かでたくましく生きる生徒の育成

＜提案＞ 執行部（5人）と確認済み・・・生徒の姿が見えますか？

- ①ニツ井のよさを導いて見つけようとする生徒
- ②年の暮れや卒業、文化を大切にしようとする生徒
- ③進んで挨拶や言葉を入れ、地域の人と関わろうとする生徒
- ④ニツ井のよさを伝えたい、外へ発信したいという生徒
- ⑤誇れるニツ井にするために、方法を考え、行動しようとする生徒
- ⑥ニツ井の発展のために、進んで地域の活動に参加し意欲的に行動する生徒



<カリキュラム・マネジメントに関する資料掲示>

カリキュラム・マネジメントに関する本校作成資料→



(2) 教科横断的な視点の取組について

単元配当表を作成し、他教科等との関連を図った。本校は、総合的な学習の時間を核としてカリキュラム・マネジメントを進めているため、総合的な学習の時間の欄を中央に配置した。また、地域との連携・協働も鍵となるため、【地域コミュニティ】の欄を設けている。作成の段階では見えなかった他教科等との関連について、実践の拡大や単元の変更等を行い、実践の足跡を残し、次年度につなげられるようにした。

ニツ井中学校 令和4年度 第3学年 単元配当表

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
国語	深まる学びへ	視野を広げて	情報社会を生きる	言葉とともに	状況の中で	自らの考えを	いにしえの心を受け継ぐ	価値を生み出す				未来へ向かって
社会	二度の世界大戦と日本	現代の日本と世界	現代社会と私たち	個人の尊厳と日本国憲法	現代の民主政治と社会	私たちの暮らしと経済	地域社会と私たち					
数学	多項式	平方根	2次方程式	2次比例する関数	様々な図形	角の定理	円	標本調査				
理科	化学変化とイオン	生命の連続性	運動とエネルギー	地球と宇宙	地球と私たちの未来のために							
英語	Unit 1 旅の準備と出発	Unit 2 旅の楽しみ	Unit 3 旅の思い出	Unit 4 旅の計画	Unit 5 旅の思い出	Unit 6 旅の思い出	Unit 7 旅の思い出	Unit 8 旅の思い出	Unit 9 旅の思い出	Unit 10 旅の思い出	Unit 11 旅の思い出	Unit 12 旅の思い出
総合	地域創生事業「きみまちカンパニー」											
音楽	リズムあそび	正	歌の楽しみ	合唱の楽しみ	合唱コンクールに向けて	ソングライター	Let It Be	My Music	リコーダーアンサンブル	ブルータバ	卒業に向けて	卒業制作
美術	イメージ	<自画像>自分を見つめて				<彫像> 輝いている自分		鑑賞	卒業制作			
保健体育	体づくり運動	健康観察	集団行動	バレーボール	ダンス	ソフトボール	器械運動	柔道	<保健> 健康と環境健康な生活と健康の予防		バスケボール	バドミントン
技術家庭	情報に関する技術				衣生活・住生活と自立				身近な消費生活と環境			
道徳	言葉の大切さ	誠実の心	勇気と責任	寛大と敬意	寛大と敬意	寛大と敬意	寛大と敬意	寛大と敬意	寛大と敬意	寛大と敬意	寛大と敬意	寛大と敬意
学級活動	定例学級活動	学級活動	学級活動	学級活動	学級活動	学級活動	学級活動	学級活動	学級活動	学級活動	学級活動	学級活動
地域	小学校との打合せ	小学校との打合せ	小学校との打合せ	小学校との打合せ	小学校との打合せ	小学校との打合せ	小学校との打合せ	小学校との打合せ	小学校との打合せ	小学校との打合せ	小学校との打合せ	小学校との打合せ



たくましく生きていくために

問題発見力
コミュニケーション力
思考力

ニツ井中生が身に付けたい力

「ニツ井中生が身に付けたい力」を左図のように年度当初に設定し、全ての教育課程でこの三つの力を身に付けられるようにしていくこととした。したがって、教科横断的な視点での取組については、「きみまちカンパニー」の学習内容との関連だけでなく、生徒たちに「身に付けたい力＝資質・能力」との関連についても実践を積み重ねた。

教科横断的な視点での各教科の取組

ニッ井中学校

【地域創生事業きみまちカンパニー】と【社会科】 活動内容との関連

現代社会と私たち（3年生）

ねらい 能代市の人口減少対策について、具体的な事例を基に多面的・多角的に考察し、考えた取組について自分の言葉で表現することができる。 【社会的な思考・判断・表現】

学習内容 ①能代市第2期総合戦略の中から注目する施策を選び、それに結びつく具体的な取組を考える。
②各グループの取組についての発表後、自分が考え取組についてまとめる。

生徒の様子

- ・「きみまちカンパニー」で取り組んできた内容の背景に、能代市の施策があったことに気付いていた。
- ・他のグループの発表を聞いて、地域を活性化するための多面的・多角的な取組について知ることができた。

成果と課題

- ・地域素材を扱うことで、社会的な事象をより身近に捉えさせることを再確認した。
- ・双方により高い効果を上げるには、このような授業をどの時期に実践するか、さらに検討が必要である。

教科横断的な視点での各教科の取組

ニッ井中学校

【総合的な学習の時間】と【国語科】 資質・能力の育成との関連

情報を的確に聞き取る（1年）「話す・聞く」

ねらい 場面に応じて話を的確に聞き取り、必要な情報をメモすることができる。

学習内容 ①先生からの連絡の場面 ②放送の連絡の場面 ③食べ物注文をとる場面
①～③の場面設定し、メモを取る練習を行う。

生徒の様子

- ・③は実生活により近かったことと、店員役とお客さん役に分けて行ったことが意欲的に取り組むことに繋がった。

成果と課題

- ・生徒たちが、意欲的に学習に取り組む姿が見られた。
- ・この学習は、様々な教科等で関連付けを意図的に図っていくと、より効果的だと思う。

教科横断的な視点での各教科の取組 授業実践例→



（3）地域や家庭との連携・協働について（人的、物的資源等の活用）

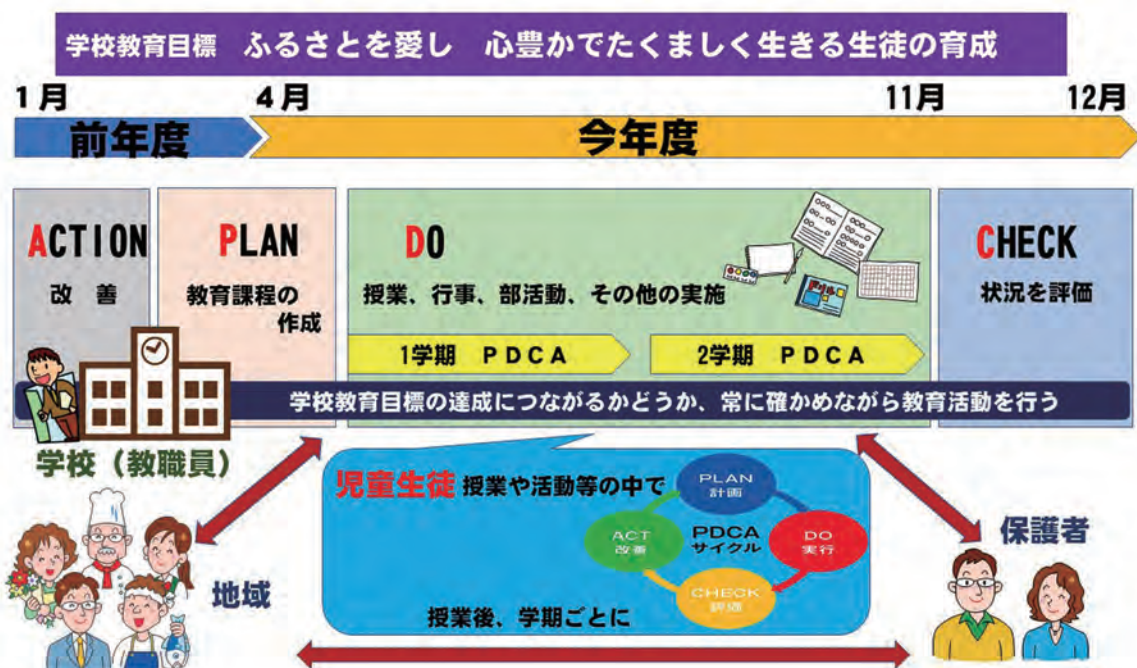
本地域は、人的、物的資源が豊富で、児童生徒たちの学習活動に対して、非常に協力的である。起業体験活動や地域創生事業は、専門性の高い内容を扱うため、専門知識を有した地域の方と連携し共に活動することは、児童生徒、及び、教員にとって大変有効であり、地域との連携・協働の必要性や重要性を感じた。

令和3・4年度の「きみまちカンパニー」に協力してくださった企業、団体等は、次の通りである。

「きみ・パ・フェス」は、きみまち商店街を歩行者天国にし、空き店舗や店舗を借り、各事業部が販売活動や実体験コーナー等の学習の成果を発表する。かつてはにぎわっていた地域の商店街で、これからの時代を担う児童生徒たちが「きみ・パ・フェス」を行うことこそ、本事業のねらいである。「きみまちカンパニー」の活動に必要な地域の人的、物的資源、地域の情報を最大限活用して活動を進めている。

また、本事業は、準備段階から多くの資金を要する。能代市や学校の予算だけでなく、地域との合同事業費や企業の協賛をいただいて運営している。ニツ井商店会事務局の方が窓口となり、資金や物品などの情報を提供していただき、学校と地域をつなぎ、共に活動していただいている。

4 教育課程の評価・検証・改善



本校では、教育課程のマネジメントをする教員はもちろん、活動を進める生徒のPDCAサイクルの確立を目指した。

(1) 児童生徒による活動のPDCA

ステップアップカードで個人の振り返りをし、さらに、事業部で振り返りを共有して課題解決した。また、探究の過程ごと（次項参照）でも評価・検証・改善につなげるようにした。

右の図は、今年度使用したステップアップカードである。目指す姿の、自己評価、自分の学びや課題等を明記できるようにした。

ステップアップカード→



今年度実施 地域別事業部 「きみまちカンパニー」 ステップアップカード

「きみまちカンパニー」でこんな姿をめざそう！

- 二学期を目標とするめざした姿
- 二学期の達成や課題、変化を整理しめざした姿
- 二学期の学びや課題を共有し、地域の人と共有するめざした姿
- 達成や課題を共有し、地域の人と共有するめざした姿
- 二学期の振り返りを通して、めざした姿の達成や課題を整理しめざした姿

学年の目標 5-6 地域の発展に貢献し、ふるさとを愛し、心豊かでたくましく生きる生徒の育成

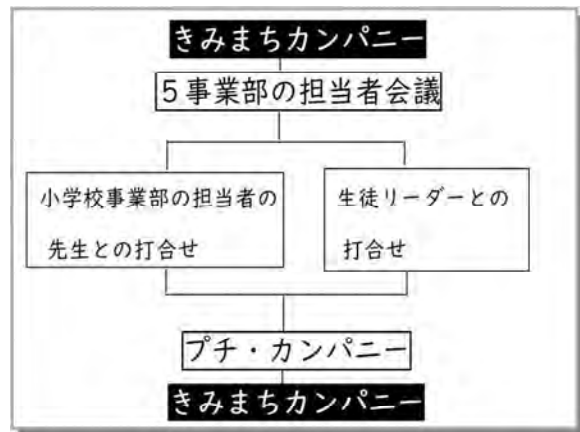
項目	学習内容	自分のめざす姿 (口を付けよう)	めざした姿 (達成や課題)	めざした姿 (達成や課題)
1	1学期の振り返り	A B C	1学期の振り返りを通して、めざした姿の達成や課題を整理しめざした姿	1学期の振り返りを通して、めざした姿の達成や課題を整理しめざした姿
2	2学期の振り返り	A B C	2学期の振り返りを通して、めざした姿の達成や課題を整理しめざした姿	2学期の振り返りを通して、めざした姿の達成や課題を整理しめざした姿
3	探究の振り返り	A B C	探究の振り返りを通して、めざした姿の達成や課題を整理しめざした姿	探究の振り返りを通して、めざした姿の達成や課題を整理しめざした姿
4	学習の振り返り	A B C	学習の振り返りを通して、めざした姿の達成や課題を整理しめざした姿	学習の振り返りを通して、めざした姿の達成や課題を整理しめざした姿

探究の 過程Ⅰ	1 学期	P：目標設定→D：活動→C：個人や事業部で振り返り→A：改善→ C：個人や事業部で1学期の活動の振り返り→A：改善（2学期で）
探究の 過程Ⅱ	2 学期 前半	P：目標設定→D：活動→C：個人や事業部での振り返り→A：改善→ C：個人や事業部での振り返り→A：改善→きみ・パ・フェス→ C：個人や事業部での振り返り→A：改善（次年度）
探究の 過程Ⅲ	2 学期 後半	P：目標設定→D：活動→C：個人や事業部での振り返り→A：改善→ 総合の学びの発表会→C：1年間の振り返り→A：改善（次年度）

(2) 教師による活動のPDCA

本校の教員で「きみまちカンパニー」後に各事業部の担当者会議を行い、進捗状況や次回の活動予定等を情報共有した。活動を進める際の悩みや問題点についても話し合い、次の活動につなげるようにした。

小学校や生徒リーダーとの事前打合せ、生徒への事前連絡のための「プチカンパニー」を実施し、次回の活動に確実につなげていった。



「プチ・カンパニー」(通称：プチカン)の実施 秘話

「プチ・カンパニー」とは、事業部の生徒と教員との事前のミニ打合せのことである。「きみまちカンパニー」前日の放課後に設定された時間で、次回の活動内容や持ち物等を連絡し、生徒が見通しをもって活動に取り組めるようにした。

プチカン設定後は、前向きに活動する生徒の姿が見られるようになった。プチカンの内容は事業部で異なり、使い方は担当のマネジメント次第…役割決めや下準備等、柔軟に活用していた。

次回の活動内容が分からないようだ。

物が多すぎる。試食用の箸の忘れ

しっかり活動できている。

事業部の小学校教員との連絡はその都度行っているが、小中学校の職員打合せ（合同会議）も設定した。これまでの活動を振り返りつつ今後の活動について話し合い、教員が見通しをもって準備・計画できるようにした。

「きみまちカンパニー」の取組については、次を参考に評価・検証する。地域創生プロジェクトは、学校と地域との連



携・協働で実施している事業であるため、アンケートを取り、実態を把握した上で両校で検証していった。地域と家庭からのアンケート結果を児童生徒に配付・掲示し、これまでの学習活動の成果や課題を実感できるようにした。3学期に小・中職員合同会議を行い、本事業の反省と来年度の方向性について話し合っている。さらに、その話し合いを受け、管理職、教務主任、研究主任、総合担当等で改善案を決め、新年度の計画に反映した。

アンケート結果を
可視化・掲示



【評価・検証材料】

- 生徒)・総合的な学習の時間アンケート
(5月、12月実施)
 - ・「きみ・パ・フェス」振り返り
 - ・「きみまちカンパニー」まとめ
- 教員)・「きみ・パ・フェス」「きみまちカンパニー」の反省
 - ・資質・能力系統表
- 地域)・「きみ・パ・フェス」来場者アンケート
 - ・商店会アンケート
- 家庭)・「きみまちカンパニー」保護者アンケート

地域創生事業「きみまちカンパニー」を通して、小5～中3までの5年間で身に付けたい資質・能力をまとめた系統表を作成している。この系統表を活用して、評価・検証・改善につなげている。

令和4年度 ニツ井小・中学校 地域創生事業「きみまちカンパニー」(27時間) 資質・能力系統表

学年	5年	6年	1	2	3
探究課題	観光 「ニツ井の観光資源とそのよさを伝える人の」 福祉 「身の回りの高齢者やその暮らしを支援する仕組みや人の」 産業 「ニツ井の産業や生産者、そして支える人の」		企画 「商店街の再生に向けて努力する人の活動社会」 産業 「ニツ井の産業と地域の力を注ぐ人の」		
知識及び技能	・大まかにニツ井の区画が分かる。 ・情報を比較・分類する等、商業の発展に応じた技能を身に付けている。	・担当の事業部の役割が分かる。 ・情報を比較・分類・整理付けて考える等、探求の過程に応じた技能を身に付けている。	・地域の産業、観光、福祉、産業の役割が分かる。 ・情報を多面的に見る、考えが具体化するなど、探求の過程に応じた技能を身に付けている。	・地域の産業、観光、福祉、産業の現状が分かる。 ・地域活性化の課題に関わる人の思いや働きが分かる。	・地域の産業、観光、福祉、産業の現状が分かる。 ・地域活性化の課題に関わる人の思いや働きが分かる。
課題の設定	・ニツ井に広く目を向けたり、課題を見いだしている。 ・解決の方法や手順を考え、見通しをもって計画を立てている。	・ニツ井に広く目を向けたり、課題を見いだしている。 ・解決の方法や手順を考え、見通しをもって計画を立てている。	・ニツ井に広く目を向けたり、課題の範囲や目的を明確にしたしたりして課題を見いだしている。 ・解決の方法や手順を考え、見通しをもって計画を立てている。	・ニツ井や自分を取り巻く社会に広く目を向けたり、活動の意図や目的を明確にしたしたりして課題を見いだしている。 ・解決の方法や手順を考え、見通しをもって計画を立てている。	・ニツ井や自分を取り巻く社会に広く目を向けたり、活動の意図や目的を明確にしたしたりして課題を見いだしている。 ・解決の方法や手順を考え、見通しをもって計画を立てている。
情報の収集	・目的に応じて手段を選択し、情報を収集している。	・目的に応じて手段を選択し、情報を収集している。	・目的に応じて手段を選択し、情報を収集し適切な方法で蓄積している。	・目的に応じて手段を選択し、情報を収集している。	・目的に応じて手段を選択し、情報を収集している。
整理・分析	・商業分野における事業や商品の分かり、分類して多様な情報から特徴を見付けている。 ・事業や考えを比較したり因果関係を整理したりして、多様な情報にある特徴を見付けている。	・商業分野における事業や商品の分かり、分類して多様な情報から特徴を見付けている。 ・事業や考えを比較したり因果関係を整理したりして、多様な情報にある特徴を見付けている。	・商業分野における事業や商品の分かり、分類して多様な情報から特徴を見付けている。 ・事業や考えを比較したり因果関係を整理したりして、視点を定めて多様な情報にある特徴を見付けている。	・商業分野における事業や商品の分かり、分類して多様な情報から特徴を見付けている。 ・事業や考えを比較したり因果関係を整理したりして、視点を定めて多様な情報にある特徴を見付けている。	・商業分野における事業や商品の分かり、分類して多様な情報から特徴を見付けている。 ・事業や考えを比較したり因果関係を整理したりして、視点を定めて多様な情報にある特徴を見付けている。
まとめ・表現	・調べたり考えたりしたことをまとめ、相手や目的に応じて分かりやすく表現している。 ・各教科等で身に付けた技能を活用して表現している。	・調べたり考えたりしたことをまとめ、相手や目的に応じて分かりやすく表現している。 ・各教科等で身に付けた技能を活用して表現している。	・調べたり考えたりしたことをまとめ、相手や目的に応じて分かりやすく表現している。 ・各教科等で身に付けた技能を活用して表現している。	・調べたり考えたりしたことをまとめ、相手や目的に応じて分かりやすく表現している。 ・各教科等で身に付けた技能を活用して表現している。	・調べたり考えたりしたことをまとめ、相手や目的に応じて分かりやすく表現している。 ・各教科等で身に付けた技能を活用して表現している。
学びに向かう力・人間性	・自分の目標をもって、課題の解決に向けた探究的な学習に意欲を持って取り組もうとしている。 ・自他のよさを生かしながら協力して、問題解決に向けた探究的な学習に取り組もうとしている。 ・探究的な学習を通して、自分の生活及び地域との関わりを見直し、自分のよさを理解しようとしている。 ・探究的な学習を通して、異なる意見や価値の考えを受け入れ、尊重しようとしている。 ・探究的な学習を通して、進んで実社会・実生活の課題の解決に取り組むとともに、情報発信の活動に参加しようとしている。 ・探究的な学習を通して、夢や希望などをもちようとしている。	・自分の目標をもって、課題の解決に向けた探究的な学習に意欲を持って取り組もうとしている。 ・自他のよさを生かしながら協力して、問題解決に向けた探究的な学習に取り組もうとしている。 ・探究的な学習を通して、自分の生活及び地域との関わりを見直し、自分のよさを理解しようとしている。 ・探究的な学習を通して、異なる意見や価値の考えを受け入れ、尊重しようとしている。 ・探究的な学習を通して、進んで実社会・実生活の課題の解決に取り組むとともに、情報発信の活動に参加しようとしている。 ・探究的な学習を通して、夢や希望などをもちようとしている。	・自分の目標をもって、課題の解決に向けた探究的な学習に意欲を持って取り組もうとしている。 ・自他のよさを生かしながら協力して、問題解決に向けた探究的な学習に取り組もうとしている。 ・探究的な学習を通して、自分の生活及び地域との関わりを見直し、自分のよさを理解しようとしている。 ・探究的な学習を通して、異なる意見や価値の考えを受け入れ、尊重しようとしている。 ・探究的な学習を通して、進んで実社会・実生活の課題の解決に取り組むとともに、情報発信の活動に参加しようとしている。 ・探究的な学習を通して、夢や希望などをもちようとしている。	・自分の目標をもって、課題の解決に向けた探究的な学習に意欲を持って取り組もうとしている。 ・自他のよさを生かしながら協力して、問題解決に向けた探究的な学習に取り組もうとしている。 ・探究的な学習を通して、自分の生活及び地域との関わりを見直し、自分のよさを理解しようとしている。 ・探究的な学習を通して、異なる意見や価値の考えを受け入れ、尊重しようとしている。 ・探究的な学習を通して、進んで実社会・実生活の課題の解決に取り組むとともに、情報発信の活動に参加しようとしている。 ・探究的な学習を通して、夢や希望などをもちようとしている。	・自分の目標をもって、課題の解決に向けた探究的な学習に意欲を持って取り組もうとしている。 ・自他のよさを生かしながら協力して、問題解決に向けた探究的な学習に取り組もうとしている。 ・探究的な学習を通して、自分の生活及び地域との関わりを見直し、自分のよさを理解しようとしている。 ・探究的な学習を通して、異なる意見や価値の考えを受け入れ、尊重しようとしている。 ・探究的な学習を通して、進んで実社会・実生活の課題の解決に取り組むとともに、情報発信の活動に参加しようとしている。 ・探究的な学習を通して、夢や希望などをもちようとしている。

R 4 資質・能力系統表 →



5 成果と今後の展望

(1) 成果

- ① 単元配当表を作成・活用することで、教科横断的な視点で授業をつくろうとする意識が高まり、授業改善につながった。

このことで、教員も生徒も各教科等における関連を見いだしたり、課題や学習内容に多面的・多角的・総合的にアプローチしたりするようになった。そして、生徒は学びのつながりを意識し、知の総合化が起こり始めたと感じている。

このような授業改善が、生徒の「主体的・対話的で深い学び」の実現につながり、知識や技能にとどまらず、思考力や判断力、表現力を育むことができると考えている。

- ② 教員だけでなく生徒とともに PDCA サイクルを確立し、「きみまちカンパニー」が目指す姿やニツ井中生に身に付けたい力の育成につながっているかを、常に確かめながら教育活動を進めた。

活動ごとの小さい PDCA サイクルと探究の過程やきみまちカンパニー全体の大きな PDCA サイクルを絶え間なく回したことで、「きみまちカンパニー」を学校全体として計画的・組織的に実現できたと感じている。

- ③ 学校教育目標を実現するためには、地域との連携・協働が大変重要であることを実感した。

「きみまちカンパニー」を通して、地域の人的、物的資源の豊かさや学校教育に対する熱意を感じた。「地域の協力がなければ、きみ・パ・フェスは成功できなかった。」「ニツ井にはいいところがいっぱいあることが分かった。前より好きになった。」という生徒の声からも、地域と連携・協働することが、地域に対する生徒の熱い思いや高い志を育てていくということを感じることができた。

(2) 今後の展望

- ① 今年度の実践を踏まえ修正した単元配当表の活用で、更なる教科横断的な視点での授業や様々な活動を計画的に実施し、地域創生事業「きみまちカンパニー」や授業改善に努めたい。

- ② 今年度確立した PDCA サイクルを機能させながら、持続可能な活動を目指して、より検証・改善を図る必要がある。地域との連携を大事にして、協働で地域創生に貢献したい。

- ③ これからも、全職員がそれぞれの持ち味を活かしながら力を合わせ、本校の教育課程を全職員が語れる学校づくりを通して、「社会に開かれた教育課程」の実現を目指していきたい。

第3章 研究の成果と課題



【二ツ井中学校 総合的な学習の時間「きみまちカンパニー」】

第1節 市としての成果と課題

2年間の調査研究から、本市の成果と課題として、以下のことが挙げられる。

成果

1. 学校教育目標の具現化を目指し、学年部や指導部の経営案に重点項目を反映

第四小学校は、目指す児童像から「育てたい資質・能力」を設定し、前年度の反省を踏まえて重点項目を示している。各主任が、学年部や指導部の経営案に重点項目を反映させ、具体を進めている。学校が目指しているものをキーワード化したことにより、全教職員が自分の言葉で学校教育目標を説明できることや、育てたい資質・能力を把握した上で教育活動に臨んでいることにつながっている。また、長年伝統的に行われてきた「あかしや運動」を資質・能力としてアレンジし、重点項目として設定している。このことにより、カリキュラム・マネジメントとは、0からのスタートではなく、今まで実践してきた教育活動について、児童生徒の資質・能力を育てるという見方・考え方を加え、教育目標と教育活動の関連を意識付けをすることの重要性を認識できたことは、大いに参考となる方策である。

2. 授業研究会の「自分事研究会」化

能代第二中学校は、全教員が授業イメージを共有し、共通の用語で伝え合い、共通実践することができた。秋田の探究型授業における授業改善を中核に据えることで、「教科の壁を超えた協働研究《サブジェクトフリー》」を機能させていた。全校体制で基盤を一層固めていきながら、各教科等の特質に応じて見方・考え方を働かせた授業づくりを教科部ごとに推進した。また、全ての教科等において探究のプロセスを機能させた授業を推進していくことで、生徒が学び方を身に付け、授業の中でも主体的に学びを構築できる「学びのセルフマネジメント」の部分が増加した。また、サブジェクトフリーでは、生徒がICTを効果的に活用し、自分の学びを端末に蓄積させ、それを再構成して現代の諸課題の解決に向けて活用するといった「知の総合化」に向かうことができた。ベテラン教員も若手教員も自分事として研究会に参加し、日常の授業改善に生かすことができた。

3. 学校教育目標を実現するための地域と連携・協働の充実

ニツ井中学校は、「ニツ井小・中学校きみまちカンパニー活動 資質・能力系統表」を作成し、各学年の児童生徒が身に付けるべき資質・能力を明確にした。その育成に向けては、全職員・全教科で、教科等横断的な視点に立って授業をつくらうとする意識が高まり、授業改善につながった。また、教員だけでなく生徒とともにPDCAサイクルを確立し、活動ごとの小さいPDCAサイクルと、探究の過程やきみまちカンパニー全体の大きなPDCAサイクルを絶え間なく回したことで、「きみまちカンパニー」を学校全体として計画的・組織的に実現することができた。学校教育目標を実現するためには、地域との連携・協働が大変重要であり、地域と連携・協働することが、地域に対する生徒の熱い思いや高い志の育成につながっていくことを実感できた。

課題

1. 今年度の実践を踏まえ、修正した年間指導計画の活用

年度ごとに年間指導計画を修正し、活用していくことで、教科等横断的な視点での授業づくりが推進されるとともに、全教育活動において、児童生徒の資質・能力の育成を念頭に置いた様々な活動を計画的に実施することができる考える。また、即時、短期、中期、長期のPDCAサイクルを有効に機能させ、機を逃さず教職員で協議しながら、教職員や児童を巻き込んだカリキュラム・マネジメントの更なる推進を目指していきたい。

2. 持続可能な活動を目指して、PDCAサイクルによる更なる検証・改善

あきた型学校評価を基盤として、職員による自己評価や保護者アンケート等を実施し、その結果を踏まえて年度中の成果や課題を共有し、改善を行うなどして、今年度確立したPDCAサイクルを機能させながら、持続可能な活動を目指して、検証・改善を図る必要がある。また、生活科・総合的な学習の時間や他教科等の学習における地域人材の活用等については、更なる児童の学びの充実につながるよう、地域の協力の下、一層の連携をしながら取り組んでいく必要がある。

3. 自校の学校教育目標や教育課程について、自らの言葉で説明することができる教職員の育成

全教職員が、学校経営に参画する手立てを共通の言語で伝え合い、教育活動を実践していくことが重要である考える。また、授業や学校行事等は、どのような資質・能力を育成することにつながるのかについて、日々意識しながら実践する教職員を育成することも、教職員が学校経営に参画する意識改革になると考える。

第2節 カリキュラム・マネジメントQ&A

本市の全小中学校において、カリキュラム・マネジメントについての質問を受け付け、実践校が回答した。これにより、実践校以外の学校が、カリキュラム・マネジメントの理解を深め、今後の取組に対する意識の高まりが感じられた。

	対 象	質 問	回 答
1	第四小	「本校で育成したい資質・能力」に対して、「要となる教科等」を示すことはとてもよい取組だと思った。問題は、要としていない教科等へ、どう波及させていくかということである。例えば、算数科の取組から「比較・検討」に重点的に取り組む教科・単元を一覧表に整理したとあるが、それはどのようなもので、どのように作成したのか、その具体を教えてください。	「カリキュラム・マネジメント一覧表」を作成して整理した。算数と他の教科等とを月ごとに対比できるように配列し、各学年で意図的に「比較・検討」に取り組む単元名とその状況を記載し、職員間で実践を共有しながら積み重ねるものとした。
2	第四小	研究内容に、学校運営協議会等と連携した人的・物的資源の活用とあるが、人選を学校運営協議会委員が行ったということなのか。また、カリキュラム・マネジメント研究に取り組む前と後との、活用の量的・質的な変化はあったか。	人選は、地域学校協働活動として地域学校協働活動推進員との調整を行った。研究への取組による量的な変化はほとんど見られなかったが、質的な向上が見られた。学校支援的な活動から、より協働的な活動へと変化した。
3	第四小	「研究実施計画書」に「よりよい生き方を考え、実行する力」等が記載されているがこれは「育てたい資質・能力」ということか。その場合、文言の出典等はあるのか。	「育てたい資質・能力」である。文言については、各指導部や全体研修会を通じて職員で協議して設定した。
4	第四小	「あかしやの子」は児童に浸透していると思うが学校教育目標の重点項目を、児童へどのように意識付けたか。また、「比較・検討」に係る指導で、どのような一覧表を作成したのか。	重点項目はキーワードとして児童や保護者に示し、実践する際の手立てとした。機会がある毎に、キーワードでの振り返りを行い、次の実践のための改善を行った。 ※「比較・検討」については、回答1参照

5	能代第二中	生徒の「学びのセルフマネジメント」を高めるためには、一時間一時間の授業での「振り返り」の良質な積み重ねが大切であると考え、「振り返り」を共通実践しているとあるので、どんな点を共通実践して「振り返り」を充実させているのかを教えてください。	<ul style="list-style-type: none"> ・各教科の振り返りの視点を一覧にした。 ・一覧を基に共通点を見いだした。 ・「変容」「実生活との結び付き」「よさ」を能代第二中の振り返りの視点として定め、共通実践した。
6	能代第二中	「研究実施計画書」に「共通の言語で伝え合い」「共通の用語で伝え合い」とあるが、その違いは。	「用語」とは、「見通し」「学び合い」等、秋田の探究のプロセスを機能させた授業づくりをする上で必要な共通の言葉であり、「言語」とは、全職員がカリキュラム・マネジメントのイメージを共有して、それを自分の言葉で伝え合い、共通実践することである。
7	能代第二中	「学びのセルフマネジメント」を、生徒へどのように意識付けたのか。また、教師と生徒はどのようにイメージを共有したのか。	家庭学習の取組について、学級内において互いの家庭学習のよいところや改善点を付箋に書いて貼る活動を行った。その後、他のクラスの家庭学習のよいところや改善点を付箋に書いたことで、自分の取組を振り返るよいきっかけとなった。その様子や内容を教師がコメントを書いて生徒を称揚した。
8	能代第二中	「学びのセルフマネジメント」の具体的な姿を知りたい。また、ワークシートのようなものはあるのか知りたい。	自分の学びを振り返り、それを基に家庭学習で何をすべきか考え、取り組むことができるイメージである。ワークシートは用意していない。

9	ニツ井中	「ニツ井小・中きみまちカンパニー活動 資質・能力系統表」を作成することで、各学年で目指すゴールが、視覚化されるのがよいと思った。この資質・能力系統表が、各学年の単元配列表にどう反映されて、各学年のつながりがどう視覚化されているのかを教えてください。	きみまちカンパニーで目指す「資質・能力系統表」に合わせて、単元（題材）の入替をしている。きみまちカンパニーで目指す資質・能力に関連のある単元（題材）は、双方向の矢印で結んでいる。
10	ニツ井中	働き方改革推進を求められている中で、「きみまちカンパニー」の見直しを図り、商店街との連携等、新たな取組を創造したと思うが、教職員の負担感はなかったか。	負担感はあるが、生徒の心の変容を感じたり地域の方から感謝の声を聞いたりすると、地域創生事業へのやりがいを感じる。また、学校（生徒・教員）と地域、家庭が協働で進める「きみまちカンパニー」は、本地域の小・中学校だからこそできる取組であると考えている。
11	ニツ井中	きみまちカンパニーで試作品や販売にいたるまでに大変だったと思う。資金面で工夫したことを教えてください。（学校の教育資源の活用）	資金面で、地域や企業が協力してくださっている。きみまち商店街、ニツ井商工会、同窓会等で発足された合同事業費（地域の方が能代市に申請する）や連携している企業からの協賛金を使わせていただいている。

12	全体	<p>職員への周知や目標達成に向けての研究推進委員会は、年間どのくらいの回数行っているのか。研究推進委員会の実施回数とその際の協議内容を教えていただきたい。</p>	<p>・研究推進委員会は、校内の運営委員会が兼ねているため、月1回程度である。周知や目標達成のための委員会は、学期に1回程度である。「実行リスト」や「取組一覧表」の遂行状況の確認・修正が主な内容である。【第四小】</p> <p>・研究推進委員会は、月に2回程度行っている。協議内容は、校長や教頭と話し合ったことを伝達していることが多い。内容は共通実践事項や研究部報で特に伝えたいことの確認が多かった。【能代第二中】</p> <p>・研究推進委員会は、月1回程度＋随時実施した。協議内容は、「『単元配列表』『資質・能力系統表』作成、活用に向けて」「横断的な視点での授業の取組について」「地域創生事業『きみまちカンパニー』について」などである。【二ツ井中】</p>
13	全体	<p>カリキュラム・マネジメントでは、全教職員の参画意識が重要と思うが、その意識を高めるために工夫したことはあるか。</p>	<p>・学校評価と連動し、全教職員で「育てたい資質・能力」や、それらに関わる事項をワークショップ形式で設定したり見直したりして参画意識を高めた。節目の行事や、全校が集まる機会に、カリキュラム・マネジメントのキーワードを取り上げて確認し、職員も児童も一緒に「学校をつくる」ことを確認することで参画意識を高めた。【第四小】</p> <p>・授業研究会ごとに共通実践事項を切り出し、連続性のある研究推進を行った。(変化、変容を意識)【能代第二中】</p> <p>・研究部報の発行、研究の方向性等を可視化し職員室内に掲示した。内容は、書籍の紹介やカリキュラム・マネジメント関連の情報発信等である。声掛けや会話も効果的である。【二ツ井中】</p>

14	全体	<p>カリキュラム・マネジメントの側面iiiについて、地域の人的又は物的な資源等をどのように掘り起こし、把握しているのか。また、そのための窓口や担当等を学校運営組織の中どのように位置付けているか。</p>	<p>・地域学校協働活動の窓口は管理職になっているが、今後は、地域学校協働活動担当職員を設置して、学校全体で協働活動を推進できるような体制に移行していきたい。 ※回答2参照【第四小】</p> <p>・美術の授業において、エコバックのデザインを生徒が決めていくにあたり、学区の児童民生委員の方々のアンケートを基にした。また、制作したバックは、生徒が児童民生委員と共に配布している。本校の学区には三つの児童民生委員の組織があり、何名かは学校運営協議会委員にもなっていた。そのため、地域学校協働活動推進員を通して三つの委員会をつなぎ、生徒会等の地域活動を協働で行う体制を整えた。【能代第二中】</p> <p>・商店街事務局の方が地域の窓口になり、地域の人材や物品の情報提供、連絡調整等をしてくださっている。教職員が直接、企業や地域の人と交渉をする場合もある。また、カリキュラム・マネジメントは、担当部門の質の向上を図ることなので、学校組織に担当の位置付けをしていない。地域との連絡調整は、主に総合的な学習の時間の担当が行い、担当教員ももちろん行っている。【ニツ井中】</p>
15	全体	<p>学校における喫緊の重要課題についてカリキュラム・マネジメントを進めることになると思うが、その重要課題をどうやって決定したのか。校長判断（もちろん職員の同意を得るが）か、ボトムアップか。</p>	<p>・本校においては、ボトムアップである。職員が肌で感じている事柄をワークショップを通じて形に表し、実践した。【第四小】</p> <p>・各担当が校長と相談して、職員会議や運営委員会で提案した。【能代第二中】</p> <p>・校長を含めた運営委員会（例：主任会）等でいくつか課題を挙げ、それを職員会議等で諮り決定した。【ニツ井中】</p>

16	全体	<p>カリキュラム・マネジメントを推進する上で組織体制づくりはどのように進めたのか。</p>	<p>・既存の体制（運営委員会）を活用し、各部署で推進できることを持ち寄り、全体で確認し合うものとした。【第四小】</p> <p>・授業研究会における年間P D C Aサイクルのイメージを共有するとともに、能代市教育委員会の指導主事を招き、教科・学年を超えた視点での授業研究システムの構築について研修することで、組織体制づくりを行った。【能代第二中】</p> <p>・カリキュラム・マネジメント推進のための組織は、特に設けていない。これまでの指導部（学習、生徒指導、教務等）の組織体制で進めている。【二ツ井中】</p>
17	全体	<p>働き方改革が求められる現在、職員の負担が少なく効果が大きい取組が期待される場所である。単元配列表作成やP D C Aサイクルを回すこと等、求められることもある感じだが、実際のところ、カリキュラム・マネジメントは負担以上の効果が得られる取組となり得ているのか。</p>	<p>・既存の取組に、カリキュラム・マネジメントの視点を加えるという考え方で推進している。新たに作成した資料もあるが、そのことを目的にせず、取組自体がカリキュラム・マネジメントであることを確認しながら進めてきたことで、負担は小さいと考えている。【第四小】</p> <p>・効果を得ている。各種調査の結果が良好であることとそれぞれの取組に対する教職員の意欲を感じるからである。【能代第二中】</p> <p>・本校では、生徒の感想やアンケートからカリキュラム・マネジメントを進めることで、ふるさと学習やキャリア教育等を通じて、教育の質が高まってきたと考える。負担以上の効果については、明確に表すデータがないのが現状である。【二ツ井中】</p>

18	全体	研究体制（「カリキュラム・マネジメント検討会議」を位置付けること）の組織図より、秋田県教育委員会や秋田大学、秋田県総合教育センターは、各実践校に対してどのような関わりをしているのか。	研究を推進していく中で、年3回開催した検討会議を中心に、各校の実践について指導助言をいただいた。
19	全体	小中連携で行ってきていることを取り入れるために配慮する部分はどんなことが考えられるのか。	<ul style="list-style-type: none"> ・同じような取組や引き継げるような取組を洗い出し、有意義な連携にすることであると考える。更に連携を推進するためには、同じ視点で取組を協議する機会を設定することであると考える。【第四小】 ・小学校でどんな学び方を積み重ねてきているのかについて共通理解する必要がある。【能代第二中】 ・児童生徒の実態を把握することや、学校事情を考慮し小中学校職員間で話合いや情報共有をすること、小中で足並みを揃えて教育の質の向上に向けて取り組むことであると考える。【ニツ井中】

第3節 カリキュラム・マネジメント3か年計画について

本市では、令和5年度から全小中学校を対象に、カリキュラム・マネジメント3か年計画をスタートする。次年度に向けて、校長会で計画の内容を説明するとともに、各校に資料「カリキュラム・マネジメントとは？」を配布した。

カリキュラム・マネジメントとは？

令和4年12月
能代市教育委員会

児童（生徒）や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと。教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと。教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと

小学校（中学校）学習指導要領（平成29年度告示）解説

三つの柱

①内容の組織的配列

②PDCAサイクル

③外部資源の活用

次年度から、本市全小・中学校でカリキュラム・マネジメント3か年計画がスタートします。そのため、教職員一人一人が、カリキュラム・マネジメントについて自分の言葉で語ることが重要です。カリキュラム・マネジメントをより分かりやすくすると、次のように言い換えることができます。

各校が子どもたちの地域の実情等を踏まえて、学校教育目標を実現するために、学習指導要領等に基づき教育課程を編成し、それを実施・評価し改善していくこと

つまり、学校経営目標達成に向けて、全教職員が学校経営に参画意識をもち、児童生徒の資質・能力を育成していくことが大切です。

～カリキュラム・マネジメントをスタートするにあたり、学校・教職員が準備・意識しなければならないこと～

- 学校教育目標が言える。
- 学校教育目標達成のために、育成すべき資質・能力を全教職員で洗い出し、児童生徒にも分かるように可視化する。
- 育成すべき資質・能力をどの教科のどの単元で行うか「重点化」と「関連化」を図り、学年毎の単元配列表を作成する。
※今まで各校で行ってきた特色ある「キャリア教育」「防災教育」「ESD教育」等を核とした、教科等横断的な視点を取り入れると、カリキュラム・マネジメントが機能しやすい。
- 育成すべき資質・能力を、各指導部、学年経営目標、学級経営目標に反映させ、教職員一人一人が年間を通して意図的・計画的に、児童生徒の資質の能力の育成について意識付けを図ることができるよう、PDCAサイクルを確立する。
- それぞれの学校行事等は、どのような資質・能力を育てるのかについて説明できる。

本資料では、2年間の調査研究事業を経て、カリキュラム・マネジメントについて、以下のように定義付けた。

各校が、地域の実情等を踏まえて、学校教育目標を実現するために、学習指導要領等に基づき教育課程を編成し、それを実施・評価し改善していくこと

また、カリキュラム・マネジメント3か年計画をスタートする前に、学校・教職員が準備・意識しなければならないこととして、以下のことを明記した。

- 学校教育目標が言える。
- 学校教育目標達成のために、育成すべき資質・能力を全教職員で洗い出し、児童生徒にも分かるように可視化する。
- 育成すべき資質・能力をどの教科のどの単元で行うか「重点化」と「関連化」を図り、学年毎の単元配列表を作成する。
※今まで各校で行ってきた特色ある「キャリア教育」「防災教育」「ESD教育」等を核とした、教科等横断的な視点を取り入れると、カリキュラム・マネジメントが機能しやすい。

- 育成すべき資質・能力を、各指導部、学年経営目標、学級経営目標に反映させ、教職員一人一人が年間を通して意図的・計画的に、児童生徒の資質・能力の育成について意識付けを図ることができるよう、PDCAサイクルを確立する。
- それぞれの学校行事等は、どのような資質・能力を育てるのかについて説明できる。

3か年計画は、以下のとおりと考えている。

年 度	内 容
令和5年度（1年目）	<ul style="list-style-type: none"> ・全教科等の指導案に育てたい資質・能力及び関連する単元等を明記 ・令和4年度に実践校が作成した単元配列表を基に、各校全学年において単元配列表を作成
令和6年度（2年目）	<ul style="list-style-type: none"> ・教務・研究主任会において、単元配列表を持ち寄り、加除・修正を実施（単元配列表のPDCA）
令和7年度（3年目）	<ul style="list-style-type: none"> ・全教職員が学校教育目標のグランドデザインづくりに参画 ・育てたい資質・能力に沿って学年部及び各教科等の重点を設定 ・全教育活動においてPDCAサイクルの確立 ・校長会・教頭会において、カリキュラム・マネジメントについての協議の場を設置

3か年計画を進めるに当たり、校長のリーダーシップの下、カリキュラム・マネジメントを理解し、推進していく教職員の育成が求められる。若手教員であっても、ベテラン教員であっても、カリキュラム・マネジメントに積極的に関わっていくとともに、自己の授業実践・学級経営等においても、カリキュラム・マネジメントの視点を意識して取り組む教職員を育成していくことが大切である。

各校が、それぞれの特色を生かし、カリキュラム・マネジメントを実践しながら、全教職員が学校経営への参画意識をもつことで、児童生徒が、教職員が、地域がどんどん活性化していくことが期待される。そのため、教育委員会は、学校と一層よりよい関係を築きながら、カリキュラム・マネジメントを推進していく所存である。

〈参考文献〉

- ・「カリキュラムマネジメント・ハンドブック」ぎょうせい、2016（田村知子・村川雅弘・吉富芳正・西岡加名恵編著）
- ・「教育委員会・学校管理職のためのカリキュラム・マネジメント実現への戦略と実践」ぎょうせい、2020（村川雅弘・吉富芳正・田村知子・泰山裕編著）
- ・「これからの教育課程とカリキュラム・マネジメント」ぎょうせい、2020（吉富芳正・村川雅弘・田村知子・石塚等・倉見昇一編著）
- ・「カリキュラムマネジメントの理論と実践」日本標準、2022（田村知子）
- ・「教職研修」2021 12月号 教育開発研究所 特集1『カリキュラム・マネジメントの核心』

おわりに

令和3年、中央教育審議会において、「令和の日本型学校教育の構築を目指して」が取りまとめられました。一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが必要です。このような資質・能力を育むために、ICT環境を効果的に活用し、多様な児童生徒を誰一人取り残すことなく育成する「個別最適な学び」と児童生徒の多様な個性を最大限に生かす「協働的な学び」を一体的に充実させ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげることが大切だと考えます。また、その際には、カリキュラム・マネジメントの取組を一層進めることで、児童生徒の資質・能力の育成を意識した取組が全教育活動で行われることが期待されます。

さて、本調査研究にあたり、各校がカリキュラム・マネジメントを推進することは、全教職員が学校教育目標達成を目指し、学校経営に参画している自覚とやりがいをもって職務にあたることにつながると考えました。

2年間の研究により、カリキュラム・マネジメントの推進は、何よりも教職員一人一人がカリキュラム・マネジメントを理解し、他者に自分の言葉で説明できることが大切であると捉えております。そして、全ての教職員が見方・考え方を生かしたカリキュラム・マネジメントの考え方を日常の教育活動で意識することにより、児童生徒の成長を実感できることも重要です。

本市においては、文部科学省委託事業「これからの時代に求められる資質・能力を育むためのカリキュラム・マネジメントの在り方に関する調査研究」の指定を受け、第四小学校、能代第二中学校、二ツ井中学校が実践校となり、校長のリーダーシップの下、教職員が試行錯誤しながら一丸となって研究に取り組んでまいりました。どの実践校も、日常の教育活動が学校教育目標達成につながっていることを実感しながら、児童生徒の資質・能力の向上を目指すことができました。実践校の取組に心から感謝申し上げます。

本手引きは、実践校の成果のみならず、苦労した点等についても、できるだけ足跡を残すことを心掛けました。また、研究会等の動画を視聴することができるQRコードを掲載し、今後、カリキュラム・マネジメントに取り組む全ての学校に役立つ内容になるよう配慮しました。本市では、令和5年度から3か年計画により全ての学校においてカリキュラム・マネジメントによる教育活動を行うこととしたため、実践校以外の学校が、カリキュラム・マネジメントへの理解と実践への意欲が高まるよう、ポンチ絵「カリキュラム・マネジメントとは？」「カリキュラム・マネジメントQ&A」も掲載しました。

なお、カリキュラム・マネジメントを推進していくためには、専門的な知見から学ぶ機会が不可欠であるため、本市では、令和3、4年度に3回ずつ「カリキュラム・マネジメント検討会議」を開催し、指導者の方々（後掲の検討委員名簿参照）から貴重な御助言をいただきながら取組を進めてまいりました。

その他に、次のとおり、「カリキュラム・マネジメント調査研究」実地調査を開催し、実際の授業参観を通して御助言いただく機会も得ることができました。

令和3年度「カリキュラム・マネジメント調査研究」実地調査

【日 時】令和3年10月27日（水）

【訪問校】能代市立能代第二中学校

【訪問者】天笠 茂 氏（千葉大学 名誉教授）

堀田 雄大 氏（文部科学省初等中等教育局教育課程課 担当者）

坂根 悠子 氏（文部科学省初等中等教育局教育課程課 担当者）

令和4年度「カリキュラム・マネジメント調査研究」実地調査

【日 時】令和4年9月2日（金）

【訪問校】能代市立第四小学校

【訪問者】村川 雅弘 氏（甲南女子大学 教授）

赤沢 早人 氏（奈良教育大学 教授） ※オンラインによる参加

桑原 浩二 氏（文部科学省初等中等教育局教育課程課 担当者）

玉井 繭子 氏（文部科学省初等中等教育局教育課程課 担当者）

令和4年5月30日にオンラインで行われた令和4年度カリキュラム・マネジメント連絡協議会において、吉富芳正氏（明星大学 教授）より「カリキュラム・マネジメントは学校教育に本質的に不可欠。この先もずっと大事である。」という御指導をいただきました。本手引きを作成し、2年間にわたる調査研究が終了するのではなく、ここからがスタートだと考えております。本手引きを基に、各校がカリキュラム・マネジメントに挑戦し続けるとともに、教職員が自信とやりがいをもって職務に励むことができるよう、教育委員会として指導・支援してまいります。

結びになりますが、本市のカリキュラム・マネジメント推進にあたり、様々な機会において御指導・御助言くださいました企画評価委員及び検討委員の皆様、心から感謝申し上げます。今後とも一層の御指導・御鞭撻を賜りますようお願いいたします。

秋田県能代市教育委員会学校教育課

参事 三洲 龍太

令和3年度 カリキュラム・マネジメント検討委員名簿（敬称略）

	氏名	所属・役職等
指導者	細川和仁	秋田大学教育文化学部 こども発達・特別支援講座 准教授
	中井 淳	秋田県教育庁義務教育課 学力向上推進班主幹兼班長
	稲岡 寛	秋田県総合教育センター 研修班指導主事
	柴田 誠	秋田県教育庁北教育事務所山本出張所 管理・指導班指導主事
実践校関係者	高橋直樹	能代市立第四小学校校長
	大山 透	能代市立第四小学校教務主任
	佐藤俊之	能代市立能代第二中学校校長
	見上 司	能代市立能代第二中学校研究主任
	嶋田正明	能代市立二ツ井中学校校長
	年代信弥	能代市立二ツ井中学校研究主任
市教委事務局	高橋 誠也	能代市教育委員会教育長
	佐藤 充	能代市教育委員会学校教育課長
	安部 芳幸	能代市教育委員会学校教育課参事
	藤田 元之	能代市教育委員会学校教育課指導主事
	柴田 裕彦	能代市教育委員会学校教育課指導主事
	大山 祐子	能代市教育委員会学校教育課指導主事

令和4年度 カリキュラム・マネジメント検討委員名簿（敬称略）

	氏 名	所属・役職等
指 導 者	細 川 和 仁	秋田大学教育文化学部 こども発達・特別支援講座 准教授
	吉 田 茂 樹	秋田県教育庁義務教育課 学力向上推進班指導主事
	稲 岡 寛	秋田県総合教育センター 研修班指導主事
	柴 田 誠	秋田県教育庁北教育事務所山本出張所 管理・指導班指導主事
実 践 校 関 係 者	佐 藤 充	能代市立第四小学校校長
	大 山 透	能代市立第四小学校教務主任
	工 藤 真 弘	能代市立能代第二中学校校長
	佐々木 慎太郎	能代市立能代第二中学校研究主任
	大 塚 孝 樹	能代市立二ツ井中学校校長
	岩 澤 由 香	能代市立二ツ井中学校研究主任
市 教 委 事 務 局	高 橋 誠 也	能代市教育委員会教育長
	矢田部 瑞 穂	能代市教育委員会学校教育課長
	三 洲 龍 太	能代市教育委員会学校教育課参事
	藤 田 元 之	能代市教育委員会学校教育課指導主事
	柴 田 裕 彦	能代市教育委員会学校教育課指導主事
	大 山 祐 子	能代市教育委員会学校教育課指導主事

